

2021（令和3）年度 人間発達環境学研究科
年 次 報 告 書

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

はじめに

本学報告書は、人間発達環境学研究科における令和3(2021)年度の教育・研究・社会貢献等の活動の記録や取り組み内容が記載されたものであり、研究科の強み・特色を示した集積となっている。

新型コロナウイルスの感染が大きく拡大して2年目となった令和3年度は、事前の計画では対面授業を基本として事情に応じて遠隔授業を併用する基本方針でスタートしたが、4月23日に緊急事態宣言が発出され、遠隔授業中心とする方針に転換することとなった。当初から一部は遠隔授業を併用する計画であったこともあり、大きな混乱なく対応することはできたものの、学部の2年生や前期課程の2年生にとっては入学後2年続けて遠隔中心の大学生活となってしまった。

このような状況でも、これまで本研究科が取り組んできた多様な活動を継続・発展させることもおろそかにはできず、研究科として解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題、すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、教員らが専攻をこえて協働できるための枠組みづくりの必要性、ならびに多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金獲得の必要性、及び優秀な学生の積極的獲得の必要性などの観点からの取り組み・検討を進めた。また学域制（教員組織と教育研究組織の分離）や教員人事のポイント制のもとで、教員の新規採用および昇任について人事計画を進め、教育研究組織の活性化による機能強化につとめた。

令和3年度は機関別認証評価を受ける年度となり、訪問調査に向けた対応等の部局としての対応を行った。また、令和4年度からとなる第4期中期目標・中期計画期間に向けて、神戸大学として各種評価指標の目標値を設定し、部局にも応分の目標設定を求められることとなった。

こうした中でも、本研究科がこれまで唱えてきた「人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉える」という教育研究のアイデンティティは守っていくべきと考える。そのためには、着実に教育・研究・社会貢献に係る実績を重ね、学内外での研究科のプレゼンスをいっそう高めて行くことが重要と考える。

(人間発達環境学研究科長 青木茂樹)

2021(令和3)年度
人間発達環境学研究科 年次報告書 目次

はじめに

目次

1. 令和3年度の取り組みの概要	1
1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み	1
1.1.1 神戸大学機能強化改革	1
1.2. 部局としての取り組み	1
1.2.1. 戦略「社会課題を解決する文理融合研究の推進」	1
1.2.2. 講座の大きくくり化	2
2. 学部・大学院運営	3
2.1. 学部・大学院運営組織	3
2.2. 管理運営	3
2.2.1. 学域人事委員会	3
2.2.2. 研究科運営委員会	5
2.2.3. 教員活動評価委員会	7
2.2.4. 中期計画推進委員会	8
2.2.5. 自己評価委員会	8
2.2.6. 安全衛生委員会	9
2.3. 予算	9
2.3.1. 予算に関する特記事項	9
2.3.2. 予算関係の審議等の状況	10
2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)	10
2.4. 広報及び情報公開	11
2.4.1. パンフレット, ウェブサイト等	11
2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ	11
2.4.3. ホームカミングデイ	12
2.5. 環境設備	12
2.5.1. 教育・学習環境の整備	12
2.5.2. 交流ルーム・アゴラ	13
2.6. 教員研修	14
2.6.1. FD	14
2.6.2. 初任者研修	14
3. 入試	15
3.1. 一般選抜入試	15
3.1.1. 入学試験委員会	15
3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題	16

4. 国際交流活動	17
4.1. 学術交流協定	17
4.2. 留学生	17
4.3. ダブルディグリー	19
4.4. Innovative Asia	19
4.5. 学生・教員・職員の海外派遣	19
4.6. 海外研究者等の招聘・訪問	20
4.7. 「英語による授業の実践—ESD 研究」	20
5. 教育	20
5.1. 教育課程	20
5.1.1. 今年度の特徴	20
5.1.2. 研究科, 専攻共通科目	21
5.1.3. 教職教育	21
5.1.4. 博物館学芸員資格	22
5.1.5. ESD サブコース	23
5.1.6. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント	23
5.2. 各専攻講座の教育	24
5.2.1. 人間発達専攻	24
5.2.2. 人間環境学専攻	32
6. 進路	34
6.1. キャリア形成支援	34
6.1.1. キャリアサポートセンター	34
6.1.2. 学振特別研究員申請支援	37
6.2. 卒業・修了後の進路	38
7. 研究	38
7.1. 今年度の特長	38
7.1.1. 研究動向	38
7.1.2. 学生の受賞	39
7.2. 学術 Weeks	40
7.2.1 学術 Weeks の各事業・セミナー	40
7.3. 研究科支援プロジェクト研究	41
7.4. 高度教員養成プログラム	43
7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続共同研究	44
7.6. 研究推進	45
7.6.1. 研究推進委員会	45
7.6.2. 研究倫理審査委員会	46
7.6.3. 紀要編集委員会	46
7.7. 各専攻の研究	46

7.7.1. 人間発達専攻	46
7.7.2. 人間環境学専攻	81
8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動	103
8.1. 産官学共同プロジェクト	103
8.2. 地域連携プロジェクト	106
9. 社会的活動・震災復興支援	107
9.1. 災害地への支援活動	107
10. 附属施設	108
10.1. 発達支援インスティテュート	108
10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会	108
10.1.2. 心理教育相談室	109
10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター	111
10.1.4. のびやかスペースあーち	122
10.1.5. サイエンスショップ	130
10.1.6. 教育連携推進室	134
10.1.7. アクティブエイジング研究センター	139
10.2. 実習観察園の運営利用状況	143

1. 令和3年度の取り組みの概要

1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み

1.1.1 神戸大学機能強化改革

(1) 神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略

平成28年度からの第3期中期目標・中期計画期間は令和3年度が最終年度となった。神戸大学は、第3期中期目標・中期計画期間（H28年度～H33年度）における神戸大学の機能強化改革として、平成27年4月に神戸大学ビジョンとして、先端研究・文理融合研究で輝く卓越研究大学をかかげ、平成27年6月に文部科学省「国立大学経営力戦略」の3つの重点支援の枠組みの重点支援③「海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究、社会実装を推進する取組を中核とする国立大学」を選択した。

第3期中期目標・中期計画期間におけるビジョンの実現に向けて、以下の5つの戦略が実施されている。

- ・戦略1：先端研究の推進
- ・戦略2：社会課題を解決する文理融合研究の推進
- ・戦略3：先導的研究成果の社会実装への取組み
- ・戦略4：世界で活躍できる人材の育成
- ・戦略5：大学運営基盤の改革

なお、国際人間科学部の設置は戦略4「世界で活躍できる人材の育成」に位置づくものである。

(2) 神戸大学ビジョンを支える新たな教員組織・人事システム

平成28年5月19日開催の教育研究評議会において「神戸大学ビジョンを支える新たな教育組織・人事システム（案）」が承認された。この教員組織・人事システムは、教員の流動性の向上、組織間の教員配置の最適化、柔軟な改組の実現、教員数及び若手ポストの増加をねらいとし、教員の教育研究組織からの分離、ポイント制の導入及び学長裁量戦略枠の設定などを柱としたものである。

平成28年10月から教員組織と教育研究組織の分離が実施され、当研究科教員の全員が人間発達学域の所属となった。また、同時に教員人事委員会が設置され、教授人事の審査、及び採用・昇任人事に伴うポイントの管理が行われることになった。そして、平成29年4月にポイント制が正式導入され、現在に至っている。

（人間発達環境学研究科長 青木茂樹）

1.2. 部局としての取り組み

1.2.1. 戦略「社会課題を解決する文理融合研究の推進」

神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略「社会課題を解決する文理融合研究の推進」の取り組みの一つに、「文理融合の先端研究による未来世紀都市学の構築」があげられる。

平成30年度から、この取り組みを拡充するために、『well-being研究拠点』が新たに設置された。この拠点は、未来世紀都市を支える多様な人々のwell-being（人々の安全・安心の確保と豊かで質の

高い生活)を実現するために、多様化するアジア諸国の保健衛生課題の解決を目指す「アジア健康科学研究ユニット」、及び都市における人々の社会的連携や協調を実現させるプログラムの構築を目指す「社会関係資本研究ユニット」から構成される。

本研究科は「社会関係資本研究ユニット」として役割を果たすことになった。このユニットは、都市における人々の社会的連携(結束力、絆)やネットワーク等の社会関係資本を重視した持続可能なコミュニティ形成及び環境形成プログラムを考究し、社会実装を目指すものである。

令和2年度の「社会関係資本研究ユニット」の活動実績としては、WoS論文6編、競争的資金として科研費獲得4件は確保できたが、新型コロナの影響により2019年度まで地域の高齢者を迎えて継続的に開催していた対面での講習会は開催できず、研究者によるオンラインでのシンポジウムの開催のみとなった。

1.2.2. 講座の大きくくり化

人間発達環境学研究科は、心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻、及び人間環境学専攻の5専攻から成る研究科として平成19年4月に設置された。その後、平成25年4月に、人間それ自体の発達を対象に教育研究を担ってきた心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻の4専攻をまとめ人間発達専攻とし、人間発達専攻と人間環境学専攻の2専攻体制で教育・研究を行っている。

平成26年4月に文部科学省が公表した本研究科のミッションの再定義には、「今後、人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉えるため、異なる専門分野間の連携等の取り組みについて重点的に取り組むなど、総合的な研究を組織的に推進するとともに、我が国の社会課題解決・文化の発展に貢献することを目指す。」と記されている。

これまで、本研究科はこのミッションの実現に向け、人間の発達及びそれを支える環境に関わる新たな研究課題の設定、ならびに分野横断型研究の支援等の取り組みを行っている。

平成29年および令和2年度には外部評価を受けた。その結果、学際系の研究科として、教育・研究・社会的活動の成果を着実に蓄積していること、またそれらの活動は発展・深化を続けており、地域の課題に対して、その住民と連携する形で、研究と教育と社会活動を一体のものとして展開していること、及び高齢化、貧困、環境、共生社会などといったグローバルな課題に関する国際共同研究の推進やそれらの研究に学生を参画させる多様な取り組みが実施されていることなどが高く評価された。その一方で、本研究科が取り組んでいる多様な活動を将来にわたって継続・発展させていくために解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題も指摘された。すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、より多くの教員が専攻を越えて協働できるための枠組みづくりの必要性、多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金の獲得の必要性などである。

人間発達環境学研究科では、国際人間科学部の最初の卒業生が入学してくるのを機に、人間発達専攻内の4つの系講座(こころ系、表現系、からだ系、教育系)および人間環境学専攻の2つの講座(環境基礎講座、環境形成講座)をそれぞれに1講座にまとめ、各専攻を1講座で編成し、それまでの講座を教育研究分野に移行する組織再編を行った。この組織再編により研究・教育活動における連携と柔軟性が大きく強化されることが期待される。

2. 学部・大学院運営

2.1. 学部・大学院運営組織

神戸大学大学院人間発達環境学研究科及び発達科学部は、以下の組織で運営している。

<教授会等>

人間発達環境学域会議，神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授会，神戸大学発達科学部教授会

以下に委員会等の組織を列記する。その際，大学院に関係する組織については，その前に付される研究科名「神戸大学大学院人間発達環境学研究科」を省略し，学部に関係する組織については，「発達科学部」とした。

<管理運営>

学域人事委員会，教員活動評価委員会，研究科運営委員会，予算委員会，学舎検討委員会，中期計画推進委員会，自己評価委員会，交流ルーム運営委員会，安全衛生委員会，ハラスメント防止委員会，専攻運営会議

<研究>

研究推進委員会，研究紀要編集委員会，研究倫理審査委員会

<教務・学生>

教務委員会，学生委員会

<入試>

入学試験委員会，学生委員会（編入学入学者の募集及び選考に関わる事務），オープンラボワーキンググループ

<国際交流>

国際交流委員会，学術 WEEKS ワーキンググループ

<広報>

情報メディア委員会，研究科案内作成ワーキンググループ

<附属施設等>

図書委員会，実習観察園運営委員会，キャリアサポートセンター運営委員会，発達支援インスティテュート運営委員会，心理教育相談室運営委員会，ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会，のびやかスペースあーち運営委員会，サイエンスショップ運営委員会，教育連携推進室運営委員会，アクティブエイジング研究センター運営委員会

2.2. 管理運営

2.2.1. 学域人事委員会

学域人事委員会は，教員の採用及び昇任等，ポイントの管理・運用及び教育研究組織への配置に関

して、学域会議に発議する原案を審議する委員会である。学域人事委員会の構成は、学域長、副学域長、人間発達環境学研究科専攻長、発達科学部学科長、及び国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）であり、令和3年度の委員は青木茂樹学域長（委員長）、平山洋介副学域長、近藤徳彦副学域長、稲垣成哲人間発達専攻長・発達科学部人間形成学科長、近江戸伸子人間環境学専攻・発達科学部人間環境学科長、長ヶ原誠発達科学部人間行動学科長、田畑暁生発達科学部人間表現学科長、並びに吉田圭吾国際人間科学部発達コミュニティ学科長、太田和宏国際人間科学部環境共生学科長、木下孝司国際人間科学部子ども教育学科長の10名である。また、春名正基事務部長、藤村さとみ総務係長も出席した。また、国際人間科学部に大きく関わる案件の審議にあたっては、梅宮弘光国際人間科学部副学部長の陪席を求めた。

学域人事委員会の開催日及び検討事項については、以下に記す。

	検討事項
第1回（4月2日）	1. 令和3年度人間発達環境学域人事方針について 2. 教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について 3. （その他）神戸大学人間発達環境学域テニユアトラック制に関する規程について
第2回（5月7日）	1. 教授昇任人事について
第3回（6月4日）	1. 助教採用人事について（人事選考委員会報告） 2. 助教採用人事に係る人事選考委員会の設置について
第4回（7月2日）	1. 助教採用人事に係る人事選考委員会の設置について 2. 今後の助教採用人事について
臨時：7月30日	1. 「任期の定めのない助教とするための審査基準」の再検討について
第5回（9月10日）	1. 新規採用教員の配置教育研究分野等について 2. （その他）任期の定めのない助教とするための審査基準について
臨時：9月21日	1. 新規採用教員の国際人間科学部の配置学科等について
第6回（10月15日）	1. 助教採用人事について 2. 教員の早期退職について 3. 助教採用人事の公募について 4. （その他） （1）ポイント表について （2）助教の選考に係る確認事項等について （3）令和3年10月1日付け人間発達環境学域教員人事配置について
第7回（11月5日）	1. 助教採用人事について 2. 助教採用人事の公募について 3. 新規採用教員の配置教育研究分野等について

	4. ポイント供出について 5. (その他)任期の定めのない助教とするための審査の時期について
第8回 (12月3日)	1. 教員の退職について 2. 外部資金で雇用する特命助教の任期更新について 3. 新規採用教員の配置教育研究分野等について
第9回 (1月7日)	1. 第3期中期目標期間における人事方針と結果の総括について 2. 教員の退職について
第10回 (2月9日)	1. 神戸大学人間発達環境学域テニユアトラック制に関する規程等の一部改正について 2. 第3期中期目標期間における人事方針と結果の総括について
第11回 (3月2日)	1. (その他) <ul style="list-style-type: none"> ・令和4年度の会議日程について ・令和4年度の委員会構成について

(人事委員会委員長 青木茂樹)

2.2.2. 研究科運営委員会

研究科運営委員会は、研究科長、副研究科長、専攻長(2名、ただし2名は学科長を兼ねる)、発達科学部学科長(3名)に、研究科運営委員会規則第2条(5)その他委員会が必要と認めた者として、国際人間科学部における発達コミュニティ学科長の吉田圭吾教授、環境共生学科長の太田和宏教授及び子ども教育学科長の木下孝司教授に加えた10名体制で、研究科等の管理を円滑に行うために組織及び運営に関し包括的な事項を扱ってきた。なお、国際人間科学部に大きく関わる案件の審議にあたっては、梅宮弘光国際人間科学部副学部長の陪席を求めた。検討事項は、以下のとおりである。

	検討事項
第1回 (4月2日)	1. 予備審査委員会委員候補者について 2. 新型コロナウイルス対策 3. 国際人間科学部関係の案件 4. 博士学生フェロシップ制度 5. (その他)奨学寄附金について
第2回 (5月7日)	1. 新型コロナウイルス対策(情報共有) 2. 「学長と部局長等との懇談会」 3. 教育戦略企画部門 高大接続将来構想WG 4. (その他)奨学寄附金について
第3回 (6月4日)	1. 新型コロナウイルス対策(情報共有) 2. 「学長と部局長等との懇談会」 3. 今後の予算状況 4. 概算要求

	<ol style="list-style-type: none"> 5. (その他) <ul style="list-style-type: none"> ・神戸大学博士学生フェローシップ ・奨学寄附金について
第4回(7月2日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 令和3年9月修了予定者に係る博士学位論文審査委員候補者(案)について 2. 令和4年度サバティカル制度適用教員について 3. 新型コロナウイルス対策(情報共有) 4. 概算要求 5. 特別支援免許に関する対応 6. (その他)奨学寄附金について
第5回(9月10日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新型コロナ関連 2. 「2030年に向けた神戸大学マスターデータ」の作成 3. 特別支援免許に関する対応 4. 部局長会議(9/9)報告 5. (その他)奨学寄附金について
第6回(10月15日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予備審査委員会委員候補者(案)について 2. 副研究科長選考規則の改正 3. 国際人間科学に関する案件の取扱い 4. 新型コロナ関連 5. 部局長会議(10/14)報告 6. 研究力の国際化加速事業 7. (その他) <ul style="list-style-type: none"> ・「部局年次計画等に関するヒアリング」(11/17)にむけて ・奨学寄附金について
第7回(11月5日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学位論文の審査(内見委員会の設置)の依頼について 2. 新型コロナ関連 3. 「部局年次計画等に関するヒアリング」(11/17)にむけて 4. 国際人間科学部関係の案件
第8回(12月3日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新型コロナ関連 2. バイアウト制度利用申請 3. 新任教員関連(授業担当、居室など) 4. 「部局年次計画等に関するヒアリング」(11/17) 5. 「機関別認証評価訪問調査」(12/3) 6. JSTフェローシップ「次世代研究者挑戦的研究プログラム」 7. (その他)奨学寄附金について
第9回(1月7日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 令和3年度3月修了予定者に係る博士学位論文審査委員候補者(案)について 2. 博士課程を経ない者の学位論文審査に係る内見結果およ

	び博士論文審査委員候補者（案）について 3. 新型コロナ関連 4. 第4期中期目標・中期計画に係る評価指標の目標値等に関する意見交換 5. 大学教育推進機構（国際コミュニケーションセンター）雇用の外国人特任教員について 6. （その他） <ul style="list-style-type: none"> ・研究指導計画調書（機関別認証評価訪問調査への対応） ・次世代研究者挑戦的研究（SPRING）プログラム ・「預入れ金」に関して ・奨学寄附金について
第10回（2月8日）	1. 新型コロナ関連 2. 第4期中期目標・中期計画に係る評価指標の目標値等に関する意見交換（1/21） 3. R4年度の予算案編成に関して 4. （その他）次世代挑戦的研究者育成（SPRING）プログラム
第11回（3月2日）	1. 連携講座の教授、准教授の委嘱について 2. 令和4年度外国人研究員の選考について 3. 研究科運営委員会規則の改正 4. 新型コロナ関連 5. 第4期中期目標・中期計画に係る評価指標の目標値等に関する意見交換（最終） 6. R4年度の予算案編成、戦略的事業経費について 7. （その他）次世代挑戦的研究者育成（SPRING）プログラム 8. 社会変革を先導する「異分野共創研究教育グローバル拠点」の形成

（研究科運営委員会委員長 青木茂樹）

2.2.3. 教員活動評価委員会

神戸大学教員活動評価が実施されて8年目となる。昨年度と同様、教員活動評価委員会内規第3条に基づき、研究科長、副研究科長、専攻長に、その他研究科長が必要と認めた者として発達科学部学科長及び国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）を加えた10名体制で臨んだ。

また、昨年度合意した評価の方法や基準等を基本的に踏襲しつつ、その都度問題がないか慎重に判断しながら、手続を進めた。「教員活動評価結果通知書」配布後、評価指標の定義の取違い（誤解）に基づく1件以外には「意見の申出」はなかった。

教員活動評価委員会は、6月4日、7月2日、10月15日に開催した。

（教員活動評価委員会委員長 青木茂樹）

2.2.4. 中期計画推進委員会

令和3年度は、研究科長（委員長・青木茂樹）、副研究科長（平山洋介、近藤徳彦）、研究推進委員会委員長（青木茂樹）、教務委員会委員長（佐藤真行）、学生委員会委員長（大串健一）、国際交流委員会委員長（野中哲士）、入学試験委員会委員長（平山洋介）、キャリアサポートセンター長（澤宗則）、情報メディア委員会委員長（宮田任寿）、自己評価委員会委員長（田畑暁生）、事務部長（春名正基）の構成員に加え、総務係長（藤村さとみ）が出席し、月1回の定例会議を開催した（計11回）。

「中期目標の遂行、見直しに関する事項」を所掌する本委員会では、毎回、研究科長から部局年次計画に関わる全体的な状況が説明された。その後、各委員会等からそれぞれの活動内容が報告され、年次計画の進捗状況を確認し合うとともに、各委員会における計画実施の促進、ならびに委員会相互の情報の共有と連携可能性について検討した。

また、「第二期中期目標・中期計画管理表」における令和3年度実績について各委員会に対し回答を求め、それらを踏まえたうえで本研究科の年次計画管理表の再確認を行った。

（人間発達環境学研究科長 青木茂樹）

2.2.5. 自己評価委員会

本年度は、副研究科長（平山洋介、近藤徳彦）、委員長（田畑暁生）、副委員長（福田博也）、委員（高田義弘、相澤直樹、山口悦司、江原靖人）、事務課長の9名の構成員ならびに総務係長（藤村さとみ）が出席した。6回の委員会の開催、3回のメール会議の実施によって、以下の事項について取り組んだ。

(1) ファカルティ・ディベロップメント

・授業のピアレビュー

大学院の授業を対象にピアレビューを実施している。各専攻から選定された授業の参観および授業担当者と参観者との意見交換が行われ、2科目の授業を対象に延べ4名の教員が参加した。両授業ともに新型コロナウイルス感染拡大防止のため遠隔授業で実施した。次年度の授業改善に向けて強化できる点がピアレビューレポートとして報告された。

・ファカルティ・ディベロップメント講演会

大学教員としての能力開発を目的として、2回のファカルティ・ディベロップメントを実施した。参加者の延べ人数は、193名（教員181・職員等12）であった。今年度のテーマは、科研費の獲得にまつわるものと、内定獲得者紹介システムに関するものであった。

(2) Voice Box（「学生の声」投稿箱）への対応

本年度投稿はなかった。

(3) 各種アンケートの実施と検討

学部、研究科前期課程について、学修の記録、入学・進学時アンケート、授業振返りアンケート、卒業・修了時アンケートを内容修正のうえ実施するとともに、結果の分析を行った。

(4) 令和3年度学生・教職員による教育懇談会

研究科から2名の学生が出席した。懇談会の模様は実施報告にまとめられ、教育環境の改善について検討された。

(5) 教育の内部質保証に関する自己点検・評価

令和 2 年度「教育の内部質保証に関する自己点検・評価」に関する一次点検・評価を行い、報告書を作成した。

(6) 大学機関別認証評価に関する作業

大学機関別認証評価（令和 3 年度受審）のため「自己評価書」「根拠資料・データ」の作成を行った。

(7) 令和 3 年度年次報告書の作成

令和 3 年度の本学部・研究科における教育・研究活動を集約し、年次報告書を作成した。

（自己評価委員会委員長 田畑暁生）

2.2.6. 安全衛生委員会

1) 令和 3 年度委員

委員長（高田義弘）、委員（清野未恵子、岸本吉弘、谷篤史、大野朋子）、春名正基（事務課長）、藤村さとみ（総務係長）、篠原千亜紀（人間科学図書館情報サービス係長）

2) 委員会を 2 回開催した（5 月 25 日（対面）、3 月 14 日（オンライン））

3) 委員会の業務・点検事項報告とその対策の検討・その他改善を要する点の検討・全学安全衛生委員会の報告・その他

4) 定期点検委員による学舎内共用部点検を月に一回実施し、各委員が担当場所の点検報告を行った。

5) 本年度の実施事項

- ・巡視（廊下の物品の撤去）について協力依頼を行うとともに、教職員及び学生に節電対策の理解と協力を呼びかけた。
- ・コロナ感染拡大予防に関して、飛沫感染が否定できない状況であると思われるので、部屋の換気を充分に行うことを依頼し、その際はエアコンの設定温度を臨機応変に設定して頂くように依頼した。
- ・6 月の全学安全衛生委員会で衛生管理者による F 棟 4・5 階の巡視の報告をおこなった。
- ・令和 3 年 7 月より全学敷地内禁煙となったため、鶴二キャンパス内の A 棟外側に設置していた喫煙所を撤去し、またキャンパス入り口前に「全面禁煙」の立て看板を設置した。
- ・A 棟 1 階北側出入口にスロープが設置された。

6) 課題

- ・共有スペースにおける不要物の撤去依頼を継続する。
- ・什器等についての転倒、落下防止措置についての注意喚起を継続する。
- ・省エネルギーへの協力依頼を継続するが、コロナ感染拡大予防の観点から部屋の換気を充分行い、エアコンの設定温度は臨機応変に対応することを継続する。

（安全衛生委員会委員長 高田義弘）

2.3. 予算

2.3.1. 予算に関する特記事項

(1) 令和 2 年度（2020）決算について

新型コロナウイルスの影響により教育研究経費の支出が滞ったため、学内資金の預り・貸付制度の新型コロナ対策事業に200万円の追加預け入れをした。さらに建物修繕費や環境整備費に追加支出した。追加支出でも執行できなかった残額255万円は本部へ返還となった。

(2) 令和3年度(2021)当初予算配分再編成(5月)について

学生当経費について5月1日現在の学部生(発達科学部)及び大学院生の員数確定及び博士実験系の申請に基づき再編成を行った。

(3) 令和3年度(2021)当初予算配分再編成(10月)について

学生当経費の研究生の人数が確定したことによる再編成を行った。また、新型コロナウイルスの影響を受けて支出予算の再編成を行った。さらに学内資金の預り・貸付制度を利用して研究推進支援事業に1千万円、教育支援推進事業に1千万円、ポストコロナ教育研究支援事業に500万円の預入を申請することとなった。

(4) 令和4年度(2022)当初予算配分について

収入予算では預け入れしていた研究推進支援事業と教育支援推進事業から640万円と720万円を引き出した。また、国際人間科学部予算からの研究科運営負担額が1,307万円減の1,513万円となり、収入予算総額は対前年同月比で4,452,700円減となった。

支出予算では収入予算減を受け、研究費を筆頭に各項目で減額調整をした。

(予算委員会委員長 澤宗則)

2.3.2. 予算関係の審議等の状況

(1) 令和2年度(2020)決算について

令和3年5月17日の予算委員会で審議し、令和3年5月21日の教授会において審議・承認された。

(2) 令和3年度(2021)当初予算配分再編成(5月)について

令和3年5月17日の予算委員会で審議し、令和3年5月21日の教授会において審議・承認された。

(3) 令和3年度(2021)当初予算配分再編成(10月)について

令和3年10月14日の予算委員会で審議し、令和3年10月22日の教授会において審議・承認された。

(4) 令和4年度(2022)当初予算配分について

令和4年3月17日の予算委員会で審議し、令和4年3月18日の教授会において審議・承認された。

(予算委員会委員長 澤宗則)

2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)

外部資金の獲得状況については、その詳細を資料編(特に「11-3-1~5」参照)に掲載しているため、ここでは特徴的な点を指摘するにとどめる。

令和3年度科学研究費補助金の獲得は、63件(新規:20件)、総額166,000千円であった。内訳は、基盤研究(S):継続1件、基盤研究(A):2件(新規:1件)、基盤研究(B):18件(新規:5件)、基盤

研究(C) : 23 件 (新規 : 6 件), 挑戦的研究 (萌芽) : 8 件 (新規 : 3 件), 若手研究 : 5 件 (新規 1 件), 国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化(A)) : 継続 1 件, 国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化(B)) : 3 件 (新規 2 件), 学術変革領域研究(A) : 新規 2 件となっている。新規 1 件の基盤研究(A)をはじめ基盤研究(B) (C)の採択数の堅調な増加が特徴的である。

今後、研究推進委員会等において、科研費制度改革の留意点を再考しながら、次年度以降の科学研究費補助金の獲得に向けての検討が必要と思われる。

日本学術振興会特別研究員について、令和 3 年度は DC1 5 名 (新規 : 3 名), DC2 4 名 (新規 : 3 名) および PD 継続 1 名が採用された。DC1 および DC2 で例年に較べて多数が採択された。10 年以上にわたって毎年開催している学生委員会主催の申請に係る説明会に加えて、学術・産業イノベーション創造本部・学術研究推進部門 (UR A 室) の支援を得て、計画調書 (申請書) の書き方セミナーや推敲のためのワークショップの開催により、申請数の増加につながった。

受託研究について、令和 3 年度は 15 件、総額 7,872 万円 (令和 2 年度 12 件、総額 7,798 万円)、共同研究については、11 件、総額 1,103 万円 (令和 2 年度 13 件、総額 1,021 万円) となった。

(人間発達環境学研究科長 青木茂樹)

2.4. 広報及び情報公開

2.4.1. パンフレット、ウェブサイト等

(1) 研究科案内 (パンフレット)

2023 年 4 月入学者向け研究科案内 (研究科案内 2021) を作成した (発行は 2022 年 4 月 1 日)。研究科案内 2021 は 24 ページで構成され、研究科の教育、研究、国際学術交流、社会貢献、各専攻に関する特色について掲載した。

(2) 研究科ウェブサイト

研究科ウェブサイト (<http://www.h.kobe-u.ac.jp>) は、最新の CMS (コンテンツ管理システム) 用に作成したデザインテンプレートを導入し、全面改装を行った。これにより、セキュリティ、保守性、効率性を向上し、今後は更なる広報的効果が期待される。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ

平成 28 年度に始まった人間発達環境学研究科主催の「オープン・らぼ」は、「オープンらぼウィークス」という研究室訪問期間を設け、参加希望者が予め個別に教員に連絡して面談の予約をとり、「オープンらぼウィークス」の期間中の任意の日時に面談を行うというものである。

令和 3 年度に関しては、新型コロナウイルス感染拡大の防止のため、オンライン面談の方式をとった。申込み受付期間を 5 月 17 日から 6 月 4 日、また、面談期間を 6 月 7 日から 7 月 2 日までとした。その結果、人間発達専攻での面談者は 77 名 (昨年度は 82 名)、人間環境学専攻での面談者は 7 名 (昨年度は 7 名)、計 84 名 (昨年度 89 名) であった。

「オープン・らぼ」開催の目的は、人間発達環境学研究科の理念や特徴、養成しようとする人材像等を広く発信するとともに、ひいては大学院の受験生を増加させる点にある。人間発達専攻では、面談者が多い。面談者が増えることは、本専攻の発展を反映・促進するとみられる。一方、人間環境

学専攻では、面談者数は、一桁にとどまったままであった。この専攻の存在と特徴をより広く発信していく必要が指摘される。

(人間発達環境学研究科 オープン・らぼ WG 主査 平山洋介)

2.4.3. ホームカミングデイ

1) 2021 年度第 15 回 (国際人間科学部：旧発達科学部) ホームカミングデイの開催

本年度の神戸大学ホームカミングデイ (第 15 回) は、新型コロナウイルス感染症による影響が継続している状況を踏まえ、対面での開催は中止とし、10 月 30 日に本部での記念式典を行い、これ以降 1 か月間、動画を閲覧できるようにするオンデマンド形式で開催された。

2) 学部企画

まず、本部からは昨年の中止を踏まえて、今年度は何としても学部企画を実施して貰いたいという強い要望があった。そこで、コロナ禍で、どのような形態での実施ができるのか、手探りでプランを考えることから始めた。ホームカミングデイの参加者が卒業生であることから、今の大学の現状を知ってもらうことが大切だと考えた。そこで、大学における「授業」に焦点を当て、講義を提供する側の教員と、受講する側の学生の両方の意見を、できるだけ生の形で届けたいということで、学部企画としては、以下の 3 つを計画した。

ア) 学部長挨拶

イ) コロナ禍での授業紹介

ウ) 学生座談会

学部長挨拶では、青木茂樹発達科学部長に挨拶をお願いした。次に、コロナ禍での授業紹介では、稲葉教員の遠隔授業に対する戸惑いや混乱を経て、何とか遠隔授業としての特長も生かしつつ工夫を試みている事例の紹介があった。学生座談会では、国際人間学部生の有志 4 名による座談会を行った。この座談会では、突然始まった遠隔授業に関して困ったことや、通学が無くなって助かるなどの利点もあるとの紹介があった。敢えて、学生のみでの座談会に拘ったのは、学生の本音が聞けるのでは、という期待があった。実際、本当の気持ちに近い話が聞けたのではないかと自負している。協力してくれた 4 名の学生に感謝したい。

3) 今後の課題と反省点

今後の課題としては、コロナ禍が解消していれば、元の開催方法に戻せるわけで、特に大きな問題ではないが、コロナ禍が、この後数年続く可能性もあり、より双方向の実施を目指して計画することが望まれる。

来年は、今回の色んな学部の実施状況を見ながら、それらの良い所を参考に実施計画を立てることができる。他学部での講演会や学生・院生の研究紹介、オープンキャンパスの動画や授賞式などの企画が目をつけた。

(第 15 回発達科学部ホームカミングデイ実行委員長 稲葉太一)

2.5. 環境設備

2.5.1. 教育・学習環境の整備

(1) 各種施設・設備

学生の教育環境を充実させるため、A棟教室 (A325)、B棟教室 (B101・B103・B104・B106・B108・B201・B203・B208・B212・B208・B210・B212)、G棟教室 (G112・G302) のHDMI ケーブル配線施工を行った。

その他、各種施設・設備の整備に関しては、【資料編】「11-1-4. 教育研究施設の整備状況」を参照されたい。

(事務課長 春名正基)

(2) キャンパス内ネットワーク環境整備

本研究科で利用できる無線 LAN は、神戸大学情報基盤センターが管理する全学用無線 LAN と、本研究科が独自に管理するものが存在する。2021 年度は、合計 13 箇所のアクセスポイント (A 棟に 1 台、B 棟に 5 台、C 棟に 1 台、F 棟に 5 台、G 棟に 1 台) を増設した。

本研究科では、学生向けメーリングリストの運用を行っている。メーリングリストは学生が所属する公式組織 (コースなど) 単位で構成され、教務、学生生活、キャリアサポートに関する情報などが配信された。また、部局内の 3 箇所に設置されている電子掲示板の運用も行なっている。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

(3) 図書館運営・整備

昨年度からの新型コロナウイルス感染拡大に伴い、本年度も遠隔授業併用となったため、昨年度に引き続き通常とは異なる運営となった。4 回の附属図書館運営委員会は Web 開催、5 回の人間科学図書館図書委員会はメール審議となった。

図書予算は前年とほぼ同額の 3,350 千円であった。コロナ禍の影響により教員推薦図書、学生希望図書の選定冊数が減少したが、検定教科書の収集対象数が多かった (78 冊→302 冊) ことから、全体の購入冊数も同程度となった (1,101 冊→1,116 冊)。遠隔授業併用により学生の来学機会が少なく開館時間も短縮しているが、貸出率は例年と同水準まで戻っている。また貸出更新が多くなっていることから回転率が大幅に上昇している (回転率: 令和元年 137.41%→令和 2 年 96.79%→令和 3 年 170.98%)。

遠隔での利用に対応するため電子書籍購入予算を配分して 34 タイトルを選定し、その他にも可能な範囲で電子書籍での購入を行った。今後も参考図書等の禁帯出資料や回転率の高い図書については希望する利用者に広く提供できる電子書籍を予算の可能な範囲で拡充していくべきである。また、電子書籍の募集は教員ごとで行ったが、予算を大幅に上回る推薦があった。今後の電子書籍の拡充のために、利用統計の方法、及び予算配分や募集方法について検討が必要である。

利用促進策として館内での新着案内や展示を継続しているが来館機会の少ない中でも効果的な方法を工夫していく必要がある。

(図書委員会委員長 鳥居深雪)

2.5.2. 交流ルーム・アゴラ

今年度も新型コロナウイルスの感染拡大の影響があったが、感染対策やワクチン接種などが進んできたために、交流ルームは衛生管理のアドバイスを受けながら細々と営業を継続した。平日 12 時～

16 時まで感染対策を施して運営し、食事と飲み物を提供した。

体制

今年度は、スタッフ(非常勤職員)5名(うち3名は知的障害のある職員)で運営を行った。3月～10月の休業中、スタッフは「のびやかスペースあーち」及び人間系図書室での消毒作業、附属特別支援学校での清掃研修等を行った。

活動状況

- ・今年度は新型コロナウイルスの影響で、授業やオープンキャンパスで利用することはなかった。
- ・学内の専門家の助言を受けて新型コロナウイルス対策のマニュアルを策定し、メニューも限定的にしたうえで、飲料と食事を提供した。
- ・知的障害のあるスタッフのうち1名は、交流ルームでの業務の他に、会議室や教室の清掃に従事した。
- ・スタッフは、教員ボックスへの郵便物の配架作業、及び人間系図書室の消毒作業と廃棄書籍の処理作業を行った。

展示

その他・新型コロナウイルスの感染対策として、マニュアルを策定し、消毒液の設置、定期的な換気などを行った。附属特別支援学校と博物館実習とのコラボ作品展が好評で、メディアにも報道され、観に来られなかった方々にもこの試みを広く知って頂くことができた。

<https://diamond.jp/articles/-/286979>

(交流ルーム運営委員会委員 大田美佐子)

2.6. 教員研修

2.6.1. FD

研究科FD記録、及び神戸大学HP 大学教育推進機構「FD活動」FDカレンダーより抜粋したFDについて、以下に記す。

- (1) 9月3日 基盤研究Bへの挑戦に向けた準備と制度の変更点について
- (2) 10月22日 内定獲得者紹介システム

(人間発達環境学研究科長 青木茂樹)

2.6.2. 初任者研修

情報メディア委員会では、毎年、着任した教員に対して、情報セキュリティに関する研修会を開催している。今年度は、2021年4月に教員4名、10月に教員5名、2022年1月に教員5名が着任されており、合計3回(2021年4月6日、2021年10月6日、2022年1月5日に開催)の研修会を開催した。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

3. 入試

3.1. 一般選抜入試

3.1.1. 入学試験委員会

本研究科及び発達科学部が関係する入学試験全体を所管する入学試験委員会は、研究科長、副研究科長、専攻長、学生委員会委員長の計 6 名で構成し、令和 3 年度委員長を平山洋介副研究科長が務めた。なお、学部の入学試験は国際人間科学部入学試験委員会の所掌下にある。

今年度の審議概要（日程と議題）は以下のとおり。

・第 1 回（4 月 14 日）

- (1) 令和 4 年度大学院募集要項について
- (2) 令和 4 年度入学者に係る入学試験日程について
- (3) 令和 3 年度入学者状況について

・第 2 回（4 月 23 日）（持ち回り審議）

- (1) 令和 4 年度博士課程前期課程人間環境学専攻推薦入学試験実施方法について

・第 3 回（6 月 16 日）

- (1) 新型コロナウイルスに係る入学者選抜への対応について

・第 4 回（7 月 13 日）

- (1) 令和 4 年度博士課程前期課程推薦入学試験合格者の判定について
- (2) 前期課程入試における受験上の特別配慮について

・第 5 回（8 月 31 日）

- (1) 令和 4 年度博士課程後期課程人間環境学専攻（第 I 期）入学試験・進学者選考試験合格者の判定について

・第 6 回（9 月 29 日）

- (1) 令和 4 年度博士課程前期課程入学試験合格者の判定について
- (2) 令和 4 年度博士課程前期課程入試（2 次募集）募集要項について

・第 7 回（11 月 5 日）（持ち回り審議）

- (1) 令和 6 年度（令和 5 年度実施）入試における入試方法の変更について
- (2) 令和 4 年度大学院入試の入試情報の開示基準について

・第 8 回（1 月 17 日）

- (1) 令和 4 年度博士課程前期課程入学試験（第 2 次募集）合格者の判定について
- (2) 令和 4 年度博士課程前期課程 1 年履修コース入学試験合格者の判定について

- (3) 令和 4 年度博士課程前期課程入学試験（第 3 次募集）募集要項について
- (4) 令和 5 年度博士課程前期課程人間環境学専攻推薦入学試験募集要項について

・第 9 回（3 月 2 日）

- (1) 令和 4 年度博士課程前期課程入学試験（第 3 次募集）合格者の判定について
- (2) 令和 4 年度博士課程後期課程人間発達専攻，人間環境学専攻（第Ⅱ期）
入学試験・進学者選考試験合格者の判定について

（入学試験委員会委員長 平山洋介）

3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題

今年度の間人発達環境学研究科の一般選抜入試に関する業務は、関係各位の尽力により大過なく遂行された。

平成 28 年度から導入された博士課程前期課程の英語外部試験は本年度も継続され、合否判定に有効に活用された。人間発達環境学研究科博士課程前期課程の学生定員に関しては、平成 28 年度より人間発達専攻では 52 名から 51 名に、人間環境学専攻では 40 名から 36 名に削減され、研究科全体の定員は、92 名から 5 名減の 87 名となった。人間環境学専攻では、今年度より推薦入学試験が導入された（募集人員 18 名）。

博士課程前期課程の令和 4 年度入学試験結果は、人間発達専攻では、募集人員 51 名に対し、志願者数 94 名（志願倍率 1.84 倍）、合格者数 50 名であった。人間環境学専攻では、まず推薦入学試験については、募集人員 18 名に対し、志願者数 17 名（志願倍率 0.94 倍）、合格者数 17 名、それ以外の入学試験については、募集人員 18 名、志願者数 14 名（志願倍率 0.78 倍）、合格者数 9 名であった。人間環境学専攻では、合格者数が定員に達しなかったため、募集人員を 10 名程度とする第二次募集を実施した。その結果、志願者数 8 名、合格者数 8 名であった。同専攻では、第二次募集を実施しても、合格者の総計が 34 名で、入学定員に達しなかった。このため、募集人員を若干名とする第三次募集を実施したところ、志願者数 3 名、合格者数 2 名であった。この結果、合格者総計が入学定員と同数になった。外数としている人間発達専攻（一年履修コース）の入学定員 4 名に対しは、志願者数 6 名、合格者数 5 名であった。これらの入試の結果、研究科全体では、定員 91 名に対し、志願者数 142 名（志願倍率 1.56 倍）、合格者数 91 人となった。博士課程後期課程については、人間発達専攻では、入学定員 11 名に対し、志願者数 17 名（志願倍率 1.55 倍）、合格者数 11 名、人間環境学専攻では、定員 6 名に対し、志願者数 4 名（志願倍率 0.67 倍）、合格者数 4 名であった（第Ⅰ期と第Ⅱ期の合計）。研究科全体に関しては、定員 17 名に対し、志願者数 21 名（志願倍率 1.24 倍）、合格者数 15 名となっている。

人間環境学専攻では、博士前期課程に関し、第三次募集を実施する状況がみられ、受験者の確保は、いっそう重要な課題となっている。受験者を増やすために、(1)同専攻については、2020 年度から英語での受験を可能とし、さらに、(2)両専攻とも、2021 年度入試から社会人特別枠における英語の配点割合を下げ、専門科目を重視した採点を行うことで、社会人受験生の増加を図った。これに加え、(3)人間環境学専攻に関し、今年度から推薦選入試を導入した。これらの一連の制度改革がどの程度の効果をあげるのかをみていく必要がある。一方、研究科に直結する学部の定員が減少し、その影響

が2021年度入試から現れている可能性があり、この点の把握・分析が求められる。大学院受験生の確保のあり方を引き続き検討していきたい。

入学試験に関する詳細なデータは『資料編』に掲載する。

(入学試験委員会委員長 平山洋介)

4. 国際交流活動

依然として新型コロナウイルス感染症の影響が続くなか、国際交流事業計画は大きな影響を受けたが、今年度は令和4年1月以降「学習計画に必要不可欠な」渡航にかぎり大学間協定に基づく大学院生の留学派遣申請が認められる方針が全学的に定められるなど、徐々に国際交流再開の兆しが見られつつある。本研究科からも1名、令和4年度に大学院生を協定校に派遣することになり、また教員研修留学生(国費)や大使館推薦による国費外国人留学生を研究生として令和4年度に受け入れを予定しており、今後の国際交流活動の活性化に向けた動きがあった。

4.1. 学術交流協定

(1) 新規

なし。

(2) 更新

以下の大学との交流協定を更新した。

全学協定(タイプ1)

- ・ミュンヘン工科大学
- ・ヴェネツィア大学

(国際交流委員会委員長 野中哲士)

4.2. 留学生

(1) 本年度、本研究科で学んだ留学生は58名、概要(性別・国籍別・学年別・専攻・国費/私費別)は次表の通りである。

		前期	後期	計
性別	女性	41	45	86
	男性	9	9	18
	計	50	54	104

		前期	後期	計
	中国	42	46	88
	韓国	3	3	6
	台湾	1	1	2

国籍	コロンビア	1	1	2
	タイ	1	1	2
	モンゴル	1	1	2
	バングラディッシュ	1	1	2
	計	50	54	

		前期	後期	計
学年	D3	10	10	20
	D2	1	1	2
	D1	3	3	6
	M2	13	13	26
	M1	11	11	22
	大学院特別聴講学生	0	0	0
	教育研修生(大学院特別研究生)	0	0	0
	計	50	54	104

		前期	後期	計
専攻	人間発達	23	26	49
	人間環境学	27	28	55
	計	50	54	104

		前期	後期	計
国費/私費	国費	1	1	2
	私費	49	53	102
	計	50	54	104

(2) 留学生見学旅行

新型コロナウイルス感染拡大のため、実施を見送った。

(3) 留学生説明会及びチューター説明会

4月入学予定の海外からの留学生は、新型コロナウイルス感染症の影響で10月に入学が延期されたため、前期の留学生説明会は開催されなかった。また、後期についても国内居住の新入留学生がい

なかったため、後期の説明会も開催されなかった。11月上旬渡日してきた学生（マレーシア政府派遣留学生1名のみ）には教務学生係で個別に説明した。

(4) チューター制度

留学生の渡日直後の生活条件の整備、諸手続き遂行（マレーシア政府派遣留学生のみ）、また論文作成において補助を要するものに対して、チューターを配して日本社会、学生生活への円滑な適応、および論文のレベルアップを図った。

(5) 派遣留学生報告書の閲覧

教務学生係において、過去の交換留学生の報告書をファイルにまとめ、学生を対象に閲覧を継続している（2021年度派遣は無し）。

(6) メーリングリストの利用

留学生のメーリングリストを作成し、就活セミナーやイベントなどについて一斉メールで案内を送付した。

(7) 来年度に向けて

Erasmus+に参加できるのは非常に有益なことであるので引き続き押し進めたい。学生の派遣、受け入れが再開しつつある現状をふまえて、国際交流のさらなる活性化を目指したい。

（国際交流委員会委員長 野中哲士）

4.3. ダブルディグリー

新型コロナウイルス感染症の影響による規制のため、ダブルディグリー・プログラムの開拓は事実上困難であったが、今後の活性化に向け、努力を継続する予定である。

（国際交流委員会委員長 野中哲士）

4.4. Innovative Asia

新規受入について2019年度以降は申請していない。

（国際交流委員会委員長 野中哲士）

4.5. 学生・教員・職員の海外派遣

(1) 国際交流運営資金

令和3年度国際交流運営資金による援助事業により、3名の大学院生のオンライン国際会議における発表の学会参加登録費の援助を決定した。（その後、そのうち1名については、学会スポンサーからの寄付により参加費全額がまかなえることになったため、助成が見送られた。）

(2) 教員・職員派遣（研究科等の経費）

新型コロナウイルスの感染拡大の影響による出入国制限のため海外派遣はなかった。

(3) 紫陽会グローバル人材育成資金

新型コロナウイルスの感染拡大の影響による出入国制限のため、募集は見送られた。

(国際交流委員会委員長 野中哲士)

4.6. 海外研究者等の招聘・訪問

期日	氏名	国名	所属・職名	受入者
2021年				
2021/11/16～ 2022/10/27	SABANCI Taner	トルコ 共和国	チャンクル カラテキン大学文 学部社会科学科・研究助手	片桐 恵子

(国際交流委員会委員長 野中哲士)

4.7. 「英語による授業の実践-ESD 研究」

大学のグローバル化に対応して、英語で行われる授業を増やしていくことが期待されている。実態としては、英語の授業への学生のニーズは乏しいものの、ESD（持続可能な開発のための教育）が地球規模での実践的な学際的交流を求めるものであることから、大学院に開設された ESD サブコースの授業科目のうち、「ESD 研究1・2 (ESD study1・2)」は、英語で実施された。

本研究科の教員6名（太田和宏、津田英二、清野美恵子、稲原美苗、喜屋武享、松岡広路）がチームを組んでコーディネートをする。毎回、履修生が英語でショートスピーチを行い、英語でグループディスカッションを行う、という形式である。一切日本語は使われない。履修生11名で、人間発達専攻8名、人間環境学専攻3名、うち中国人留学生3名であった。

主なテーマは「How to think of the relationships with SDGs」で、参加者各自の問題意識・研究テーマ・方法論と持続可能な開発に関連する問題との関係が議論された。参加者からは「自分の専門の意義を英語で話す機会を得て有意義であった」「国際性を意識することができた」「地蔵可能な開発と自分の専門を接続させることができた」などの感想も得た。

夜間ということもあって履修院生数がやや少ない。持続可能な開発に関連する研究をしている院生の数は、この程度ではないはずである。次年度は、研究科内外により本授業の存在をアピールし、履修院生の拡大とともに、英語による授業の大切さを広めていきたい。

(人間発達専攻 松岡広路)

5. 教育

5.1. 教育課程

5.1.1. 今年度の特徴

令和3年度に新たに開始した取り組みや、本年度特記すべき事項などは以下のとおりである。

(1) 研究指導計画書の設定

機関別認証評価を受けて、研究指導計画書の書式を作成した。合わせて、学生の研究計画書の提出時期などの調整を行った。

(2) シラバスの見直し

機関別認証評価を受けて、全シラバスの見直しを行い、必要に応じて修正した。

(3) 成績評価基準の確認

秀・優の割合など、成績評価基準についての確認を行った。

(教務委員会委員長 佐藤真行)

5.1.2. 研究科，専攻共通科目

(1) グローバルリサーチ演習Ⅰ・Ⅱ

大学院学生の国際的な研究活動に対しては、研究会の開催や出席に対して経済的な支援が得られる機会を提供するなど、従来から積極的に奨励して来たところであるが、新たに専攻横断型の「グローバルリサーチ演習Ⅰ」(前期課程)と「グローバルリサーチ演習Ⅱ」(後期課程)という授業科目を開設し、国際的な研究活動の集積が所定の条件を満足する場合に単位を付与することとした。

研究の専門性を高め、その成果を広く国内外に発信する高度な実践能力を身につけることを目標として、指導教員による指導のもと海外および国内での学会・研究会への参加・発表やスタディツアーなどへの参加を積み重ねた上で、学術 WEEKS などの国際的な研究会や活動の企画を行うことを通じて実践能力を習得することを目指す。

2021 年度より国際人間科学部を卒業した学生の受け入れが始まることに伴い、多数の学生が履修することを企図していたが、大変残念なことに新型コロナウイルス感染症が広がっている状況下でのスタートとなり、初年度となる 2021 年度は履修登録者がⅠ・Ⅱ合わせて6名に、さらに最終的な単位取得まで達した者はⅠ・Ⅱそれぞれ1名にとどまった。来年度以降の新型コロナの沈静化に伴っての発展が期待される。

(人間発達環境学研究科長 青木茂樹，教務委員会委員長 佐藤真行)

(2) ヒューマン・コミュニティ創成研究

本年度は、オンラインによる講義を行なった。例年どおりさまざまな領域で研究を志す院生が受講し、知を横断する対話の創出に力点を置く授業であった。オンラインによる哲学対話への挑戦であったが、受講生各人の研究関心をテーマにした意味ある対話を展開することができた。コーディネイターは稲原美苗准教授と津田が務めた。また、昨年度に引き続き、神戸大学附属中等教育学校の中川雅道教諭の助言を得た。

(ヒューマン・コミュニティ創成研究 主担当 津田英二)

5.1.3. 教職教育

(1) 教育実習

令和 3 年度の教育実習の履修者(単位認定者)数は、幼稚園，小学校，中等教育，特別支援学校ともに 0 名であった。令和 4 年 2 月 3 日に附属校園との実習反省会(国際人間科学部)を行い、令和 3 年度の実習に関する反省事項や次年度以降に向けての課題について意見交換を行った。

(2) 教員免許取得状況

本年度の教員免許実取得人数は一種免許状が 0 名，専修免許状が 18 名であった。

(3) 教職実践演習

本年度の「教職実践演習（幼・小）」は国際人間科学部のみの実施であった。

(教務委員会委員長 佐藤真行)

5.1.4. 博物館学芸員資格

博物館学芸員資格専門委員会は、国際人間科学部の2, 3年生の学芸員養成課程における博物館実習の運営と、履修を終えた3年生以上に単位認定を行った。これらの活動に関連して、4回の委員会(4月, 7月, 11月, 2月)をリモートにて開催した。

(1) 令和3年度博物館実習説明会と各実習の実施

1 全体事前指導：4月9日に2, 3年生を対象とした博物館実習全体のカリキュラムについての説明を行い、申請期間を4月23日までとした。

2 見学実習(夏期)：合同見学(5月15日)を板倉史明教授が担当した。西宮市大谷記念美術館で開催された「石内都展 見える見えない、写真のゆくえ」展を履修生全員で見学し、展覧会担当の学芸員より説明を受けた。自由見学では、各自任意の博物館・美術館・科学館等を選び、開催されている常設展と企画展を観覧したうえで展示方法に着目した見学実習を実施することとした。いずれもレポート提出を課した(10月1日締め切り)。

3 学内施設「カフェ・アゴラ」における実務実習：本年は学内施設「あーち」においての実務実習がコロナ禍の影響もあり困難であるため、学内施設「カフェ・アゴラ」での開催となった(9月21-24, 27日)。津田英二教授の指導の下、神戸大学附属特別支援学校と連携して、所属生徒の絵画作品の額装・展示・解説等を行った。今年度のテーマは「RAiN RAiN はれのちあめ、今日はいい天気」であった。(履修者数6名)

4 館園実習：7月中旬から8月下旬にかけて、3・4年生が4館園にて実習に参加した。西宮市大谷記念美術館、明石市立文化博物館、浜松市楽器博物館、神戸市立森林植物園(各1名)で指導を受けた。

5 館園実習事後指導ならびに館園実習事前指導(12月10日)：今年度も3年生以上を対象とした館園実習事後指導と、2年生以上を対象とした館園実習事前指導を合同で開催した。事後指導対象の実習生が学外での博物館・美術館における館園実習の体験談や問題意識を口頭報告した。次年度に館園実習に赴く下級生が事前指導の一つとして聴いた。この報告会における質疑応答も含めて、事後指導履修生は博物館実習全体の総括を行った。事前指導履修生には別途、学外実習先の説明ならびに館園実習に向けての諸注意を行った。

(2) 令和3年度の博物館実習単位認定

博物館実習単位は2年間をかけて取得する。本年度は3・4年生4名に対して博物館実習の単位認定を行った。

(3) 資格科目に関わる図書資料の整備

委員会の予算を用いて、資格科目の履修における参考文献を購入し、鶴一、鶴二キャンパスのそれぞれ

れの図書館に一部ずつ配荷した。購入にあたっては、非常勤の先生方を含む担当教員に広く希望図書を募り、講義に関連した学習効果の向上を目指した。

(4) 今後の課題

国際人間科学部では、グローバル・スタディーズ・プログラム(GSP)における海外留学 と博物館実習との時期的なバッティングが懸念される。

また近年、履修生の減少傾向がみられたが、今年度は7名の2・3年生が履修し、やや回復の兆しが見られる。今後も、「新入生ガイダンス時にスライド1枚程度の資料を配付し、教務委員長から説明してもらうこと」、「4月の全体事前指導の日程掲示を学芸員掲示板、ウェブサイト周知だけでなく、2年生、3年生のメーリングリストで周知すること」の2つを実施し、意欲ある学生の積極的な履修を促進する。

(博物館学芸員資格専門委員会委員長 高見泰興)

5.1.5. ESD サブコース

ESD (Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育) をテーマとするこのコースは、学部を超えた領域横断型の全学の教育コースとして、2008年度より開講されている。2015年度より国際教養教育院にESD 教育部会が設置されたものの、中核的運営は人間発達環境学研究科が担っている。全学に配置されている同コース運営委員会の委員長は、松岡広路(人間環境学専攻教授)で、実務的には、総合コーディネーターの鴨谷真(学術研究員)や清野未恵子(人間発達専攻准教授)、喜屋武享(人間発達専攻准教授)が、「ESD コース」の運営に当たっている。

昨年度に続き、コロナウィルスの影響を少なからず受けたものの、「ESD 基礎」「ESD 論 A・B」「ESD ボランティア論」「ESD 生涯学習論 A・B」「ESD 実践論」および「ESD 演習 I・II」を開講した。全学のESD 関係教員の協力を得て、オンラインによる授業、ワークショップを中心とした授業を行った。それらの基幹にあるのは、本研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのヒューマン・ネットワークである。とりわけ、事務局を担うRCE 兵庫 - 神戸のESD 実践者にゲストスピーカーとして登壇してもらい、現場の臨場感をできるだけ学生が触れることができるように工夫した。基礎科目群と各学部で開講されている関連科目を履修したのち、ESD 演習で学びの総合化・交流を行う、という学びのシーケンスをもつESD コースは、新しいサービス・ラーニング(学校と社会サービスの連結した学習スタイル)のモデルである。

参加部局が全部局に広がり、全学部参加のコースとして本格的に動き始めてきた。SDGs(持続可能な開発目標)が巷間知れ渡るようになり、社会・世界にその推進を担う人材づくりの方法論の提示が求められている。本コースの運営の母体である本研究科及びヒューマン・コミュニティ創成研究センターの役割は、ますます大きくなっているといえよう。

(ESD サブコース運営委員会委員 松岡広路)

5.1.6. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント

(1) ゲストスピーカー

令和 3 年度は 8 万円 (1 件につき 1 万円) の予算配分のもとで、前期 (第 1, 2Q) 2 件、後期 (第 3, 4Q) 4 件の計 6 件が実施された。提出された実施報告書の点検を通じて、受講学生、招聘講師、担当教員のいずれからも良好な評価が得られており、高い教育効果を生んでいることが確認できた。

(2) ティーチング・アシスタント

優秀な大学院学生及び学部学生に対し、教育的配慮のもと教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や、学生に将来教員・研究者等の職に就くためのトレーニングの機会を提供し、これに対する手当支給により、学生の処遇の改善の一助とするためにティーチング・アシスタント制度を設けている。学部学生をスチューデント・アシスタント (SA-時給 950 円)、大学院生をティーチング・アシスタント (TA-前期課程：時給 1200 円、後期課程：1400 円)、同後期課程学生をシニア・ティーチング・アシスタント (STA-時給 1500 円) とし、従事可能な業務内容につき差別化を行ったうえで任用した。実施報告書 (学生用・教員用) からは、担当教員・学生のどちらからも高い評価を得ていることが確認できた。平成 29 年度から発達科学部と国際人間科学部で同時開講の科目に関するティーチング・アシスタントは国際人間科学部の予算でまかなわれている。そのため、人間発達環境学研究科における令和 3 年度の予算配分は約 4 万円 (36,000 円) であり、昨年度比で 44.1%であった。任用学生数は以下のとおりである。

前期 SA 0 名 TA 1 名 STA 0 名 計 1 名

後期 SA 0 名 TA 0 名 STA 0 名 計 0 名

(教務委員会委員長 佐藤真行)

5.2. 各専攻講座の教育

5.2.1. 人間発達専攻

(1) 運営

各教員は、4 つの教育研究分野 (心理系、表現系、行動系、教育系) に所属している。専攻の運営は、基本的に各教育研究分野を中心に行われている。運営にあたっては、専攻長と各教育研究分野代表により構成された人間発達専攻運営会議を組織し、月 1 回の定例会議のほか、適宜臨時の会議やメール審議により、専攻に関わる重要案件 (人事、予算、入試、共通科目運営、共通備品運用等) の審議等を行った。今年度もまた、新規採用助教人事における人事方針、人事選考委員会の構成についての議論とコロナ禍の入学試験対応が議論の中心であった。

(2) 予算

予算は、専攻に配分されたものを従来通り各教育研究分野に振り分けた。共通経費は設定していない。専攻所有の大型プリンタ運用経費については、各教育研究分野より予算の一部を拠出してきたが、今年度もコロナ禍のため、予算徴収はしていない。今年度より、専攻共通必修科目としての人間発達

関連研究等が廃止されたので、この大型プリンタの位置付けや、その運用について検討することが必要である。

(3) 入学試験

博士課程前期課程入試については、定員確保問題が再発し、定員より少ない合格者(50名)となった。しかしその後、合格辞退者が複数発生し、最終結果として定員を少なからず下回った状況にある。辞退の主要な理由は、近年ほぼ同じ傾向であり、他大学院への合格による辞退である。有力大学大学院と併願する受験生が一定数存在するようである。今後、この課題に対応するためには、本専攻の特徴や魅力などを確実に伝える広報活動等の継続的な強化、それに伴うストレートマスターの確保等が必要だろう。もしかしたら、他専攻のように、推薦を導入することが検討されてもよいかもしれない。一方、博士課程後期課程入試については、従来通り、定員を充足するだけでなく、一定の倍率を確保してきているが、受験区分への受験者数の偏りがあるため、予断は許さない状況にある。

(4) 教育

以下、教育研究分野別に内容を学生の実績を中心に列挙する。

●心理系

心理系では、心理学での系統的なカリキュラムに加え、ゲストスピーカーを招聘し、より高度で、丁寧な学習支援が行われた。とくに国際シンポジウムに学生が参加したこと、海外協定校のエトベシユローランド大学(ハンガリー)の教員による授業がおこなわれたことは、教育における国際性の高さを示す特筆すべき事項である。このような教育体制を受け、学生の研究発表についても、国内で優れた学会発表や学術論文に関する報告がされた他、国際学会でも複数の発表が行われた。

(1) 学生の国際学会発表

Taniguchi, A, Nogami, K, & Yamane, T. (2021, September). The influence of parenting styles and attributions of pre-schooler's behaviour on their self-regulation and problem behaviours: Analysis with dyadic data. British Psychological Society Developmental Psychology Section Annual Conference 2021.

Taniguchi, A, & Yamane, T. (2021, July). Perception of Developmental Disorders among Japanese University Students. The 32nd International Congress of Psychology.

Kiyohara, M, Nogami, K, Taniguchi, A, Itoh, T, Yamane, T, Adachi, T, Aizawa, N, Yoshida, K, Kawasaki, Y. (2021, July). The Reality of Remote Psychological Support during the COVID-19 Pandemic in Japan -A Qualitative Study of an Interview survey. The 32nd International Congress of Psychology, Prague, Czech Republic.

Nogami, K, Taniguchi, A, Kiyohara, M, Yamane, T, Adachi, T, Itoh, T, Yoshida, K, Kawasaki, Y, Aizawa, N. (2021, July). The COVID-19Pandemic' s Impact on the Challenges and Advantages of Using Telepsychology in Japan. The 32nd International Congress of Psychology, Prague, Czech Republic.

(2) 学生の国内学会発表

古村真帆 (2021) 通常の学級における知的障害特別支援学級在籍児童の授業参加—『学び合い』を取り入れる学級の事例研究—, 日本特別ニーズ教育学会第 27 回大会

古村真帆 (2021) 小学校通常学級で実施される個別支援を周囲の児童はどのように捉えているのか 日本特別ニーズ教育学会 2021 年 6 月中間集会

呉文慧 (2021) ある特別支援学校における「家庭科」の実践紹介 : ASD のある生徒と相互交渉する教師の実践知の現象学的探究を通じて 日本特別ニーズ教育学会第 27 回研究大会

石井正幸・赤木和重 (2021) 特別支援学校教員を対象とした 協調運動が苦手な知的障害児の理解と支援に関する意識調査 : 教員の専門性に注目して 日本特別ニーズ教育学会第 27 回研究大会

生田邦紘・赤木和重 (2021) 特別支援学校の教師は、軽度知的障害のある青年の「障害受容」をどのように捉えているか? 日本質的心理学会第 18 回大会

(3) 学生の論文

古村真帆 (2021) 通常の学級における知的障害特別支援学級在籍児童の授業参加 : 『学び合い』・自由進度学習を取り入れる学級の事例研究 SNE ジャーナル, 27

王 一然 加藤佳子 (2022) 大学生の健康な食生活における自己制御と動機づけの関連 発達・臨床心理学研究 21 (印刷中)

(4) ゲストスピーカーの招へいなど

講師 : 川添文子氏 (一般財団法人神戸市地域医療振興財団西神戸医療センター心理士)

題目 : 医療現場における臨床心理士の役割と連携

日時 : 令和 3 年 1 2 月 7 日 (火)

実施授業 : 臨床心理学検査特論演習 2

講師 : 山田剛史氏 (岡山大学)

題目 : 「よくわかる心理統計に関連した幾つかのトピック～標本分布, 信頼区間, サンプルサイズ」

日時 : 2021 年 6 月 2 日 (水)

学術 Weeks シンポジウム

Trend of Research for Children with ASD —What intervention can we do for individual with ASD from birth to adolescence—, Dr. Sally Ozonoff (University of California, Davis) との国際シンポジウム, 院生 3 名学部生 2 名も英語でのプレゼンテーションを行った

講師: Robert Urban (エトベシュローランド大学)

題目: Introduction to motivational interviewing

日時: 2021 年 4 月 17 日 (土)・4 月 29 日 (木)

●表現系

表現系の教育では例年と比べて大きな変化はないが、新規採用の助教が 3 名加わったことで、例えば修士論文審査会、修士論文中間発表会など、様々な場面で院生たちに新たな刺激が加わり、それが良い効果をもたらしつつあることが実感される。

1) 学生の査読付き論文

・(D6 学生) 石原興子:精神科即興音楽療法における「反復」表現—墨絵描画を用いた打楽器即興場面からの一考察—, 日本芸術療法学会誌, 52(1・2), 151-159, 2021.

2) 学生の学会発表

- ・(D1 学生) 本郷みか:障がい児のことばの発達と音楽との関係性について—歌唱表現を活用した療育活動から—, 第 52 回日本音楽教育学会, 2021 年 10 月 17 日
- ・(M2 学生) 大森響介:音楽教員の即興演奏の育成方法に関する研究, 第 13 回日本音楽即興学会大会, 2022 年 1 月 10 日

3) ゲストスピーカー

- ・マーサ・グラハム・テクニック入門レクチャー・ワークショップ, 鞍掛綾子 (GAGA Japan プロデューサー/acda スタジオ主宰) (舞踊表現特論 I-2・身体表現論 2 合同, 関典子, 7 月 5 日)
- ・マイム入門レクチャー・ワークショップ, いいむろなおき (演出家/マイム俳優) (舞踊表現特論 I-2・身体表現論 2 合同, 関典子, 7 月 12 日)
- ・GAGA をベースとした身体言語のクラス, 鞍掛綾子 (GAGA Japan プロデューサー/acda スタジオ主宰) (舞踊表現特論演習 1・コンテンポラリーダンス 1 合同, 10 月 19 日)
- ・言葉から身体表現〜リリカルダンス〜, 花岡麻里名 (ダンサー/ミュージカル女優) (舞踊表現特論演習 2・コンテンポラリーダンス 2 合同, 関典子, 12 月 21 日)

●行動系

行動系は自然科学から人文・社会科学分野までの多岐にわたる学問分野を含んでおり、これらの学際的観点から解析する方法や枠組みを習得し、課題解決のための柔軟な思考能力や洞察力を涵養することを目的に、大学院生それぞれの分野の学会やセミナーでの発表することのみならず、学内での各

種発表会・研究会などの実質的な計画・準備・運営に参画し、積極的参加を推奨している。しかし、今年度は昨年度から引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大により、各種の学会大会や研究会、シンポジウム等が中止となったり、WEB または誌上開催となったこと、また、感染防止対策の一環として、学内への立ち入りの禁止や、調査や実験そのものが実施できなくなったために、十分な研究活動を行うことができなかった。しかしそのような状況下でも、国内外での学会等で研究発表を行い、積極的な研究活動を展開している。そのリストの一部を以下に示す。

1) 査読付き論文

- ・太田幸志, 原田和弘. (2021). 運動への手段的および感情的態度と運動行動との関連：セルフ・エフィカシーおよび自己調整による媒介効果の検証. 理学療法学, 48, 563-571.
- ・安里知陽 竹内真純 Kim Nahyun 片桐 恵子. 高齢者の社会参加における学習効果：活動団体の種類による比較. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究 紀要 15 (2) (印刷中)
- ・松崎淳・長ヶ原 誠 (2021) “国際生涯スポーツイベントにおけるコミュニティ・キャパシティの形成過程に関する研究：小規模開催地に着目して”. 生涯スポーツ学研究, 17 (2) 1-16.
- ・青山将己・山口泰雄・長ヶ原 誠・高田紘佑 (2021) “障害者スポーツにおける統合・インクルージョン政策：システムティックレビュー”. 生涯スポーツ学研究, 18 (1) 1-13.
- ・青山将己・山口泰雄・長ヶ原 誠 (印刷中) “オランダオリンピック委員会・パラリンピック委員会の統合背景とその影響：新制度派組織論の枠組みを用いて”. 生涯スポーツ学研究, 18 (2).

2) 学会発表

- ・辻岡幸歩, 山縣桃子, 木村哲也. “外的荷重保持が片脚立位制御に与える影響” 生体医工学シンポジウム 2021. 2021. 9. 17-18 (オンライン開催)
- ・乾 順紀, 長ヶ原 誠. “就学期の運動部活動経験が成人層の運動・スポーツ参画状況に与える影響：成人以降のスポーツ活動の多様化に着目して”. 日本体育・スポーツ・健康学会第 71 回大会. 2021. 9. 8.
- ・三浦 敬太, 長ヶ原 誠. “成人のスポーツ参画に影響を与える予測要因の分析”, 兵庫体育・スポーツ科学学会第 32 回大会, オンライン開催, 2021. 6. 5.
- ・堀田 禎也, 戸根 明音, 熱田 希弘, 柴田 アンナ, 松崎 淳, 三浦 敬太, 長ヶ原 誠. “スポーツ参画志向・運動実施状況と主観的気力年齢との関係性—年代(若年層・中年層・高年層)と性別による比較—”. 日本生涯スポーツ学会第 23 回大会. 2021. 10. 31.

3) 民間研究助成

- ・研究代表者：松崎 淳

研究課題：COVID-19 流行下での国際スポーツ大会開催プロセスにおけるキャパシティ・ビルディングの解明

研究資金：公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団・スポーツチャレンジ研究助成

研究概要：COVID-19 の世界的流行に際して、我々人類の一人一人が共に団結して困難を打破するための社会的結束の重要性は全世界に浸透しているといえる。本研究では地域コミュニティが流行下に生涯スポーツを奮起させるために、多様なスポーツ参画志向をもつ人々の晴れ舞台を創るための事業・政策を打ち出す仕組みの解明、コミュニティに生じる困難や障壁を打破するために形成する「キャパシティ・ビルディング」の解明を目指す。

- ・研究代表者：Kim Nahyun

研究資金：国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の次世代研究者挑戦的研究プログラム事業、神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」のプロジェクト生として採用

4) 受賞

- ・受賞者：青山将己

受賞名：2021 年度日本体育学会アダプテッド・スポーツ科学専門領域研究奨励賞（論文部門）

受賞題目：中央競技団体における障害者スポーツの統合・インクルージョン指標の構築：OCIIS ステージを用いて. 体育学研究, 65, 383-400, 2020

- ・受賞者：堀田禎也, 戸根明音, 熱田希弘, 柴田アンナ, 松崎 淳, 三浦 敬太, 長ヶ原 誠

受賞名：日本生涯スポーツ学会第 23 回大会（ポスター発表賞〈学部生部門〉最優秀賞）

受賞題目：スポーツ参画思考・運動実施状況と主観的気力年齢との関係性 - 年代（若年層・中年層・高年層）と性別による比較 -

- ・受賞者：島津大地

受賞名：日本スポーツ産業学会第 9 回冬季学術集会（若手研究者育成セッションにおける日本スポーツ産業学会賞）

受賞題目：地方競技団体におけるナレッジマネジメントに関する研究

●教育系

本年度は、昨年度同様、感染症拡大により研究・教育の推進に大きな困難があったにもかかわらず、次のような成果が挙げられ、また新たな課題も見えてきた。

教育系では、旧学び系の伝統を引き継ぎ、2013 年以来「教育基礎研究道場」特別講義シリーズを開講してきており、関係教員、特別講師、参加院生における協同体制で、それぞれの当該専門分野の最新の知見について議論してきている。2021 年度は、年 7 回の講義を実施した。内容は、教育方法学、理科・科学教育学を中心に多岐に渡っており、その概要は研究科 HP に掲載されている (<http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/6843>)。また、複数領域横断型の ESD（持続可能な開発のた

めの教育) コース関連の授業の受講も積極的に奨励してきた。

一方、学生の学術的活動の主要なものを以下に示しているが、学会誌・研究科紀要への論文投稿・掲載、国際・国内学会発表等として多数の成果が表れている。学生の受賞も1件みられる。その特徴は、人的交流や渡航が困難な中でも、遠隔通信技術が急速に普及した状況に適応し、オンラインでの国際シンポジウム開催や研修プログラム開発およびデータ収集などを積極的に実施している点であろう。

次年度は、こうしたオンラインの手法を教育・研究のツールとして積極的に活用しつつも、現場での実践的研究を踏まえた、国際的な研究展開の力量形成を目指す計画・設計が求められる。以下、教育系における学生の業績を示す。

1) 査読付き論文

長尾悠里 (2021) 「小規模特認校をめぐる地域住民と校区外保護者の関係構築過程—A県B市X地区を事例に一」『日本教育政策学会年報』第28号, pp. 110-124。

太田知実 (2022) 「現代米国教員養成における志望者の人種問題理解を深める試みとその意義—ボール州立大学 (Ball State University) の地域体験活動に注目して—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第15巻第2号, pp. 109-120。

侯野源晃・山本智一・山口悦司・坂本美紀・神山真一 (2021) 「複数の証拠を利用するアーギュメント構成能力の育成: 小学校第5学年「電流がつくる磁力」の事例」日本理科教育学会『理科教育学研究』第62巻, 第1号, 187-195。

星川佳加 (2021) 「戸田唯巳の教育実践「学級というなかま」に関する一考察: 1953年5月頃の実践「おかあさんに叱られた時」に焦点をあてて」『研究論叢』27, pp. 27-40。

松本圭朗 (2021) 「会田実の教育実践に関する一考察」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』15 (1), pp. 41-52。

瀬川千裕 (2021) 「1950年代におけるカリキュラムと教育評価: コア・カリキュラム連盟の授業研究に着目して」『研究論叢』(27), pp. 3-11。

亀崎美沙子 (2021) 「保育士の子育て支援の葛藤に関する先行研究の到達点とその課題—子育て支援の課題および困難を手がかりに—」『十文字学園女子大学紀要』第51号, pp. 81-94。

亀崎美沙子 (2021) 「保育士が抱える子育て支援の葛藤の特徴とその課題: アンケート調査を通じた葛藤事例の分析から」『子ども家庭福祉学』第21号, pp. 23-36。

亀崎美沙子 (2022) 「子育て支援における保育士の専門職倫理意識の実態と関連要因—保護者に対する倫理責任に着目して—」『保育者養成教育研究』第6号。(印刷中)

中橋葵・岡部恭幸 (印刷中) 「幼小接続機における領域「環境」と算数科のカリキュラムの課題に関する一考察—サビタイジングを基盤とする認識と数の合成・分解の学びの道筋に着目して—」『数学教育学会会誌』Vol. 62/No. 3・4, pp. 1-14

後藤聡美 (2021) 「当事者性概念の再考~多文化共生社会の創成に資する学習論の構築に向けて~」神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 第15巻第1号, pp. 31-40。

堤拓也 (2022) 「学生セツルメントおよびワークキャンプに関する研究の課題と展望—ボランティアの学びに注目して—」神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 第15巻 第2号 (印刷中)

2) 査読なし論文

矢後恒河・青木良太・小林和奏・武田義明・楠房子・溝口博・杉本雅則・舟生日出男・山口悦司・稲垣成哲 (2022) 「SDGs教育のための環境教育コンテンツ「里山管理ゲーム」におけるユーザーインターフェース改善が学習に与える影響」『情報処理学会研究報告』Vol. 2022-DCC-30, No. 48, 1-5。

星川佳加 (2021) 「戸田唯巳の教育実践に関する証言(その3) 戸田唯巳先生ご生誕100周年記念文集」『研究論叢』第27号, pp. 79-87。

瀬川千裕 (2021) 「親になるまでの時間」『教科外活動と到達度評価』(22), p. 80。

瀬川千裕 (2021) 「若手支援企画『研究の取り組みと論文の執筆について』に参加して」『日本教育方法学会第23回研究集会報告書』p. 33。

瀬川千裕 (2021) 「今井誉次郎による合科教育論の構想: 生活科との関連において」『作文奈良』(63),

pp. 1-11.

- 瀬川千裕 (2021) 「今井誉次郎のロマンチズム綴方の検討」『関西教育学会年報』(45), pp. 66-70.
- 瀬川千裕 (2021) 「書評 山田直之著『芦田恵之助の教育思想：とらわれからの解放をめざして』」『研究論叢』(27), pp. 110-113.
- 瀬川千裕 (2021) 「『くらし』の表現を読むということ：〈この作品をどう読むか〉第6回」『作文と教育』(890), pp. 46-49.
- 勝治友紀子(in press) 「外国につながる母語・継承語教育の課題と取り組み：神戸市公立小学校ベトナム語教室の事例より」『研究論叢』第28号。
- 山崎洋子著(武庫川女子大学), 青井郁美・横田慧訳, 川地亜弥子監訳 (in press) 「進歩主義, 新教育, 文化的邂逅」『教育科学論集』25。
- 山崎洋子著(武庫川女子大学), 今西尚子・花山陸・松山聖奈訳, 川地亜弥子監訳 (in press) 「日本における進歩主義教育の起源と概略」『教育科学論集』25。
- 久野弘幸著(中京大学), 津阪菜名(国際文化学研究科・博士課程前期課程)・俣野源晃・今井智恵訳, 川地亜弥子監訳(in press) 「合科学習：木下竹次と奈良女附小」『教育科学論集』25。
- 中野光・山崎洋子著, 青井郁美・勝治友紀子・加藤優太・松山聖奈訳, 川地亜弥子監訳 (in press) 「梅根悟：カリキュラム改革と世界教育史」『研究論叢』第28号。
- 亀崎美沙子 (2021) 「子育て支援における保育士の葛藤と専門職倫理」『日本家政学会誌』第72巻第7号, pp. 443-449.

3) 国際会議等発表

- Yago, K., Shingai, Y., Kobayashi, W., Aoki, R., Takeda, Y., Kusunoki, F., Mizoguchi, H., Sugimoto, M., Funaoi, H., Yamaguchi, E., & Inagaki, S. (2021, April). Satoyama forest management learning game for SDGs education: Comparing the effect of providing additional information in the first half and latter half of the game. Proceedings of 13th International Conference on Computer Supported Education, Volume 1, 347-351.
- Takahashi, A., Yamaguchi, E., & Inagaki, S. (2021, August/September). Supporting parent-child communication in museums: A case study of the national museum of nature and science in Japan. Poster presented at the 14th Conference of the European Science Education Research Association (ESERA 2021).
- Takahashi, A., Yamaguchi, E., & Inagaki, S. (2021, October). Designing and implementing exhibition spaces to support parent-child communication in science museums: A case study of the National Museum of Nature and Science in Japan. Poster session to be presented at the ICOM CECA (International Council of Museums international Committee for Education and Cultural Action) annual conference 2021, Leuven, Belgium.

4) 国内学会発表

- 西野倫世「米国における teacher effectiveness 概念の意味内容の限定過程」日本教育行政学会第56回大会(福岡大学, オンライン), 2021年10月10日。
- 太田知実「現代米国教員養成における志望者支援の試みとその意義 2021年10月10日」日本教育行政学会第56回大会(福岡大学, オンライン), 2021年10月10日。
- 金聯珠「韓国の学校—地域連携ガバナンス構築における教師の主体的実践に関する研究」日本教師教育学会第31回大会(筑波大学, オンライン), 2021年10月2日
- 金聯珠「人口減少地域の学校と地域づくりを担う教職員像の研究」日本教育行政学会第56回大会(福岡大学, オンライン), 2021年10月9日。
- 長尾悠里「学校—地域関係論における地域住民への視点の再検討」日本教育制度学会第28回大会(常葉大学, オンライン), 2021年11月20日。
- 高橋あおい・山口悦司・稲垣成哲(2021)「国立科学博物館の展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」の理念と展示：ワークショップスペースを事例に」『日本科学教育学会第45回年会論文集』pp. 291-292.
- 俣野源晃・山口悦司・山本智一・神山真一・坂本美紀(2021)「複数の証拠を利用するアーギュメント構成能力育成のための小学校理科授業デザインの改善：証拠の利用に着目した評価」『日本科学

教育学会第 45 回年会論文集』 pp. 533-534.

小林和奏・青木良太・矢後恒河・稲垣成哲・溝口博・武田義明・楠房子・山口悦司・舟生日出男・杉本雅則 (2021) 「環境保全教育コンテンツ「里山管理ゲーム」：大学生は情報エリアのどのような情報に着目していたか」『日本科学教育学会第 45 回年会論文集』 pp. 555-556.

坂本美紀・山口悦司・山本智一・俣野源晃 (2021) 「科学技術の社会問題を扱った小学生向け教育プログラムの改善 (5)：提案型意思決定を实践する学習活動の追加を中心に」『日本教育心理学会第 63 回総会発表論文集』 p. 204.

俣野源晃・山口悦司・山本智一・神山真一・坂本美紀 (2021) 「複数の証拠を利用するアーギュメント構成能力育成のための小学校理科授業デザインの改善：証拠の認識的理解の深化に着目して」『日本理科教育学会全国大会論文集』 第 19 号, p. 346.

星川佳加「竹内常一の生活指導論における『ケア』概念の変遷」日本教育方法学会第 57 回大会 (宮城教育大学, オンライン), 2021 年 9 月。

亀崎美沙子・中谷奈津子 (2021) 「保育士の倫理的判断の根拠としての専門職倫理とその課題—倫理綱領に関する国際比較から—」日本保育学会第 75 回大会, 2021 年 5 月 15 日, 富山大学 (オンライン開催)

戸川晴菜 (2021) 「小学校算数「速さ」の理解に関する研究」第 70 回近畿数学教育学会例会 (ポスター発表)

戸川晴菜 (2021) 「小学校算数「速さ」の理解に関する研究：速さ、距離、時間の 3 つの要素の関係に着目して」第 71 回近畿数学教育学会例会 (ポスター発表)

中橋葵・岡部恭幸 (2021) 「領域「環境」の子ども経験を支える保育者の意識についての検討—子どもの数へのかかわりに着目して—」『日本保育学会第 74 回大会発表論文集』

野尻優里奈 (2021) 「活動場面に着目したサビタイジングを基盤とする認識の実態調査：人数集めの遊びの実践を通して」第 71 回近畿数学教育学会例会 (ポスター発表)

三井規裕, 稲原美苗 (2021) 「哲学対話におけるファシリテーターの役割の検討—ビジネス分野との比較を通じて—」, 日本哲学プラクティス学会 第 3 回大会, オンライン

堤拓也 (2021) 「WITH コロナ 社会における 学生ボランティアの課題と展望 ~ワークキャンプにおけるゆらぎに注目して~」日本福祉教育・ボランティア学習学会第 27 回埼玉大会 (オンライン) 課題別研究 (招待あり)

後藤聡美 (2021) 「変容の学習論と＜当事者性の邂逅＞の関係」日本社会教育学会第 68 回研究大会 (オンライン) 自由研究発表

5) 受賞

瀬川千裕 (2022) 第 15 回スミセイ女性研究者奨励賞 (2 月 25 日)

6) 競争的資金の獲得状況

高橋あおい (2022) 日本学術振興会 2022 年度特別研究員 (DC2) 採用内定, 研究課題名「科学系博物館における幼児を対象とした学習支援を実現するための理念と展示運営の関係」

(人間発達専攻長 稲垣成哲)

5.2.2. 人間環境学専攻

(1) 運営

専攻に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学専攻運営会議において行った。本運営会議は、専攻長と各コースの主任の計 5 名から構成される。今年度は、定例会議を 6 回開催し、予算配分、人事、入試、教務等に関わる重要案件を審議し決定した。

今年度は、若手教員採用の学域方針に沿って、助教人事に関連する人間環境学セミナーも 4 回開催し、研究内容の議論も行った。その結果として、助教採用人事の検討と選考を 4 件行なった。1 名の

助教を 2021 年 10 月、2 名の助教を 2022 年 1 月より採用した。のこり 1 件は学域会議において人事選考委員会の設置を認められ、現在、選考を進めている。また教授昇任人事を行い、3 名の准教授が教授に昇任した。

(2) 予算

各コースの学生の下記の所属人数に応じて配分した。(休学を 0.5 としてカウント)

	博士課程前期課程	博士課程後期課程
環境自然科学	35.5	12.5
環境数理科学	7	0
生活共生科学	11.5	6
社会共生科学	8	3
計	62	21.5

(3) 入試

前期課程入試については推薦入試(7月)、1次(9月)、2次(12月)、3次(2月)を行った。推薦入試を初めて導入した。推薦入試については、プレゼンテーション、口頭試問、書類審査、ならびに外部英語試験を総合的に評価した。1次については、試験区分ごとに専門科目について筆記試験を行い、口頭試問、外国語科目試験とともに総合的に評価した。2次、3次については、試験区分ごとに専門科目について口述試験を行い、外国語科目試験とともに総合的に評価した。本年度は推薦入試、2次、3次については遠隔入試を実施した。

後期課程入試は1次(8月)、2次(2月)を行った。後期課程入試に関しては、「受験生のプレゼンテーション、主論文等審査委員と論文等審査委員が所見を述べ、各コースから口述試験委員が採点する」という方式を引き続き採用した。本年度は全日程、遠隔入試を実施した。

博士後期課程、博士前期課程ともに、定員を充足することができなかった。

(4) 教育

大学院生は修士論文、博士論文の作成を中心目標として勉学・研究を進めることから、学生に対する指導はそれぞれの指導教員に負うところが大きい。本年度は、通常の対面方式から遠隔へと大幅な変更が迫られたが、BEEFならびにZoomを活用することで滞りなく教育指導を行うことができた。

(5) 広報

博士課程前期受験検討者に対し、オープンラボの期間が設けられ、受験相談を行った。博士課程前期オープンラボウィークス実績 自然4名、数理0名、生活3名、社会1名、博士後期課程オープンラボウィークス実績 自然1名であった。

(6) 学外研究者を招いての国際講演・シンポジウム等

なし

(7) 学生の受賞

在学中の1名の大学生ならびに大学院生が以下のように受賞した。

受賞者：増田佳奈(博士前期課程)、邑上夏菜、勝原光希、宮崎祐子、丑丸敦史(人間環境学専攻博士課程前期課程2年、指導教員：丑丸敦史)

賞の名称：日本生態学会近畿地区会・例会 奨励賞

受賞対象：ツユクサにおける送粉環境に適応した花形質の集団間変異

受賞年月：令和3年12月11日

受賞理由：発表内容が素晴らしいと評価されたため

(人間環境学専攻長 近江戸伸子)

6. 進路

6.1. キャリア形成支援

6.1.1. キャリアサポートセンター

人間発達環境学研究科キャリアサポートセンター(鶴 2CSC)は、発達科学部の学部生と人間発達環境学研究科の大学院生を対象に、学生のキャリア形成を実践的にサポートする活動を行った。これらは、就職活動支援、キャリア形成支援、情報発信の3つに大別される。以下、それぞれの活動に関し詳述する。

(1) 就職活動支援

例年通り、就職活動中の学生を対象に、下記の個別相談(カウンセリング)を行った。

- ・自己分析支援
- ・エントリーシート作成支援
- ・模擬面接
- ・就活・キャリアに関する相談
- ・大学院進学に関する相談

個別相談の総人数は354人であり、その内訳は、発達科学部：1人、人間発達環境学研究科：88人、国際人間科学部：251人、法学部：6人、経済学部：3人、経営学部：2人、工学部：1人、人文学研究科：1人、不明：1人であった。(※2月24日時点の人数です)

さらに、下記のセミナー・説明会を開催した。

- ・就職活動全般(就活スケジュール、自己PR、志望動機、業界・仕事研究、グループディスカッション練習会等)
- ・教員採用試験対策(公立、私立)
- ・自治体教育委員会による教員採用試験に関する説明会
- ・心理・福祉職に焦点を当てた公務員試験対策

セミナーのタイトルは、下記の一覧を参照されたい。セミナーの総数は73、総参加人数は1,428人であった。

上記に加え、今年度も、発達科学部・国際人間科学部・人間発達環境学研究科のOBOG訪問の仲介を実施した。

また、昨年度と同様、「内定者獲得紹介システム」を運用した。本紹介システムは、鶴 2CSC の仲介により、就職先の内定獲得あるいは合格を果たした発達科学部・国際人間科学部・人間発達環境

学研究科に在学中の学生に対し、同じ就職先を志望する学生が直接会って、当該就職先に向けての就職活動に関する情報（例えば、具体的な採用選考内容）を得ることを目的とするものである。具体的な実績値は以下の通りである。

- ・内定獲得者の登録人数：85
 - ・内定先（企業か官公庁等）の数：147
 - ・内定獲得者と下級生との面談回数：23
- （※2月24日時点の実績です）

(2) キャリア形成支援

- ① 前述の個別相談で個々の学生に対し、進路・キャリアに関するカウンセリングを継続的に実施した。
- ② 人間発達環境学研究科に所属する外国人留学生を対象に、日本での就職活動に関するガイダンスを実施した。
- ③ 人間発達環境学研究科博士課程前期（修士）と後期（博士）課程の学生を対象としたキャリアガイダンスを実施した。

(3) 情報発信

キャリア支援に関する各種情報の発信を行った。

- ・企業からの大学推薦の求人情報
- ・公立・私立の教育機関（幼稚園、保育園、小中高）からの求人情報
- ・心理・福祉系の外部機関からの求人情報
- ・他大学の大学院募集情報
- ・学内セミナー（当センター主催分と学内の他の支援組織の主催分の両方）の開催情報
- ・外部業者から入手した関連情報

上記の情報を、学生向け一斉メール（鶴 2CSC ニュース）、掲示板、Twitter 等の媒体を使って発信した。

【今年度開催したセミナー一覧】※基本的にはオンライン、一部対面

1. 4月5日（月） キャリア教育 「国際人間科学部3年生限定プレミアムセミナー」
2. 4月6日（火） キャリア教育 「国際人間科学部3年生限定プレミアムセミナー」
3. 4月8日（木） 教員採用 「大阪府教育庁説明会」
4. 4月12日（月） 就職活動支援 「就職活動スタートアップ・企業編」
5. 4月13日（火） 教員採用 「大阪市教育委員会説明会」
6. 4月15日（木） 就職活動支援 「就職活動スタートアップ・公務員編」
7. 4月16日（金） 就職活動支援 「就職活動スタートアップ・企業編」
8. 4月19日（月） 教員採用 「大阪府豊能地区採用選考試験説明会」
9. 4月20日（火） 就職活動支援 「インターンシップ準備・参加&活用方法」
10. 4月21日（水） 教員採用 「堺市教員採用選考試験説明会」
11. 4月22日（木） 就職活動支援 「インターンシップ準備・参加&活用方法」
12. 4月26日（月） 就職活動支援 「インターンシップ準備・自己分析講座」

13. 4月27日(火) 教員採用 「神戸市教育委員会説明会」
14. 4月28日(水) 教員採用 「京都府教育委員会説明会」
15. 4月30日(金) 就職活動支援 「インターンシップ準備のための業界・企業研究講座」
16. 5月6日(木) 教員採用 「京都市教育委員会説明会」
17. 5月7日(金) 教員採用 「兵庫県教育委員会説明会」
18. 5月10日(月) 公務員 「大阪府福祉専門職(社会福祉職、心理職)就職説明会」
19. 5月11日(火) 就職活動支援 「インターンシップ選考対策講座・エントリーシート編」
20. 5月12日(水) 教員採用 「奈良県教育委員会説明会」
21. 5月14日(金) 就職活動支援 「インターンシップ選考対策講座・エントリーシート編」
22. 5月17日(月) 就職活動支援 「インターンシップ選考対策講座・面接編」
23. 5月19日(水) 就職活動支援 「インターンシップ選考対策講座・面接編」
24. 5月25日(火) 就職活動支援 「インターンシップ選考対策・SPI(筆記と適性)編」
25. 5月27日(木) 就職活動支援 「インターンシップ選考対策・SPI(筆記と適性)編」
26. 5月31日(月) 就職活動支援 「インターンシップ選考対策・ビジネスマナー編」
27. 6月1日(火) 就職活動支援 「インターンシップ選考対策・ビジネスマナー編」
28. 6月3日(木) 就職活動支援 「外国人留学生向け就職活動に関するセミナー」
29. 6月8日(火) キャリア教育 「人間発達環境学研究科博士課程前期(修士)過程対象キャリアガイダンス」
30. 6月10日(木) キャリア教育 「人間発達環境学研究科博士課程後期(博士)過程対象キャリアガイダンス」
31. 6月14日(月) 就職活動支援 「GD練習会①」
32. 6月22日(火) 公務員 「心理福祉職」
33. 6月25日(金) 公務員 「行政職」
34. 6月29日(火) 就職活動支援 「GD練習会②」
35. 7月14日(水) 就職活動支援 「GD練習会③」
36. 7月27日(火) 教員採用 「私立学校で教える」
37. 7月29日(木) 就職活動支援 「GD練習会④」
38. 7月30日(金) 就職活動支援 「GD練習会⑤」
39. 10月4日(月) 就職活動支援 「就活準備リスタート講座&今後の計画」
40. 10月5日(火) 就職活動支援 「就活準備リスタート講座&今後の計画」
41. 10月12日(火) 就職活動支援 「秋冬 IS 参加のポイントと本選考の志望動機の書き方」
42. 10月14日(木) 就職活動支援 「秋冬 IS 参加のポイントと本選考の志望動機の書き方」
43. 10月18日(月) 就職活動支援 「業界のトレンドを知る!業界研究【応用編】その1」
44. 10月20日(水) 就職活動支援 「業界のトレンドを知る!業界研究【応用編】その2」
45. 10月21日(木) 就職活動支援 「職種・仕事研究講座」
46. 11月1日(月) 就職活動支援 「GD練習会 秋シリーズ #1」
47. 11月2日(火) 公務員 「心理福祉職公務員」
48. 11月4日(木) 教員採用 「教員採用試験対策スタートガイダンス」

49. 11月5日(金) キャリア教育 「進路・キャリアを考える 国人1年生向け」
50. 11月8日(月) 就職活動支援 「業界研究・専門商社」
51. 11月9日(火) 就職活動支援 「GD 練習会 秋シリーズ #2」
52. 11月10日(水) 公務員 「行政職の公務員試験」
53. 11月12日(金) キャリア教育 「進路・キャリアを考える 国人2年生向け」
54. 11月15日(月) 公務員 「神戸市福祉職説明会」
55. 11月16日(火) 公務員 「家裁調査官の仕事を知る」
56. 11月17日(水) 就職活動支援 「GD 練習会 秋シリーズ #3」
57. 11月18日(木) 教員採用 「私学教員・基本編」
58. 11月26日(金) 就職活動支援 「GD 練習会 秋シリーズ #4」
59. 12月1日(水) 公務員 「大阪市福祉職説明会」
60. 12月2日(木) 就職活動支援 「GD 練習会 秋シリーズ #5」
61. 12月6日(月) 教員採用 「大阪府豊能地区教員採用選考説明会」
62. 12月7日(火) 教員採用 「大阪府教育委員会説明会」
63. 12月8日(水) 教員採用 「京都府公立学校教員説明会」
64. 12月13日(月) 教員採用 「私学教員・対策編」
65. 12月16日(木) 就職活動支援 「業界研究(IT業界)」
66. 1月11日(火) 教員採用 「兵庫県教育委員会説明会」
67. 1月18日(火) 就職活動支援 「GD 練習会① 企業志望者向け」
68. 1月19日(水) 就職活動支援 「GD 練習会② 企業志望者向け」
69. 1月20日(木) 就職活動支援 「業界研究セミナー 空港業界」
70. 1月24日(月) 就職活動支援 「GD 練習会③ 企業志望者向け」
71. 1月25日(火) 就職活動支援 「面接対策講座」
72. 1月26日(水) 公務員 「GD 練習会 公務員志望者向け」
73. 1月27日(木) 就職活動支援 「GD 練習会④ 企業志望者向け」

(キャリアサポートセンター運営委員会委員長 澤宗則)

6.1.2. 学振特別研究員申請支援

学生委員会の主催の「学振特別研究員への応募のススメ」と題したセミナーを令和3年4月7日(水)にZoomによるWeb開催で実施した。

青木茂樹研究科長より特別研究員制度の概要についての説明、佐藤春実教授より審査委員経験を踏まえた申請書作成などに関するアドバイスがなされた。さらに、人間発達環境学研究科で採用されている特別研究員2名により、採用に至る経験談や申請や審査に関わる留意点などの紹介がなされた。Zoomによるセミナー参加者は講演者を含めて23名であった。なお、令和4年度特別研究員DC採用者は、新規で5名(DC1が1名、DC2が4名)であった。DC採用者の内3名はセミナー・ワークショップ参加者であった。ZoomによるWeb開催であったが、参加者も多く、昨年と同様に今回も好評であった。

○「学振特別研究員への応募のススメ」

・日時:4月7日(水)14時30分～15時50分 ・ZoomによるWeb開催
 特別研究員制度の概要と本研究科の現状(研究科長 青木茂樹 教授)
 審査・選考の実際-審査経験者の立場から(佐藤春実 教授)
 申請の実際-応募者の立場から(1)(人間発達専攻大学院生)
 申請の実際-応募者の立場から(2)(人間環境学専攻大学院生)

(学生委員会委員長 大串健一)

6.2. 卒業・修了後の進路

令和3年度の発達科学部卒業生・国際人間科学部卒業生の就職状況は、概ね良好であった。博士課程前期課程修了生も企業や公務員への就職者数や進学者数ほぼ例年通りであった。博士課程後期課程は学部や博士課程前期課程と異なり、公募による就職が主となるため年度毎に様相が異なるが、常勤の大学教員・研究職内定者が7名であり、就職状況は概ね良好であった。なお、進路状況、産業別就職者数、大学院進学者数などの詳細は『資料編』に記載した。

(学生委員会委員長 大串健一)

7. 研究

7.1. 今年度の特長

7.1.1. 研究動向

(1) 本研究科教員の研究活動

本研究科における過去6年間の研究活動の実績は、下表のとおり、概ね順調に推移してきている。令和3年度の活動(KUIDをもとに調査)は、「論文」396件、「著書」45件となっておりここ数年の値と同等であるが、「研究発表等」については新型コロナの影響と思われるがと例年に較べて低い数字が続いている。

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
論文	371	396	310	319	326	396
著書数	73	67	79	53	63	45
研究発表等	547	432	474	440	282	349

(2) 研究科ミッションの実現に向けた共同研究への支援

本研究科では、研究科のミッションの実現に向けた研究の推進・発展を図ることを目的として、「研究推進支援経費」を継続的に設定してきた。

すなわち、複雑・重層化する国内外の社会的課題を克服し、多世代・多様な人々の安全・安心で豊かな生活(well-being)を実現するためには、課題解決の基盤となるコミュニティにおける社会関係資本(社会的ネットワークにおける人間関係や信頼関係、社会的結束力)の構築や持続可能な環境共生社会の形成が急務である。このことを踏まえ、「研究推進支援経費」は、人間発達環境学研究科がこれまで蓄積してきた研究教育活動の成果を活かした先端的かつ独創的な研究(人間発達環境学研究科の機能強化に資する研究)をより一層推進することを目的として、領域横断的型プロジェクト研究や

文理融合型プロジェクト研究，国際共同研究に重点配分するとともに，若手教員による積極的な申請を奨励した。

令和3年度に研究推進委員会にて選定した共同研究は，以下のとおりである。

- ① 研究課題：打弦楽器の打叩動作における関節の動きの解明と、指導現場への還元
研究代表者：谷 正人
共同研究者：野中 哲士，岡野 真裕
決 定 額：810 千円

- ② 研究課題：不眠を予測するバイオマーカーの開発
研究代表者：古谷 真樹
共同研究者：佐藤 幸治，福田 博也，近藤 徳彦
決 定 額：800 千円

- ③ 研究課題：子どもの well-being を規定する要因の特定：生活行動・心理社会的環境を指標とした多層的検討
研究代表者：喜屋武 享
共同研究者：石原 暢
決 定 額：1,080 千円

(人間発達環境学研究科長 青木茂樹)

7.1.2. 学生の受賞

令和3年度における大学院生の受賞は以下の通りである。

受賞者：青山将己

受賞名：2021年度日本体育学会アダプテッド・スポーツ科学専門領域研究奨励賞（論文部門）

受賞題目：中央競技団体における障害者スポーツの統合・インクルージョン指標の構築：OCIIS ステージを用いて. 体育学研究, 65, 383-400, 2020

受賞者：堀田禎也，戸根明音，熱田希弘，柴田アンナ，松崎 淳，三浦 敬太，長ヶ原 誠

受賞名：日本生涯スポーツ学会第23回大会（ポスター発表賞〈学部生部門〉最優秀賞）

受賞題目：スポーツ参画思考・運動実施状況と主観的気力年齢との関係性 - 年代（若年層・中年層・高年層）と性別による比較 -

受賞者：島津大地

受賞名：日本スポーツ産業学会第9回冬季学術集会（若手研究者育成セッションにおける日本スポーツ産業学会賞）

受賞題目：地方競技団体におけるナレッジマネジメントに関する研究

受賞者：増田佳奈(博士前期課程)、邑上夏菜、勝原光希、宮崎祐子、丑丸敦史(人間環境学専攻博士課程前期課程2年、指導教員：丑丸敦史)

受賞名：日本生態学会近畿地区会・例会 奨励賞

受賞題目：ツユクサにおける送粉環境に適応した花形質の集団間変異

(学生委員会委員長 大串健一)

7.2. 学術 Weeks

学術 WEEKS は「国内外の学術交流活動を通して、大学院生・学部学生の視野を広げ、研究会の企画・運営・発表などの技能習得に資すること」を目的とした本研究科独自の取り組みである。毎年、秋期を中心として海外・国内から多くの研究者を招聘し、研究集会等の学術交流を行っている。多様な研究領域を擁する本研究科の特色が存分に活かされた取り組みであり、良質な領域横断的プログラムが提供されてきた。多くの大学院生・学部生にとって、様々な分野の国際交流を通して、自分の研究を見つめ直し、研究会の企画、運営、発表などの多くのスキルを習得するための有益な機会となっている。

本年度も昨年同様、新型コロナウイルスへの対応のため、例年のような対面での企画の実行が困難であった。そのため企画件数自体は減少したが、海外の著名な研究者・実践家との連携を通じて、人間発達をめぐる最先端の課題に迫る試みや、オンライン時代の協働型アート製作を提案する試みなどグローバルな視点での企画だけでなく、国内・近隣においても対面型とオンラインの併用による研究集会を模索する企画も実施され、アフターコロナ・ウィズコロナの時代を切り拓こうとする意欲的な試みが多く見受けられた。個別の企画内容に関しては以下の例を参照されたい。

(学術 WEEKS2021WG 主査 山下晃一)

7.2.1 学術 Weeks の各事業・セミナー

(1) フィンランドのアーティスト Videokaffe: 拠点を持たないアーティストたちによるオンライン共同作業について

【日程】9月23日(木) 17:50~19:20 【参加者】約40名

【概要】2011年に生まれたアート・テクノロジー・クラフトマンシップを横断する国境を越えたアーティストグループ「Videokaffe」は製作活動のための物理的な拠点を持たず、テクノロジーを用いてダイナミックな活動を続けている。このレクチャーではコロナ禍以前からオンラインでの共同製作作業を行ってきた Videokaffe のアーティストたちがオンラインでの共同製作作業の事例について報告し、オンラインでの共同作業の可能性・今後の展望を議論した。レクチャーには Videokaffe のメンバー Sebastian Ziegler (フィンランド) と Mark Andreas (米国) が登壇し、フィンランドのトゥルク、米国のニューヨーク、さらに日本の神戸の3地点をリアルタイムでつなぎ、神戸からは神戸の C.A.P (芸術と計画会議) 代表の下田展久氏と、神戸大学の学生が参加し、活発なディスカッションが行われた。

(人間発達専攻 野中哲士)

(2) ASD 研究の最前線 ―乳児から青年まで；「発達」に応じて ASD のある子どもにどう介入す

るかー

【日程】2021年12月3日 【参加者】神戸大学学部生，院生，職員，外部参加者 計29名

【概要】テーマ:Trend of Research for Children with ASD - What Intervention Can We Do for Individual with ASD from Birth to Adolescence - (邦題:ASD研究の最前線 ー乳児から青年まで:「発達」に応じてASDのある人にどう介入するかー

University of California, Davis MIND InstituteからASD研究の世界的権威であるDr. Sally Ozonoffをお招きし，国際シンポジウムを行った。神戸大学からは，鳥居がASDのある子どもの発達についての概観，院生齊藤空さんが日本の当別支援教育制度について，横田慧さんがASDのある子どもの発達支援で重要な人との関りについて，学部生富山成貴さん，板原直加さんが日本の学校教育における特別支援の現状，院生西あかねさんが高校生を対象とした移行支援プログラムとアドボカシーについて発表した。Dr. Sally Ozonoffはメインレクチャーとして “Early Identification of Autism Spectrum Disorder” について研究の成果をお話くださった。特に博士が開発された “Video Referenced Infant Rating System for Autism (VIRSA)” は，たいへん素晴らしいプログラムで，将来的には日本にも導入したいものであった。シンポジウムは，一部日本語を交えながら英語で行った。院生・学部生にとっては，英語でのプレゼンテーションの体験とともに，Dr. Ozonoffのプレゼンテーションの日本語翻訳を通じて，世界レベルの研究に触れる機会となった。

(人間発達専攻 鳥居深雪)

7.3. 研究科支援プロジェクト研究

(1) 打弦楽器の打叩動作における関節の動きの解明と、指導現場への還元

1. 研究目的の概要

本研究は、イランの打弦楽器サントウールの打叩動作を、モーションキャプチャーやスローモーション映像を用いて解明することを通して、「近年の演奏家が実際にしていること」と「指導現場で教えられていること」との差を浮き彫りにすることで、その差を踏まえた指導言語のアップデートを目指すものである。

2. 研究組織 ①代表者：谷正人（人間発達専攻）民族音楽学

②共同研究者：野中哲士（人間発達専攻）認知科学

岡野真裕（人間発達専攻）身体運動科学

3. 研究実績の概要

① オンラインを含むプレゼンやミーティングを行い，またドラム打叩の研究実績を持つ慶応義塾大学の藤井進也准教授からも助言を得たうえで，計測機器の選定や方法などについて複数回協議を行った。

② 国内のサントウール奏者2名を対象として，モーションキャプチャーやスローモーション映像を用いてその動きを計測し分析を行った。

4. 研究成果発表

研究成果については Frontiers in Psychology : Performance Science に締め切りである 2022 年 6 月までに投稿予定である。進捗状況として 2022 年 3 月の段階で英文校正を終えている。

5. 大型科研費を含む複数の科研費の申請
科研費 (B) に申請予定である。

(担当 谷正人)

(2) 不眠を予測するバイオマーカーの開発

1. 研究目的の概要

国民 5 人に 1 人が不眠で悩んでいるが、慢性化すると改善が困難であるため、早期発見と予防が重要である。本研究は、不眠の要因である心理的ストレスを反映する複数の生理指標の変動から急性不眠を予測するバイオマーカー開発を目的とする。

2. 研究組織

- | | | |
|---------|----------------|--------|
| ① 代表者 | 古谷真樹 (人間発達専攻) | 睡眠心理学 |
| ② 共同研究者 | 佐藤幸治 (人間発達専攻) | 生化学 |
| | 福田博也 (人間環境学専攻) | 生体電子計測 |
| | 近藤徳彦 (人間発達専攻) | 応用生理学 |

3. 研究実績の概要

① 実験計画の立案

メンバー全員で各生理指標の測定方法と手続きについて議論し、実験計画を確定した。

② 実験実施・データ収集

日常生活の中で実験協力者が生理指標を測定・記録するフィールド実験を実施し、現在も継続中である。

③ 研究成果発表

これまでに収集したデータについては、パイロットスタディとして学会発表を予定している。本研究課題に関する研究課題で科研費 (基盤研究 C) へ応募した。

(担当 古谷真樹)

(3) 子どもの well-being を規定する要因の特定：生活行動・心理社会的環境を

1. 研究概要・目的

世界と比して日本の子どもは、死亡率や肥満を指標とする身体的健康が良好である一方、生活満足度と自殺率を指標とする精神的幸福度は最下位と well-being のパラドックスが生じている。世界規模の課題とされる青少年のメンタルヘルスの問題は、日本ではより深刻で急務の課題である。

本研究の目的は子どもの well-being に影響を与える要因について“個人の生活行動”“社会関係”“心理社会的環境”“家庭の社会経済状況”等、多層的観点から特定することとした。

研究方法として、小中学生 6,500 名規模の既存ビッグデータをもとに well-being と関連のある要因を多層的に検討した (継続中)。

2. 研究組織

- ①代表者 喜屋武享（人間発達専攻） 子どもコミュニティ支援
- ②共同研究 石原暢（人間発達専攻） 応用身体運動科学

3. 研究実績の概要

①データセットの構築・解析

大規模データのスクリーニングを終え、解析可能な状態にデータを整えた。

②研究成果発表

- (1)第14回欧州公衆衛生学会（14th European Public Health conference）にて、当該データの分析により見出した研究成果（タイトル「Adherence to 24-hour movement guidelines among Japanese elementary and junior high school students」）を発表した。
- (2)Frontiers in Psychologyの特集：The Effects of Physical Activity and Exercise on Cognitive and Affective Wellbeingに「Meeting 24-h movement guidelines and associations with health complaints: a cross-sectional study with over 6,500 Japanese adolescents」とのタイトルで投稿を予定している。
- (3)今後，“健康の社会的決定要因モデル”に依拠した更なる解析を進め、well-beingの決定要因について同定することを目指す。帰する研究成果は学術論文化し、関連学会誌に投稿することを予定している。

③研究費の申請

本研究課題に関連する研究内容で科研費（基盤研究（B）（一般））へ応募した。

（担当 喜屋武享）

7.4. 高度教員養成プログラム

2013年に教育連携推進室の開設して以降、その開発研究部門において高度教員養成プログラムを企画・運営している。本プログラムは、グローバル化する知識基盤社会において、教育実践のアクション・リサーチを含む理論的・実践的研究に主導的に携わり、かつ、国際的にも通用する高度な教育能力および研究能力を備えた教員養成を行うことを目的とし、本学附属学校部と連携しながら実施した。参加者は人間発達環境学研究科博士課程前期課程の大学院生であり、教員専修免許取得希望者8名が参加し、大学院後期課程院生5名がサポーターとして参入した。なお、2021年は6月から7回のセミナーを実施した。なお、7回のうち、4回は遠隔（zoom）による開催、3回は面談による開催となった。（セミナー報告の詳細は次のサイトにある。<https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/6251>）参加院生には不十分ながら国内学会等への参加発表支援を当該プログラム予算から行った。

1) 高度教員養成プログラムセミナー

第1回 高度教員養成プログラムへ参加するために：附属学校部と大学院人間発達環境学研究科の連携による本プログラムに関するガイダンス

講師 本学教員，本学附属学校部担当者

- 日時 2021年6月18日(金) 17:00~18:30
会場 遠隔 (Zoom)
- 第2回 発育発達学視点に立った運動指導の重要性
講師 長野 崇 (大阪国際大学・講師)
日時 2021年7月16日(金) 17:00~18:30
会場 F255 (対面開催)
- 第3回 学習を支えるメタ認知の機能と役割
講師 久坂 哲也 (岩手大学・准教授)
日時 2021年10月15日(金) 17:00~18:30
会場 遠隔 (Zoom)
- 第4回 小学校第1学年の児童の数に対する認識の実態を踏まえた指導の工夫
講師 中橋 葵 (京都文教大学・講師)
日時 2021年11月19日(金) 17:00~18:30
場所 遠隔 (Zoom)
- 第5回 音楽によるアクションリサーチ的アプローチの可能性と課題
講師 根津 知佳子 (日本女子大学・教授)
日時 2021年12月17日(金) 17:00~18:30
場所 遠隔 (Zoom)
- 第6回 <教育の自由>と学校評価
講師 奥村 好美 (兵庫教育大学・准教授)
日時 2022年1月21日(金) 17:00~18:30
会場 F255 (対面開催)
- 第7回 リサーチ報告会
講師 辻 弘美 (大阪樟蔭女子大学・教授)
日時 2022年2月18日(金) 17:00~18:30
場所 F255 (対面開催)

(教育連携推進室長 國土将平)

7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続共同研究

「神戸大学ー附属中等教育学校高大接続研究」

神戸大学が、「グローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げる附属中等教育学校を活用した高大連携・接続の在り方に関して行う研究に対し、人間発達環境学研究科の教員が積極的に協力した。具体的な連携事業としては、附属中等教育学校生徒が参加したプログラムとして、「根源を問い革新を生む国際的科学技术人材育成挑戦プログラム (ROOT プログラム)」といった人間発達環境学研究科が実施するグローバルな課題に関するプログラム等が挙げられる。さらに、附属中等教育学校のインターンシップ学習「KU トライやる」に対して、人間発達環境学研究科の教員が協力し、附属中等教育学校生徒を受け入れた。

また、附属中等教育学校生徒が卒業研究として取り組む「課題研究」に、人間発達環境学研究科のSS研究アドバイザーなど複数の教員が、研究の進め方や分析の仕方についての助言などを行ったり、プログラムを実施した。また、優秀者発表会においても講評を行った。さらに、人間発達環境学研究科の教員の科学研究費（基礎研究（B））に研究分担者として、「ヒューマンコミュニティ創成研究A」「同B」の授業に協力者として、それぞれ附属中等教育学校の教員が参加した。さらに、数理・データサイエンスセンター主催「高等学校教員向け統計研修会」における附属中等教育学校教員の発表に、人間発達環境学研究科の教員が指導助言を行った。

（神戸大学附属中等教育学校 SS研究アドバイザー 林創）

7.6. 研究推進

7.6.1. 研究推進委員会

本委員会は研究科長、副研究科長、専攻長、発達科学部学科長及びその他研究科長が必要と認めた者として国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）を加えた10名で構成され、研究科における共同研究の推進、研究シーズの発見と育成、外部資金の獲得に向けた組織的対応等について議論を行った。

令和3年度の検討事項は以下のとおりである。

	検討事項
第1回（4月2日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 令和3年度研究支援経費について 2. 「人を対象とした実験実施に係る留意事項」 3. 令和2年度科研採択数について 基盤研究A・B・C、若手研究、挑戦的研究、国際共同加速 4. 学振特別研究員DCの申請支援の取り組みについて
第2回（5月7日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 令和2年度研究支援経費報告書 2. URA室の協力による学振特別研究員（DC）の申請書推敲ワークショップ 3. 神戸大学博士学生フェローシップ 4. 令和3年度大学発アーバンイノベーション神戸の募集 5. バイアウト制度 6. （その他）令和3年度科研採択数（先月の報告に追加）
第3回（6月4日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 令和3年度「研究支援経費」応募にかかる審査について（3件） 2. 2019年度「研究支援経費」成果報告書について（2件） 3. 研究の国際化加速事業（今年度まで）
第5回（7月2日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 科研費申請にむけて 2. 「神戸大学におけるバイアウト制度」 3. 神戸大学博士学生フェローシップ 4. 研究の国際化加速事業（令和3年度）

（研究推進委員会委員長 青木茂樹）

7.6.2. 研究倫理審査委員会

本年度は126件の申請があり、77件が承認、41件が条件付承認、5件が変更の勧告、2件の非該当、取り下げ1件であった。申請件数は、数年間の漸減を経て、2019（令和元年）より増加に転じ、同年95件、2020（令和2年）124件、2021（令和3年）126件となっている。

本年度における大きな動きとしては、令和3年6月30日から「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」が施行されたことと、「各種手続等に関する書面、押印及び対面の手続の見直し」が全学で行われたことが挙げられる。倫理指針の改定内容について委員会で周知徹底するとともに、委員会の構成要件にかかわって「神戸大学大学院人間発達環境学研究科における人を直接の対象とする研究に関する規程」を修正した。合わせて、研究倫理審査申請書、再審査請求書、変更申請書の押印欄を削除し、研究代表責任者である教員からメールで提出する形式に変更した。この変更に合わせて、審査過程で指摘されることが多かった内容について、審査申請書のテンプレートの微修正を行い、申請者の負担軽減をはかった。申請書の修正を含めた規程の改定は、2月の教授会で承認され、令和4年4月1日から施行している。

（研究倫理審査委員会委員長 坂本美紀）

7.6.3. 紀要編集委員会

令和3年度研究紀要編集委員会は、昨年度からの新型コロナウイルス感染拡大に伴い、会議はオンライン実施またはメール審議となった。また、研究紀要の投稿をすべてメールによるデータ送信とした。それに対応して、審査要領及び審査用紙の改定を行った。

「神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要」第15巻第1号は、研究論文5編（査読あり）、研究報告2編（査読なし）（2021年9月30日付発行）、第2号は研究論文11編（査読あり）、研究報告6編（査読なし）（2022年3月30日付発行予定）である。

また、かねてより指摘のあった文字ポイントの拡大に答えるため、執筆要領の改定を行い、令和4年度より新書式での投稿とした。

（研究紀要編集委員会委員長 鳥居深雪）

7.7. 各専攻の研究

7.7.1. 人間発達専攻

●心理系

(1) 国際共同研究

研究代表（本専攻教員）：加藤佳子

共同研究者：山根隆宏、古屋敷智之、Adrien Rigó, Roswith Roth, Sohar Kaori

研究資金：国際共同研究加速基金 国際共同研究(B)

研究課題：心の健康の保持増進のための国際支援プログラム評価指標の開発

研究概要：心の支援を必要とする者の支援関係者がそのストレスにうまく対処し、心の健康を保持増進し、生きがいを促進する機序について探求し支援関係者の心の健康・生きがい増進モデルを構築する。そのために歴史的にも先進的な心理支援に取り組み、一定の効果を上げている海外の地域（オーストリア）に中核共同研究拠点を置き国際ネットワーク

を構築する。

研究代表者（本専攻教員）：林 創

研究課題：子どもの社会的な心の国際比較に関する発達心理学的研究

研究資金：国際共同研究加速基金 国際共同研究強化(A)

研究概要：幼児期から児童期の子どもを対象に、社会性の発達を度を示す指標となりうる「嘘」と「道徳判断」の発達について、普遍性と文化的独自性を検討することを目的とする。

(2) 国内共同研究等

本専攻研究者：相澤直樹

共同研究者：石橋正浩（大阪教育大学）、齋藤大輔（金沢大学）、内海千種（徳島大学）、牧田潔（愛知学院大学）、平石博敏（金沢大学）

研究課題：自己制御課題としてのロールシャッハ法の神経基盤の探求

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（代表：石橋正浩）

研究概要：fMRI を用いてロールシャッハ法課題実施時の脳機能を自己制御課題の観点から検討する。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：小学生は授業スタンダードをどのようにとらえているか

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究C（代表：赤木和重）

研究概要：小学生が授業スタンダードについてどのように認識しているのかを明らかにする。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：新型肺炎感染拡大化における放デイの実践内容の把握と職員のストレス症状：インターネットを介した速報調査（代表：赤木和重）

共同研究者：木下孝司（本専攻）、川地亜弥子（本専攻）

研究資金：明治安田こころの健康財団 研究助成

研究概要：放課後デイ職員のストレス状況について、調査を通して明らかにする。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：日本・ニュージーランド・イタリアにおける保育カリキュラムの創造と評価の研究

共同研究者：塩崎美穂（東洋英和女学院大学）、加藤繁美（東京家政大学）、川田学（北海道大学）ほか

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究B（代表：塩崎美穂）

研究概要：日本・ニュージーランド・イタリアにおける保育カリキュラムについて比較検討を行う。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究

共同研究者：山田康彦（三重大学），森脇建彦（三重大学），根津知佳子（日本女子大学）ほか

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究C（代表：山田康彦）

研究概要：教員養成課程の大学の授業カリキュラムについて、対話的事例シナリオを用いた実証的研究を通して明らかにする。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：障害者の文化芸術活動の実践分析に基づくエンパワメント評価及び支援システム開発研究

共同研究者：津田英二（本専攻），稲原美苗（本専攻），松岡広路（本専攻），岡崎香奈（本専攻），大田美佐子（本専攻），清野未恵子（本専攻）

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究B（代表：津田英二）

研究概要：障害者の文化芸術活動の実践活動に注目して、エンパワメント評価の支援方法について検討を行う。

本専攻研究者：安達友紀

研究課題：慢性神経障害性疼痛に対する痛み焦点化催眠と催眠認知療法の効果検証

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究（代表者：安達友紀）

研究概要：慢性神経障害性疼痛患者への催眠療法と催眠認知療法の効果を検証する

本専攻研究者：安達友紀

研究代表者：細越寛樹（関西大学）

共同研究者：岩佐和典（大阪府立大学），福森崇貴（徳島大学），高岸百合子（駿河台大学），大江悠樹（杏林大学），平子雪乃（明治学院大学），横山仁史（広島大学），柴田正彦（奈良学園大学），伊藤正哉（国立精神・神経医療研究センター），堀越勝（国立精神・神経医療研究センター）

研究課題：慢性痛に対する認知行動療法の無作為化比較試験による効果検証とその普及に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：細越寛樹）

研究概要：慢性疼痛に対する認知行動療法の有効性を無作為化比較試験により検証する。

本専攻研究者：伊藤俊樹

研究課題：画家、彫刻家、音楽家、舞踏家の「自我のための退行」の有り様の違いについての研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（代表：伊藤俊樹）

研究概要：創造性の機序である「自我のための退行」の有り様が、芸術家のジャンルで異なるかどうかをロールシャッハ法を用いて研究した。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：黒川通典（大阪樟蔭女子大学）黒川浩美（大阪青山大学）

研究課題：行動科学を活用する食習慣改善支援ツールの開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（代表：加藤佳子）

研究概要：行動科学を活用した食習慣改善支援が必要とされている。ところが我が国では行動科学が

食習慣改善支援に導入されて、いまだ初期段階の状況にあり十分な成果を上げることができていない。この課題を解決するために食習慣改善支援促進モデルを構築し、食習慣改善支援促進ツールを開発する。

本専攻研究者：坂本美紀

共同研究者：山口悦司（本専攻）、伊藤真之（本専攻）、松河秀哉（東北大学）、益川弘如（聖心女子大学）

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシーの教師教育

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：坂本美紀）

研究概要：教育心理学と科学教育などの学際的な研究として、教師教育研究に取り組んでいる。

本専攻研究者：鳥居深雪

共同研究者：岡田智（北海道大学）

研究課題：発達障害特性の影響因を加味した知能検査解釈システムの構築

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：岡田 智）

研究概要：発達障害のある子どもへの治療・指導・支援の根拠の一つとなる指標得点及び下位検査プロフィールの再現性（再検査信頼性）、また、生活上での障害特性が関係する困難（生態学的情報）と知能検査中の行動反応（検査行動）、知能検査の結果（測定値）の関連を調べる。

本専攻研究者：林 創

研究課題：子どもの社会性を支える「察する」心の発達心理学的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表者：林 創）

研究概要：幼児期から児童期の子どもを対象に、特に向社会的行動の発達について実証的な視点から着目することで、これらが人間の社会性を支える「察する」心の発達に重要な意味をもつことを明らかにする。

本専攻研究者：林 創

研究課題：社会性の発達を左右する認知バイアスに関する心理学的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表者：林 創）

研究概要：子どもと大人を対象に、特に認知バイアスについて着目し、こうしたバイアスが社会性が発達していく上で左右することを実証的に明らかにする。

本専攻研究者：山根隆宏

研究課題：自閉症児の親におけるオンラインソーシャルサポートの実態と有効性に関する縦断的検討

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究（代表者：山根隆宏）

研究概要：自閉症児の親におけるオンラインソーシャルサポートの利用実態と、その有効性について縦断的な調査を通して検討するものである。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：石本雄真（鳥取大学），松本有貴（徳島文理大学）

研究課題：放課後等デイサービスにおける支援機能向上に資する複層的な支援リソースの開発と検証

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究C（代表：石本雄真）

研究概要：放課後等デイサービスで実施可能でかつ、発達障害児の不安の問題に介入できるプログラムを開発すること、および効果的な研修システムの開発とその効果検証を行うものである。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：石本雄真（鳥取大学），榎原久直（神戸松蔭女子学院大学）

研究課題：神戸市内の放課後等デイサービスの支援力向上を目的とした実践型研修プログラム開発

研究資金：令和3年度大学発アーバンイノベーション神戸（若手研究者の研究活動経費助成制度）（代表者：山根隆宏）

研究概要：神戸市内の児童発達支援事業所及び放課後等デイサービス事業所の研修ニーズを把握し、特に障害児の感情調整支援と家族支援に特化した実践型研修プログラムを開発し、その効果を検証する。

研究代表（本専攻教員）：山本健太

研究課題：成人自閉症者の現実場面における過去の記憶と未来思考の機能の解明

研究資金：科学研究費補助金・若手研究（代表：山本健太）

研究概要：自閉スペクトラム症者の記憶/未来思考の特徴を明らかにし、新たな支援手法の第一歩を生み出すことを目的とする。

本専攻教員：山本健太

共同研究者：倉田誠（東京医科大学），安井眞奈美（国際日本文化研究センター），新本万里子（国立民族学博物館），風間計博（京都大学），紺谷あかり（明治学院大学）

研究課題：生涯を通じたヒト-モノの関係性の生成と変化に関する人類学的研究

研究資金：科学研究費補助金・学術変革領域研究（A）（代表：倉田誠）

研究概要：オセアニアや日本の諸社会を対象として、主に障害者や女性に焦点をあて、人びとが生涯にわたって様々なモノとどのように関わり、そのような関わりが当該社会の生涯観の中でいかに考えられているかを検討する。

(3) 論文

国際共著論文

Takizawa, Y, Murray, J, Bambling, M, Matsumoto, Y, Ishimoto, Y, Yamane, T, Edirippulige, S. (in press). Integrating neuroscientific knowledge into psychotherapy amongst Japanese psychotherapists: presence, benefits, needs and cultural barriers. Asia Pacific Journal of Counselling and Psychotherapy.

(Web of Science 収録誌掲載論文)

ポーター倫子・キャサリンブランド・山根隆宏・森本佳奈・ヤナポージー (2021). 就学前の自閉スペクトラム症児の母親における育児ストレス—質的データ による日米比較. 自閉症スペクトラム研究, 19(1), 23-31.

加藤佳子・山根隆宏・ソーハー保田香織 (印刷中) オーストリアにおける心理職制度 —クリニカルサイコロジスト・ヘルスサイコロジスト・サイコセラピストについて— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要第 15 (2)

Web of Science 収録誌掲載論文

Adachi T, Yamada K, Fujino H, Enomoto K, Shibata M. Associations between anger and chronic primary pain: a systematic review and meta-analysis. *Scandinavian Journal of Pain*. 2022;22(1): 1-13. <https://doi.org/10.1515/sjpain-2021-0154>

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Yamamoto, T., & Wakabayashi, K. (2021). An intervention study on students' decision-making towards consensus building on socio-scientific issues. *International Journal of Science Education*, 43 (12), 1965-1983. <https://doi.org/10.1080/09500693.2021.1947541>

Hayashi, H., & Mizuta, N. (2022). Omission bias in children's and adults' moral judgments of lies. *Journal of Experimental Child Psychology*, 215, 105320.

Yamane, T. (2021). Longitudinal Psychometric Evaluation of the Developmental Disorder Parenting Stressor Index with Parents of Children with Autism Spectrum Disorder. *Autism*, 25(7), 2034-2047.

Takizawa, Y, Murray, J, Bambling, M, Matsumoto, Y, Ishimoto, Y, Yamane, T, Edirippulige, S. (in press). Integrating neuroscientific knowledge into psychotherapy amongst Japanese psychotherapists: presence, benefits, needs and cultural barriers. *Asia Pacific Journal of Counselling and Psychotherapy*.

Web of Science 収録誌外掲載論文

Toshiki Ito 'Relationship between Human-Robot Interaction, Robot Design and Psychological Images towards Robot -A psychological qualitative analysis of children's drawings of robot', *Journal of Science of Design*, 5(2), 11-20, 2021.11

Toshiki Ito 'RELATIONSHIP BETWEEN LIKING THE PERSONAL ROBOT 'PAPER0' AND PERSONALITY TRAITS -Personality traits and Robot Design-', *Journal of Science of Design*, (accepted Now Printing), 2022

赤木和重ほか (印刷中) コロナ感染拡大下における放課後等デイサービス職員のストレス状況 明

治安田こころの健康財団 研究助成報告書

生田邦紘・赤木和重 (2021) 軽度知的障害のある青年の障害受容：「ふつう」にこだわっていた青年はなぜ「ふつう」にこだわらなくなったのか 心理科学, 42(2), 97-118. (査読あり)

赤木和重 (2021) 障害のある子どもと即興的表現活動：教育的ユーモアとしての「よじれたノリ」 障害者問題研究, 49, 178-185.

前岡良汰・赤木和重 (2021) 小学生は授業スタンダードをどのように捉えるのか：個人の権利意識の発達の観点から 心理科学, 42(1), 1-13.

加藤佳子・黒川通典・黒川浩美 (印刷中) 「健康支援への受けとめ」と健康な食生活を送る動機づけおよびコンピテンスとの関連 学習開発学研究 14, 13-21.

黒田久恵・小島亜未・加藤佳子 (印刷中) トランスセオレティカルモデルにおける行動変容ステージと食品の摂取状況の関連 甲子園大学紀要, 49

小島亜未・加藤佳子 (印刷中) 保健指導実施者の自律支援アセスメント指標の検討 ―自己決定理論に基づいて― 福井県立大学論集 57

ガンデル・谷冬彦. (印刷中) 進路選択による自己明確化尺度の作成. 神戸大学発達・臨床心理学研究, 21.

Dr. Peter C. Mundy (翻訳鳥居深雪) 自閉症の学習障害モデル, LD 研究 30(3), pp194-205, 一般社団法人 日本LD学会

西あかね・鳥居深雪 (印刷中) 達障害のある高校生への大学移行支援プログラムの有効性―生徒のセルフアドボカシーの視点から―, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 14(2)

劉 娟・山根隆宏. (印刷中). 中国の自閉スペクトラム症児における応用行動分析に基づいたペアレントトレーニングの現状と課題. 神戸大学発達・臨床心理学研究, 21.

山根隆宏・大塚あかり・谷口あや・原田新 (印刷中). 自閉症関連ウェブサイトにおける情報の質と検索順位の一貫性の検討. 自閉症スペクトラム研究.

明翫光宜・高柳伸哉・鈴木勝昭・鈴木康之・伊藤大幸・村山恭朗・山根隆宏・小倉正義・水間宗幸・白石雅一・望月直人・水口勲・中島卓裕・浜田恵・中島俊思・野沢朋美・曾我部哲也・辻井正次. 生活困窮者支援におけるアセスメントの現状と課題. 臨床精神医学, 51(2), 195-203.

山根隆宏 (2021). 自閉症スペクトラム障害児をもつ親におけるインターネット利用と心理的ストレスの関連. 自閉症スペクトラム研究, 19(1), 5-12.

山本健太・増本康平 (印刷中) ASD 者における感情調整に関する横断的研究-方略の使用頻度, 精神的健康, 認知機能に着目して-. 発達障害研究, 43(4).

(4) 著書 (分担執筆)

呉文慧・赤木和重 (印刷中) 竹沢清『子どもの真実に出会うとき』全障研出版部 について 田中耕治 (監修)「シリーズ学級経営」 ミネルヴァ書房

赤木和重・呉文慧 (印刷中) 発達障害の理解と支援: 自閉症スペクトラム障害を中心に 応用心理学会 (編)「応用心理学事典」

瀧澤悠・Judith Murray・Matthew Bambling・松本有貴・石本雄真・山根隆宏・小林勝年・片山泰一・西田千寿子・Sisira Edirippulige (2021). 今日から始める子どもの心の支援—心理学と神経科学の融合から得られる理解—. 今井出版.

(5) 総説・書評など

赤木和重 (2022) 異年齢の視点から考える発達障害のある子どもたちの学び 指導と評価 807, 56-57.

赤木和重 (2022) 風越の教室に入ってみた (第9回) 「個に応じている学び」なのに なぜ「学びに向かいにくい子ども」が出てくるのだろうか? 風越学園 HP
https://kazakoshi.ed.jp/kazenote/akagi_report/21375/

赤木和重 (2021) 即興の視点から考える発達障害のある子どもたちの学び 指導と評価, 806, 54-55.

赤木和重 (2021) 知的障害のある青年に対する大学での授業実践報告 —「共同お悩み相談」の授業を通して— はあとブリッジ, 420, 3

赤木和重 (2021) 風越の教室に入ってみた (第8回) ゴム銃バンバンフェスティバル: 風越学園の「語られかた」を考える 風越学園 HP https://kazakoshi.ed.jp/kazenote/akagi_report/20208/

赤木和重 (2021) 書評「アメリカの学習障害児教育」(羽山裕子著) SNE ジャーナル 27 169-172

赤木和重 (2021) 子育てのノロイをほぐす—もう1つの「モノサシ」を意識してみる ちいさいなま (714) 36-43

赤木和重 (2021) 「自分の席は, 1つしかない」のだろうか? はあとブリッジ 417, 1.

赤木和重 (2021) 風越の教室に入ってみた (第7回) アウトプットデイ, 「フツーにおもしろい！」 風越学園 HP https://kazakoshi.ed.jp/kazenote/akagi_report/19166/

赤木和重 (2021) 風越の教室に入ってみた (第6回) なんだかいい感じのスタート! ? 風越学園 HP https://kazakoshi.ed.jp/kazenote/akagi_report/17914/

鳥居深雪 心理検査を活用したアセスメントバッテリーの組み方, LD, ADHD&ASD No. 25-28, 明治図書

鳥居深雪 セルフアドボカシーのポイント: 自己理解と援助要請・主張性, LD, ADHD&ASD No. 28, 明治図書

山本健太 高等部生産学習Ⅲ班(陶工) 実践に学ぶ特別支援教育の理念. 神戸大学附属特別支援学校研究推進委員会(編) 研究集録47「コミュニケーション的關係がひらく障害児教育～生活・集団・内面・発達と障害をとらえなおす～」. (印刷中)

(6) シンポジウムの開催

鳥居深雪 学術 Weeks シンポジウム Trend of Research for Children with ASD —What intervention can we do for individual with ASD from birth to adolescence—, Dr. Sally Ozonoff (University of California, Davis) との国際シンポジウム, 院生3名学部生2名も英語でのプレゼンテーションを行った

(7) そのほか委託事業など

会社の設立 株式会社日本消費者深層心理研究センターが、神戸大学発ベンチャー企業として認定された。(伊藤俊樹)

産官学共同プロジェクト

株式会社丸紅木材と有限会社新宅善寛商店との共同研究として檜玩具や木製玩具が幼児の遊びや発達にもたらす影響について文献研究を行い、評価指標の設定や今後の研究計画について議論した(山根隆宏)。

地域連携プロジェクト

障害児の感覚運動指導実践

神戸市総合児童センターと神戸松蔭女子学院大学と連携・協働し、障害のある子どもと家族を対象とした感覚運動指導教室 PRIME を神戸市総合児童センターにて開催した。新型コロナウイルス流行の影響により、前期は休室し、10月より開室した。計12組の家族を対象とした14回の継続指導や、次期活動希望者を対象とした教育相談等、本学や神戸松蔭学院大学の学部生・大学院生および地域の心理職とともに実践とその効果検証を行った。(山根隆宏)

重度重複障害児の感覚運動指導実践

神戸市総合児童センターと神戸松蔭女子学院大学、姫路大学と連携・協働し、重度重複障害児とその家族を対象に、神戸大学名誉教授中林稔堯主催で「チャレンジルーム」を神戸市総合児童センターにて開催した。本学の学部生・大学院生も参加し、重度重複障害児への感覚運動指導を3回行った。
(山根隆宏)

健康ビッグデータを活用した県民の健康づくり事業

兵庫県委託事業 特定健康診査等のデータ分析や健康教育に関する調査を実施し、健康教育に関わる地域特性を明らかにした。(加藤佳子 高田義弘)

(8) 心理系講座の研究の総括と課題

教育、発達、健康、発達支援などにおける心理に関する課題の解決に向けた研究が、活発に行われた。これらの研究は人々の QOL(Quality of Life)の向上につながる貴重な研究である。そのため本講座で得られてきた研究成果は、研究としてとどめ置かれることなく、きれめなく、社会へとつながっている。2021 年度も産官学共同プロジェクトや地域連携プロジェクト、ベンチャー企業の設立などの形として展開していることが報告され、心理系における研究の社会的貢献度の高さがうかがわれた。また国際共同研究、国際共著論文などの報告もされており、国内において得られた課題解決のための研究成果を軸に、国際コミュニティへの参加の動向が高まってきている。今後も引き続き、これらの取り組みが継続されることが課題である。

●表現系

(1) 国際共同研究

研究代表者(本専攻教員): 岡崎香奈

研究課題: Fundamental Guidelines for Music Therapy Training and Education-Global Perspectives-

研究資金: 個人研究費

研究概要: World Federation of Music Therapy(世界音楽療法連盟)の養成教育・資格認定委員として、Music Therapy Education and Training Guidelines 作成のワーキンググループを立ち上げ、アメリカ、イギリス、イタリア、ブラジル、インド、韓国の音楽療法士らと研究プロジェクトを進めている。

本専攻研究者: 大田美佐子

共同研究者: Carol J. Oja (Harvard University)

研究課題: 20 世紀における米日音楽交流(占領期を中心に)

研究資金: JSPS (2017), Harvard University (Reischauer Institute of Japanese Studies 2018)

研究概要: 2017 年の JSPS による招聘を契機に始まった米日両国間の音楽文化交流に関する研究。2019 年度は American Music に査読論文掲載。2021 年 6 月 Irving Lowens Article Award 受賞。

(2) 国内共同研究等

研究代表者（本専攻教員）：岡崎香奈

研究課題：日本におけるノードフ・ロビンス音楽療法士養成教育の実践

研究資金：個人研究費

研究概要：本研究は、即興を中心とした主要音楽療法アプローチでもある「ノードフ・ロビンス音楽療法士」の養成を日本で可能にするために、全国の音楽療法士養成教育に携わる大学教育者・研究者と共に実践的なプランを練り、作成した養成プログラム案が International Trust for Nordoff-Robbins Music Therapy に承認された。実際に「ノードフ・ロビンス音楽療法士」の養成に携わり、臨床即興の技術がどのように身に付くかについての実践研究を行った。

本専攻研究者：谷正人

研究課題：中東少数派の音文化に関する研究—共有と非共有に着目して—

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B)

飯野りさ，谷正人，米山知子

本専攻研究者：関典子

共同研究者：権田康行（東りいたみホール館長），鈴木晶（法政大学名誉教授／舞踊評論家），佐藤一紀（ヴァイオリニスト／ピアニスト），三浦栄里子（ピアニスト），若林絵美（バレリーナ／薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタント・キュレーター），金子彰宏（兵庫県立芸術文化センター），舞踊ゼミ他有志

研究課題：東りいたみホール produce／神戸大学創立 120 周年記念事業「関典子ダンス公演『牧神とニンフの午後』」

研究資金：公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団，令和 3 年度次世代応援舞台芸術支援事業（公益財団法人兵庫県芸術文化協会）

研究概要：最新作『牧神とニンフの午後』世界初演，『瀕死の白鳥』バレエ版の復元上演とコンテンポラリーダンス版，『動物の謝肉祭』の再創造を行った（2022 年 2 月 12 日いたみアイフォニックホール）。作品解説の対談および兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」ロビー展示も同時開催。伝説のダンサー，ワツラフ・ニジンスキーの初振付作品『牧神の午後』に基づくダンスの新境地への挑戦として，毎日新聞・神戸新聞・週刊オン★ステージ新聞・Chacott Web Magazine DANCE CUBE などでも大きく掲載された。

本専攻研究者：関典子

共同研究者：平野恵美子（中京大学教養教育研究院特定任用教授／神戸市外国語大学客員研究員／洗足学園音楽大学非常勤講師）

研究課題：薄井憲二バレエ・コレクション第 28 回企画展「バレエで描かれたインド～想像と創造～」

研究資金：兵庫県立芸術文化センター

研究概要：兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」企画展として，兵庫県立芸術文化センターロビー（2 階）展示室ポッケにて開催（2022 年 1 月 13 日～3 月 6 日）。アンティ

ークプリント・プログラム・台本・写真・葉書・絵画など約 35 点を展示。展示の企画およびリーフレットの監修を務めた。

研究代表者（本専攻教員）：余田有希子

共同研究者：なし

研究課題：無声映画伴奏譜集にみられる楽曲構造の分析

研究機関：2019 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究

研究概要：無声映画期には、映画の場面や感情・アクションを想定して作曲あるいは編曲された伴奏用音楽がインデックスと共にまとめられ、伴奏譜集として数多く編纂・出版された。本研究は、当時の伴奏譜集に収録された豊富な楽譜資料をもとに、情景・感情・アクションなどがどのように音楽構造に表出されるのか、楽譜分析ソフトウェアツールを用いながら、作品・作家単位ではなくマクロな視点から通底する要素を明らかにすることを目的としている。またその研究成果が、今後の映画・映像のための音楽創作においても活用し得るものとなるよう、体系的にまとめることを目指す。研究計画三年目にあたる今年度は、「情景」特に、場所に関連するキーワードを持つ楽曲のデータベース作成と資料整理にあたった。

研究代表者（本専攻教員）：清水大地

研究課題：身体表現における複層的な演者間インタラクションの定量的検討

研究資金：科学研究費助成事業 新学術領域研究（公募研究）

研究概要：ダンスなどの上演芸術における複数名の演者間に生じる同期・協調の様相に関する基礎研究。特に、複数の表現媒体における対応関係や階層的な同期・協調関係の様相に関する定量的検討を行っている。

研究代表者（本専攻教員）：清水大地

研究課題：上演芸術における即興的に生じる演者間協調の定量的検討

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：ダンスや音楽などの上演芸術における複数名の演者間に生じる同期・協調の様相に関する基礎研究。特に、ダンサー等の主たる演者同士の同期・協調に加え、DJ といった場に共存する他の人々との間に生じる同期・協調の様相に関する定量的検討を行っている。

研究分担者（本専攻教員）：清水大地

研究課題：芸術創作領域における創造的熟達の学習過程の解明と熟達支援手法の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：絵画やダンスなどの芸術表現における表現者の熟達過程に関する定量的検討とその知見に基づいた熟達支援方法の開発，効果検証

岡田猛（研究代表者），三井田盛一郎，横地早和子，清水大地

研究分担者（本専攻教員）：清水大地

研究課題：芸術的視点を取り入れた新しい高等教育の方法論の構築とその効果検証

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽)

研究概要：絵画やダンスなどの芸術表現において重要とされる知覚体験や感性、情動といった観点を
取り入れた大学教育の具体的な授業方法の開発・実施・効果検証

岡田猛（研究代表者）、福留東土、新藤浩伸、高木紀久子、清水大地

(3) 論文 (Web of Science 収録) * (10%論文にはマークを付す)

Shimizu, D., & Okada, T. (2021). Synchronization and Coordination of Art Performances in Highly Competitive Contexts: Battle Scenes of Expert Breakdancers. *Frontiers in Psychology*, 12, 635534

<https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.635534>

Kodama, K., Shimizu, D., Dale, R., & Sekine, K. (2021). An Approach to Aligning Categorical and Continuous Time Series for Studying the Dynamics of Complex Human Behavior. *Frontiers in Psychology*, 12, 614431

<https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.614431>

(4) 論文 (Web of Science 未収録)

梅宮弘光「転換期の風景—1961年の商店建築」『TEMPOLGY Vision』一般社団法人テンプロジー未来機構, vol.10, 2021年9月, p.17.

梅宮弘光「1950年代後半の大阪府八尾市において連続的に建設された公共施設としての5件の〈円形建築〉について」『2021年度日本建築学会大会（東海）計画系学術講演梗概集』, 2021年9月, pp.741-742

梅宮弘光「1950年代の円形校舎ブームとは何だったのか」『2021年度日本建築学会大会（東海）建築歴史・意匠部門研究協議会資料』, 2021年9月, pp.66-69

田畑暁生「地域情報化政策からスマートシティ、スーパーシティへ」『神戸大学人間発達環境学研究科研究紀要』15(1), pp.79-87.

平芳裕子（2022）「田中薫と民俗衣服—地理学から衣服学へ」『服飾美学』第68号, pp.1-18.

平芳裕子「シャネルスーツはなぜ女性解放の象徴となったのか」『ユリイカ:特集シャネル』, 青土社, 2021年6月)

関典子（2021）『牝鹿』と『牡鹿』, 兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」第27回企画展リーフレット, pp.1-4.

関典子, 岸純信（2021）《マルコ・スパダ》, 兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」第86回常設展リーフレット, p.1.

関典子, 岸純信（2021）《妖精ヴィトリ》, 兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」第87回常設展リーフレット, p.1.

関典子, 若林絵美（2022）『牧神の午後』と『瀕死の白鳥』, 兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」第88回常設展リーフレット, p.1.

関典子, 岸純信 (2022) 《予言者》, 兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」第 89 回常設展リーフレット, p. 1.

関典子, 平野恵美子 (2022) バレエで描かれたインド～想像と創造～, 兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」第 28 回企画展リーフレット, pp. 1-4.

Shimizu, D., Yomogida, I., Wang S., & Okada, T. (2021). Exploring the potential of art workshop: An attempt to foster people's creativity in an online environment. *Creativity: Theories - Research - Applications*, 8(1), pp. 89-107.

清水大地, 児玉謙太郎, 関根和生. (2021). フリースタイルラップバトルにおけるマルチチャンネル・インタラクシオン__同期理論を利用したケーススタディ__.『電子情報通信学会論文誌』, J104-A(2), pp. 75-83.

児玉謙太郎, 清水大地, 安田和弘. (2021). 非線形時系列解析による動作の質の評価と表現: 医療・スポーツ分野への応用 (特集 動作観察・分析を医療・スポーツ現場に活かす).『バイオメカニズム学会誌』, 45(4), pp. 227-238.

児玉謙太郎, 岡崎俊太郎, 藤原健, 清水大地. (2021). シンクロする人々: 個人間の身体的同期に関するレビュー.『認知科学』, 28(4), pp. 593-608.

田中章浩, 清水大地, 小手川正二郎. (2021). 顔・身体表現から探るトランスカルチャー.『映像情報メディア学会誌』, 75(5), pp. 614-620.

(5) 著書

Misako Ohta, Carol J, Oja “US Concert Music and Cultural Reorientation during the Occupation of Japan” in “Sounding Together”, University of Michigan Press, 2021, pp. 51-81.

大田美佐子『クルト・ヴァイルの世界 - 実験的オペラからミュージカルへ』(岩波書店, 全 494 頁, 2022 年 3 月)

平芳裕子「メディア」『クリティカルファッションスタディーズ』(蘆田裕史・藤島陽子・宮脇千絵編集、フィルムアート社、pp, 41-53.

関典子「第 6 章 舞踏とコンテンポラリーダンス: 和栗由紀夫との協働を超えて」pp. 243-274 (大野ロベルト, 相原朋枝 (編)『Butoh 入門: 肉体を翻訳する』文学通信, 2021 年 12 月)

(6) 訳書

なし

(7) 国際会議等発表

Kana Okazaki-Sakaue, Vivian Chan, Elizabeth Coombes, et. al: “Finding balance between being inclusive and upholding standards in music therapy education, training, and practice. “, Music Therapy Day Webinar, World Federation for Music Therapy, 2022.3.1 (Online)

Noriko Seki, Keiko Saito, Eriko Miura, “Inspired by Ballets Russes: Kenji Usui's unique collection”, St. Petersburg Culture Committee / St. Petersburg State Theatre Library: Saving

the Past, Creating the Future, 22. 10. 2021, St. Petersburg State Theatre Library, Russia.
(Online)

(8) 表現系講座の研究の総括と課題

人間発達研究において表現にかかわる専門分野を相互にいかに関連させるかは、当系講座の長年にわたる課題となってきた。教育においてはその相乗作用に一定の成果をあげているが、研究においてはそれぞれの専門性の深まりにともなって、そこに一律に適用できる評価指標を見出すことは難しいと言わざるをえない。当系講座の教員は各専門分野で顕著な研究活動を展開し、すでに高い評価を得ているうえに、本年度は新たに優秀な三人の新任教員を迎えることができた。今後も、学術・文化全体の本質でもある多様性は担保しながら、「表現」を核にした学術研究分野としての組織的フィッティングの模索が課題となるだろう。

本年度は大田美佐子准教授が Irving Lowens Article Award（アメリカ音楽史に関わる年間の論文賞）を受賞、谷正人准教授がサウンドトラック「るろうに剣心 最終章 The Beginning (No.1 人斬り抜刀斎 ～鬼心～)」へのサントゥール演奏音源提供、関典子准教授が、兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」展示のキュレーターとして、企画展2回、常設展4回を開催するなど、グローバルとローカルの両面で活躍を見せている。

●行動系

(1) 国際共同研究

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Eric S. Drollette (University of North Carolina at Greensboro), Sebastian Ludyga (University of Basel), Charles H. Hillman (Northeastern University), Keita Kamiyo (Chukyo University)

研究課題：一過性運動が認知機能に与える影響

研究概要：認知機能に対する一過性運動の効果およびその調整因子について、IPD メタ分析を用いて検討する。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Sebastian Ludyga (University of Basel)

研究課題：注意欠如・多動症児の身体活動と認知機能の関係

研究概要：注意欠如・多動症児の身体活動および体格指数と認知機能の関係を検討する。磁気共鳴画像法を用いて取得した脳画像データの媒介効果についても調べる。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Sebastian Ludyga (University of Basel), Keita Kamiyo (Chukyo University)

研究課題：社会認知機能と運動の関係

研究概要：一過性および習慣的運動と社会認知機能の関係を、自律神経系および中枢神経系機能の役割に着目して検討する。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Mitchell Turner (Edith Cowan University), Philipp Beranek (Edith Cowan University), Kate Turner (Edith Cowan University), Job Franssen (University of Technology Sydney), Philipp Born (German Sport University Cologne), Travis Cruickshank (Edith Cowan University)

研究課題：テニス競技経験と認知機能の関係

研究概要：テニス競技経験と認知機能の関係が成熟度によって異なるかを調べる。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Miguel Crespo (International Tennis Federation), Nicolas Robin (Université des Antilles), Takashi Naito (Hokkai-Gakuen University), Munenori Murata (National Institute of Fitness and Sports in Kanoya)

研究課題：COVID-19 の感染拡大がプロテニスプレーヤーのパフォーマンスに与えた影響

研究概要：COVID-19 の感染拡大による活動制限が、プロテニスプレーヤーのサービスおよびリターンパフォーマンスに影響を与えたのかを検討する。

研究代表者：近藤徳彦

共同研究者：Dr. Toby Mundel (Massey Univ), Dr Jim Cotter (Otago Univ). NZ 研究課題：女性に

おける発汗量、汗イオンおよび血漿イオンの調節と運動トレーニングの影響 (JSPS 二国間交流事業)

研究概要：女性における発汗量、汗イオンおよび血症イオン調節の関係を明らかにし、それが運動トレーニングによりどのような影響を受けるのかを検討する。

研究代表者：近藤徳彦

共同研究者：Dr. Glen Kenny, University of Ottawa, Canada 研究課題：発汗と皮膚血流調節に関

連する末梢機構の解明 研究概要：人の熱放散調節機構(発汗と皮膚血流調整機構)は、人の生体内の

恒常性維持には欠かせない。発汗と皮膚血流調節にはアセチルコリンやノルアドレナリンなど神経伝達物質が関わっているかが、これ以外にも多くの物質がその調節に影響している。この研究では発汗と皮膚血流調節に関連する末梢機構を神経伝達物質から解明する。

研究代表者：近藤徳彦

共同研究者：Dr. Ahmad Munir Che Muhamed (University of Science Malaysia), Malaysia

研究課題：地球温暖化の課題解決に関わる汗腺でのイオン再吸収能力の民族差

研究概要：汗腺では汗が皮膚表面に出てくるまでに、汗のイオン(塩分など)が皮内で再吸収されている。この機能が民族(マレーシア・日本)で差があるのかどうか検討する。

研究代表者：片桐恵子

・Justice, Equity, and Inclusion for Older Workers Boston College, Harvard University 他)

・Comparative concept of lifelong learning for senior citizens and its effects:

International comparative study of Japan and Ireland (Dublin City University)

・Pursuit for Social Engagement in Post-corona Society (Ewha Womans University, The University of Hong Kong)

・Age integration: Building a new social paradigm in aged society (Ewha Womans University 他)

・高齢者のソーシャルサポート授受と ICT: コロナ禍での活用と有効性の東アジア比較 (Ewha Womans University, The University of Hong Kong)

研究代表者：長ヶ原 誠

研究課題：ワールドマスターズゲームズ過去開催地における活性化効果の検証とレガシー創出指標の開発

共同研究者：国際マスターズゲームズ協会

研究代表者：長ヶ原 誠

研究課題：ワールドマスターズゲームズ関西の開催準備期におけるスポーツプロモーション事業とスポーツ参画モニタリングの開発

共同研究者：国際マスターズゲームズ協会

(2) 科研費による研究(代表分)

研究代表者：石原 暢

共同研究者：なし

研究課題：身体活動が認知機能を改善・発達させる神経ネットワークの同定

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：身体活動が認知機能を改善、発達させる背景にある神経ネットワークの変化を明らかにする。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：なし

研究課題：習慣的運動が子どもの社会性に与える影響：実行機能とオキシトシンの役割に着目して

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：習慣的運動が子どもの社会性に与える影響を、実行機能と唾液オキシトシンの役割に着目して明らかにする。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：なし

研究課題：幼少期の運動習慣が中高齢期の認知機能を維持・増進させる神経機構とその個人差の解明

研究資金：科学研究費補助金・学術変革領域研究(A)

研究概要：幼少期の習慣的運動が中高齢期の認知機能と関わる背景にある脳の構造的・機能的変化を検討する。

研究代表者 片桐恵子

共同研究者 竹内真純 福沢愛

研究課題：高齢者のソーシャルサポート授受と ICT：コロナ禍での活用と有効性の東アジア比較

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))

研究概要：コロナ禍において、対面によるソーシャルサポートに加え、ICT を利用しソーシャルサポートの利用の現状と有効性について、香港、韓国、日本の国際比較を行う。

研究代表者 片桐恵子

共同研究者 菅原育子 勇上和史

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究課題：ポストコロナ社会の高齢者就労と社会参画：人生 100 年時代における高齢期就労の課題

研究概要 ポストコロナ社会において、高齢就労者が高い well-being を実現するよう

な働き方を検討する

研究代表者：木村哲也

研究課題：手で軽い荷物を持つことによるトレッドミル歩行の安定化・効率化の確立

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究は、手で軽い荷物を持つことによる歩行動作時のバランス安定化と機械的効率向上を、トレッドミル歩行において基礎的に確立することを目的としている。

研究代表者：近藤徳彦

共同研究者：天野達郎，井上芳光，西保岳

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究課題：運動と遺伝子が高温下での運動パフォーマンスに関係する汗イオン濃度調節に 及ぼす影響 研究概要：運動と汗腺の構造に関連する遺伝子が汗イオン調節に及ぼす影響を明らかにし、それをもとに高温下での運動パフォーマンス低下の予防について検討する。

研究概要：運動と汗腺の構造に関連する遺伝子が汗イオン調節に及ぼす影響を明らかにし、それをもとに高温下での運動パフォーマンス低下の予防について検討する。

研究代表者：近藤徳彦

共同研究者：笠間敏博，井上芳光，藤井直人，天野達郎

研究資金：科学研究費補助金 挑戦的研究(萌芽)

研究課題：熱中症予防と皮膚の健康に欠かせないフレッシュな汗の量と成分の測定法開発
研究概要：フレッシュな汗の量と成分を連続的に測定する方法を開発

研究代表者：中村晴信

共同研究者：甲田勝康（関西医科大学）、藤田裕規（近畿大学）、小原久未子（近畿大学）

研究課題：体組成測定による骨・筋・脂肪の量・分布の可視化が成長期の食行動変容に及ぼす影響

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)（代表：中村晴信）

研究概要：小中学生に対する二重エネルギーエックス線吸収法による正確な体組成結果を材料として、食行動の変容に及ぼされる影響を検討する。

研究代表者：秋元 忍

研究課題：1914 年以前のイギリスにおける女性のホッケーの普及過程に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究 (C)

研究概要：1914 年以前のイギリスにおける女性のホッケーのゲーム普及過程について、1) 組織化以前のゲームの実施状況、2) 女性単独の統括組織の設立、3) 組織化以降のゲーム普及過程、の 3 課題を設定し、検討を行う。

研究代表者：増本康平

共同研究者：佐藤幸治（本専攻教員）・原田和弘（本専攻教員）・塩崎麻里子（近畿大学）

研究課題：エンド・オブ・ライフにおける感情調整機能の機序と役割

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究 (B)

研究概要：本研究は、「高齢期の感情調整機能はなぜ低下せず、向上するのか？」また、「感情調整機能は高齢期の人間関係、社会的役割、健康の喪失にどのように影響するのか？」この二つの学術的問いを解明することを目的とする。

研究代表者：増本康平

共同研究者：原田和弘（本専攻教員）・塩崎麻里子（近畿大学）

研究課題：高齢者の自律支援に最適化された情報提示方法の確立

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：高齢者の自由意志を阻害しない、かつ、高齢者が後悔しない判断を支援するための、高齢者の意思決定時の認知バイアスを考慮した情報提示のあり方を確立するのが本研究の目的である。

研究代表者：原田和弘

共同研究者：村上晴香（立命館大学スポーツ健康科学部）

研究課題：ドーパミンシステム系遺伝子多型に基づく運動習慣のオーダーメイド支援の可能性

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：本研究では、快感情や意欲に関する遺伝特性である、ドーパミンシステム系遺伝子多型によって、感情モチベーションが運動の習慣化に及ぼす影響力の強さが異なるかを明らかにする。本研究は、遺伝特性による“運動習慣のオーダーメイド支援”の実現を目指す芽生え期の研究であり、「どうすれば、運動の習慣化を効果的に支援できるようになるのか？そこに、遺伝要因をどう活かすのか？」という疑問に答えることに挑戦する。

研究代表者：佐藤幸治

研究課題：糖尿病予防に向けた新規骨格筋糖代謝調節経路の解明

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C

研究概要：糖尿病予防に向けた、新規骨格筋の糖代謝調節経路を解明することで、新たな、栄養介入や運動療法の開発に向けた基礎データとなりうる。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：歩行動作を構成する生体力学的サブタスク間での相互依存性

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要:ヒトの歩行動作は、接地時における荷重応答、足関節底屈・股関節伸展による推進力生成、遊脚の加速、減速といったサブタスクによって構成されている。本研究では、歩行動作を構成するサブタスク間での神経筋制御の相互依存性を明らかにすることを旨とする。具体的には、遊脚速度を変更させるときに同期的な筋活動パターンがどのように調整されるかを明らかにする。

(3) 科研費による研究 (分担者)

共同研究者:石原 暢

研究課題:運動による子どもの認知機能向上は学習成果に影響を与えるのか(研究代表者:森田憲輝)

研究資金:科学研究費補助金・基盤研究(C)

研究概要:子どもの習慣的運動と認知機能、授業態度、学習成果の関係を調べる。

共同研究者:石原 暢

研究課題:体力と集中力の関係:Classroom Neuroscience の確立を目指して(研究代表者:紙上敬太)

研究資金:科学研究費補助金・挑戦的研究(萌芽)

研究概要:子どもの体力と授業中の集中力の関係を調べる。

研究代表者 北村 智

共同研究者 片桐恵子 森 玲奈

研究資金:日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究課題:パーソナルネットワークに着目したグレイ・デジタル・デバイスに関する実証的研究

研究概要:高齢者のパーソナルネットワークと ICT 利用の関係について因果推論を行い、高齢者のグレイ・デジタル・デバイスを実証し、解消方法について検討する

研究代表者 森川 美絵

共同研究者 片桐恵子 伊藤由希子

研究資金:日本生命財団 実践的研究(実践的課題研究)助成

研究課題:「会社人」から「社会人」へーシニアプロボノが拓く地域社会ー

研究概要:高齢になって社会的孤立を防ぐために、現役時代から地域社会と交流する手段として企業のプロボノに着目し、企業のプロボノの現状を明らかにする

共同研究者:中村晴信, 伊木雅之(近畿大学), 藤田裕規(近畿大学)

研究課題:体脂肪分布が臓器機能障害におよぼす影響についての大規模疫学研究(代表:甲田勝康)

研究資金:科学研究費補助金・基盤研究(B)

研究概要:二重エネルギーエックス線吸収法による住民ベースの体脂肪分布のデータから、体脂肪分布の多様性が心血管疾患や内分泌代謝疾患等の臓器機能障害に及ぼす影響について検討する。

共同研究者:中村晴信

研究課題:幼児における体格・体組成と生活習慣因子との関連性(代表:間瀬知紀)

研究資金:科学研究費補助金・基盤研究(C)

研究概要:幼児を対象として食事・身体活動を中心とした生活習慣因子と体格・体組成の変化との関連性を評価することにより、幼児期の脂肪の急増および体組成の変化に影響を及ぼす生活習慣因子について解明する。

共同研究者:中村晴信, 有馬和彦(長崎大学), 前田隆浩(長崎大学), 西村貴孝(長崎大学), 安部恵代(長崎大学)

研究課題:日本人における性ホルモン・骨代謝回転・骨量間関連の生理的・遺伝的研究(代表:青柳潔)

研究資金:科学研究費補助金・基盤研究(B)

研究概要:欧米人とは遺伝的背景が異なる一般日本人中高年男女において、性ホルモンや骨代謝回転マーカーと骨量との関連を体格、遺伝子多型、さらにライフスタイルといった環境的要因を含め検討

する。

研究代表者：岡田修一（本専攻教員）

共同研究者：近藤徳彦（本専攻教員）・増本康平（本専攻教員）・谷口隆晴（神戸大学システム情報学研究科）・原田和弘（本専攻教員）

研究課題：健康増進に資する社会的ネットワーク可視化手法の開発と地域介入の効果検証

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（開拓）

研究概要：地域コミュニティにおける人とのつながりを定量的に測定するデバイスと測定されたデータからつながりを可視化する統計手法の開発、及びこれらを用いた地域介入研究の効果検証を目的とする。

研究代表者：稲垣成哲

研究分担者：溝口博（東京理科大学）・生田目美紀（筑波技術大学）・増本康平（本専攻教員）・楠房子（多摩美術大学）・小川義和（国立科学博物館）・小林真（筑波技術大学）・加藤伸子（筑波技術大学）・杉本雅則（北海道大学）・江草遼平（明治学院大学）

研究課題：科学系博物館におけるユニバーサルデザイン手法の開発と実践モデルの提案

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）

年度：2018-2021

研究概要：博物館におけるユニバーサルデザインの開発と実践を目的としたもの。

研究代表者：山口悦司（本専攻教員）

共同研究者：杉本雅則（北海道大学）・望月俊男（専修大学）・坂本美紀（本専攻教員）・増本康平（本専攻教員）・木村哲也（本専攻教員）・佐藤幸治（本専攻教員）

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発
研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

年度：2020-2022

研究概要：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発。

研究代表者：衣笠智子（神戸大学経済学研究科）

共同研究者：増本康平（本専攻教員）・安田公治（青森公立大学）・羽森 茂之（神戸大学経済学研究科） 勇上和史（神戸大学経済学研究科）

研究課題：新型コロナウイルス流行の寿命予測と貯蓄行動に対する影響

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

年度：2021-2024

研究概要：新型コロナウイルス流行で寿命や死亡率に関する意識がどう変化したか、また、その変化が貯蓄行動にどう影響したかを明らかにする。

（4） 地方自治体， 神戸大学等

共同研究者：石原 暢

研究課題：子どもの well-being を規定する要因の特定：生活行動・心理社会的環境を指標とした多層的検討（研究代表者：喜屋武享）

研究資金：人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」

研究概要：子どもの well-being に影響を与える要因について、多層的観点（個人の生活行動、社会関係、心理社会的環境、家庭の社会経済状況等）から明らかにする。

Kim Nahyun 国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の次世代研究者挑戦的研究プログラム事業、神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」のプロジェクト生として採用
Kim Nahyun 旭硝子財団奨学金採択（上記採択により辞退）

（5） 民間研究助成

研究代表者：石原 暢

共同研究者：なし

研究課題：体力と脳の構造的神経ネットワークの関係に関する研究

研究資金：一般社団法人伊藤忠兵衛基金学術研究助成金

研究概要：体力と大脳皮質の構造的領域間結合の関係を調べる。

研究代表者：秋元 忍

研究課題：日本の女子サッカーに関する研究

研究資金：公益財団法人日本サッカー協会 受託研究

研究概要：戦後日本における女子サッカーの展開の一端を明らかにする。具体的には、1967年3月19日に王子競技場で開催された神戸女学院中等部サッカー部対福住女子サッカースポーツ少年団の試合や、1980年以前の女子サッカー部やクラブの設立の状況や経緯について資料調査やインタビュー調査等を行う。

研究代表者：原田和弘

共同研究者：増本康平，岡田修一

研究課題：グループ運動中の交流の量と質が高齢者のメンタルヘルス向上に及ぼす影響

研究資金：明治安田厚生事業団・若手研究者のための健康科学研究助成

研究概要：高齢者のメンタルヘルス向上には、一人で行うよりも、グループで運動を行ったほうが効果的である。ただし、グループ運動中の交流の程度には個人差が大きい。そこで本研究では、高齢者約150名へグループ運動介入を行い、介入中の交流の程度の違いによって、メンタルヘルスの向上効果が異なるかを検討する。本研究は、社会的な観点から、高齢者のメンタルヘルス向上に最適な運動様式の解明を目指す研究と位置づけられる。本研究から、グループ運動中にどのような交流を持つことが、メンタルヘルス向上により効果的であるのかを示唆できる。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：筋協調の感覚代替システム構築の試みと歩行学習への応用

研究資金：公益財団法人立石科学技術振興財団 研究助成(A)

研究概要：リハビリテーションやスポーツコーチングの現場においては、筋を協調させるという感覚が暗黙的に重要視されている。本研究では、歩行能力向上に貢献する筋協調バイオフィードバックシステムの構築を目指す。

(6) 共同研究（企業）

研究代表者：近藤徳彦，山根隆宏

研究課題：檜が人の生体反応や行動・発達に及ぼす影響の解明 研究資金：丸紅木材・株，有・新宅善廣商店

研究概要：檜の匂いが生体の生理学的や精神的な機能に及ぼす影響を明らかにする

研究代表者：増本康平（本専攻教員）

共同研究者：岡田修一（本専攻教員）・近藤徳彦（本専攻教員）・原田和弘（本専攻教員）・石原暢（本専攻教員）

研究課題：地域コミュニティを対象としたeスポーツの展開

研究資金：西日本電信電話株式会社

年度：2021-2022

研究概要：地域コミュニティの住民を対象としeスポーツ体験がコミュニケーション活性や気分に及ぼす影響を明らかにする。

(7) Web of Science 収録論文

Morita, N., Ishihara, T., Yamamoto, R., Sato, T., Shide, N., Okuda, T. (2022). Content validity and reliability of an enjoyable multicomponent agility test for boys: The N-Challenge Test. *Journal of Sports Sciences*, *in press*.

Ishihara, T., Miyazaki, A., Tanaka, H., Fujii, T., Takahashi, M., Nishina, K., Kanari, K., Takagishi, H., & Matsuda, T. (2021). Childhood exercise predicts response inhibition in later life via changes in brain connectivity and structure. *NeuroImage*, *237*, 118196.

Miura R., Araki A., Ishihara T., Miyake K., Miyashita C., Nakajima T., Kobayashi S., Ishizuka M., Kubota T., Kishi R. (2021). Effect of prenatal exposure to phthalates on epigenome-wide DNA methylations in cord blood and implications for fetal growth: The Hokkaido Study on Environment and Children's Health. *Science of the Total Environment*, *783*, 147035.

Ishihara T., Morita, N., Nakajima, T., Yamatsu, K., Okita, K., Sagawa, M., & Kamiyo, K. (2021). Differential effects of changes in cardiorespiratory fitness on worst- and best- school subjects. *npj Science of Learning*, *6*(1), 8.

Harada K, Masumoto K, Katagiri, K, Fukuzawa A, Touyama M, Sonoda D, Chogahara M, Kondo N, Okada S. (2021). Three-year effects of neighborhood social network intervention on mental and physical health of older adults. *Aging and Mental Health*, *25*, 2235-2245.

Chinami Taki, Akio Nakata, Naruhiro Shiozawa, Ken Kiyono, Tetsuya Kimura
Cross-correlated fractal components of H-wave amplitude fluctuations in medial gastrocnemius and soleus muscles. *Neuroscience Letters* 765(136264) 1-7, 2021.

Mase T, Ohara K, Momoi K, Nakamura H (2022) Association between the recognition of muscle mass and exercise habits or eating behaviors in female college students. *Sci Reports*, 12:635. doi: 10.1038/s41598-021-04518-8

Ohara K, Tani S, Mase T, Momoi K, Kouda K, Fujita Y, Nakamura H, Iki M (2021). Attitude toward breakfast mediates the associations of wake time and appetite for breakfast with frequency of eating breakfast. *Eat Weight Disord* doi: 10.1007/s40519-021-01250-0. [Online ahead of print]

Fujita Y, Kouda K, Ohara K, Nakamura H, Nakama C, Nishiyama T, Iki M (2021) Infant weight gain and DXA-measured adolescent adiposity: data from the Japan Kids Body-composition Study. *J Physiol Anthropol*, *40*(1):10. doi: 10.1186/s40101-021-00261-1.

Harada K, Masumoto K, Okada S. (2021). Distance to supermarkets and dietary variety among Japanese older adults: examining the moderating role of grocery delivery services. *Public Health Nutrition*, *24*, 2077-2084.

Koji Sato, Hinata Kihara, Yoka Kumazawa, Koki Tatara. Oral chronic sulforaphane effects on heavy resistance exercise: Implications on inflammatory and muscle damage parameters in young practitioners. *Nutrition*, *90*: 111266-111266.

Koji Sato, Yoka Kumazawa, Tetsuya Kimura. Effects of acute aerobic exercise and menstrual cycle on immune responses in young women. *Gynecological and Reproductive Endocrinology & Metabolism*, in press.

Kibushi, B., Kihira, N., Moritani, T., & Kouzaki, M. (2021). Disturbance of neural coupling between upper and lower limbs during gait transition. *Neuroscience Letters*, *761*, 136100.

(8) 国際共著論文

Ludya, S. & Ishihara, T. (2022). Longitudinal Associations Between Physical Activity, Body Mass Index and Inhibitory Control in Children with ADHD: Mediation by Brain Structure.

Turner, M.*, Ishihara, T.*, Beranek, P., Turner, K., Fransen, J., Born, P., & Cruickshank, T. (2022). Investigating the role of age and maturation on the association between tennis experience and cognitive function in junior beginner to intermediate level tennis players. *International Journal of Sports Science & Coaching*, 174795412110558. *These authors contributed equally to this work.

Ishihara, T., Drollette, E.S., Ludyga, S., Hillman, C.H., & Kamijo, K. (2021). The effects of acute aerobic exercise on executive function: A systematic review and meta-analysis of individual participant data. *Neuroscience and Biobehavioral Reviews*, 128, 258-269.

Amano T, Asami T, Ichinose-Kuwahara T, Okushima D, Ueda H, Kondo N, Inoue Y. Influence of exercise intensity and regional differences in the sudomotor recruitment pattern in exercising prepubertal boys and young men. *Physiol Behav*. 2022 Jan 1;243:113642. doi: 10.1016

Zheng H, Badenhorst CE, Lei TH, Che Muhamed AM, Liao YH, Amano T, Fujii N, Nishiyasu T, Kondo N, Mündel T. Measurement error of self-paced exercise performance in athletic women is not affected by ovulatory status or ambient environment. *J Appl Physiol* (1985). 2021 Nov 1;131(5):1496-1504. doi: 10.1152

Fujii N, Kenny GP, Amano T, Honda Y, Kondo N, Nishiyasu T. Na⁺-K⁺-ATPase plays a major role in mediating cutaneous thermal hyperemia achieved by local skin heating to 39° C. *J Appl Physiol* (1985). 2021 Nov 1;131(5):1408-1416. doi: 10.1152

Goulding RP, Marwood S, Lei TH, Okushima D, Poole DC, Barstow TJ, Kondo N, Koga S. Dissociation between exercise intensity thresholds: mechanistic insights from supine exercise. *Am J Physiol Regul Integr Comp Physiol*. 2021 Nov 1;321(5):R712-R722. doi: 10.1152

Gerrett N, Amano T, Inoue Y, Kondo N. Eccrine sweat glands' maximum ion reabsorption rates during passive heating in older adults (50-84 years). *Eur J Appl Physiol*. 2021 Nov;121(11):3145-3159. doi: 10.1007

Fujimoto T, Fujii N, Dobashi K, Cao Y, Matsutake R, Takayanagi M, Kondo N, Nishiyasu T. Effects of low-intensity exercise on local skin and whole-body thermal sensation in hypothermic young males. *Physiol Behav*. 2021 Oct 15;240:113531. doi: 10.1016

Lei TH, Fujiwara M, Gerrett N, Amano T, Mündel T, Inoue Y, Okushima D, Nishiyasu T, Kondo N. The effect of seasonal acclimatization on whole body heat loss response during exercise in a hot humid environment with different air velocity. *J Appl Physiol* (1985). 2021 Aug 1;131(2):520-531. doi: 10.1152

Zheng H, Badenhorst CE, Lei TH, Liao YH, Che Muhamed AM, Fujii N, Kondo N, Mündel T. Menstrual phase and ambient temperature do not influence iron regulation in the acute exercise period. *Am J Physiol Regul Integr Comp Physiol*. 2021 Jun 1;320(6):R780-R790. doi: 10.1152

Goulding RP, Okushima D, Fukuoka Y, Marwood S, Kondo N, Poole DC, Barstow TJ, Koga S. Impact of supine versus upright exercise on muscle deoxygenation heterogeneity during ramp incremental cycling is site specific. *Eur J Appl Physiol*. 2021 May;121(5):1283-1296. doi: 10.1007

Fujii N, Kenny GP, McGarr GW, Amano T, Honda Y, Kondo N, Nishiyasu T. TRPV4 channel blockade does not modulate skin vasodilation and sweating during hyperthermia or cutaneous postocclusive reactive and thermal hyperemia. *Am J Physiol Regul Integr Comp Physiol*. 2021 Apr 1;320(4):R563-R573. doi: 10.1152

NCD Risk Factor Collaboration (NCD-RisC) (including Nakamura H) (2021). Worldwide trends in hypertension prevalence and progress in treatment and control from 1990 to 2019: a pooled analysis of 1201 population-representative studies with 104 million participants. *Lancet*, 398(10304):957-980. doi: 10.1016/S0140-6736(21)01330-1.

(9) Web of Science 未掲載論文

Ishiguro, C., Ishihara, T., & Morita, N. (2021). Extracurricular activity on music and visual art associates with children' academic achievement by transferring each subject score. PREPRINT available at Research Square, DOI: 10.21203/rs.3.rs-620557/v1

Ishihara, T. & Kyan, A. (2022). A narrative review of the relationship between early-life physical activity and later-life cognitive function. *Journal of Physical Fitness and Sports Medicine, in press*.

安里知陽 竹内真純 Kim Nahyun 片桐 恵子. 高齢者の社会参加における学習効果：活動団体の種類による比較. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究 紀要 15 (2) (印刷中)

福沢愛・田中嵐・原田和弘・増本康平 (2022) 相互作用場面での被受容感と相手との元々の親しさの関連—大学生・高齢者集団における検討—, 心理学研究, 印刷中.

山本健太・増本康平. (2022) ASD 者における感情調整に関する横断的研究—方略の使用頻度, 精神的健康, 認知機能に着目して—. 発達障害研究. 印刷中

太田幸志, 原田和弘. (2021). 運動への手段的および感情的態度と運動行動との関連：セルフ・エフィカシーおよび自己調整による媒介効果の検証. *理学療法学*, 48, 563-571.

Kibushi, B., Moritani, T., & Kouzaki, M. (2021). Modular control of muscle coordination patterns during various stride time and stride length combinations. *Gait & posture*, S0966-6362(21)00128-4. Advance online publication.

(10) 招待講演

木伏紅緒 (神戸大学) 「身体運動における筋協調」, 第 211 回 スポーツサイエンス研究会, 2021 年 10 月 5 日, 早稲田大学 (Zoom)

木伏紅緒 (神戸大学) 「ロコモーションにおけるモジュール式制御機構」, ヒューマンロコモーション拡張技術協議会, 2021 年 12 月 16 日, 産業技術総合研究所 (Zoom)

(11) 受賞

受賞者：原田和弘

受賞名：第 11 回 (2021 年度) 日本健康教育学会奨励賞

受賞理由：日本健康教育学会の 45 歳未満の学会員のうち, 健康教育・ヘルスプロモーション分野における研究または実践活動において価値ある業績を有する学会員と評価されたため。

受賞者：篠田大輔 ((株) シンク)、廣井 悠 (東京大学大学院)、長ヶ原 誠

受賞名：第 4 回日本オープンイノベーション大賞・スポーツ庁長官賞

受賞理由：「防災スポーツ」プロジェクトが、ロールモデルとなる先導的又は独創的な取組の中で、スポーツ分野における科学技術・学術の振興の視点から、特に顕著な取組が認められると評価された

ため。

(12) 行動系の総括と課題

新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言下においても、できる範囲での研究活動を教員各自が活発に行っており、本年度も研究資金獲得を伴う研究の進展とその成果は着実に挙げられている。国際共同研究も拡大しつつあり、来年度以降にその成果が表れてくるものと考えられる。今後は各研究分野における更なる研究の進展とともに、外部資金の獲得にも注力しつつ、国際的な共同研究をさらに推進したい。また、大学院生の研究活動について、一層の指導と活動支援を行うことが課題である。

●教育系

(1) 国際共同研究

本専攻研究者：山口悦司

研究代表：山口悦司

共同研究者（海外）：Clark Chinn (Rutgers University), Eowyn Winchester (Rutgers University)

共同研究者：望月俊男（専修大学）、大浦弘樹（東京理科大学）

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発（課題番号 20K20829）

研究資金：2020～2022 年度・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルに関する基礎研究を行っている。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表：Prof. Arve Gunnestad (Queen Maud University College, Trondheim, Norway)

共同研究者（海外）：Prof. Sissel Morreaunet (Queen Maud University College, Trondheim, Norway), Assos. Prof. Jolene Pearson (USA), Assos. Prof. Sharon Kaplan-Berkley (Israeli)

共同研究者：(本学教員) 北野幸子

研究課題：International Perspectives on Basic Values in Early Childhood Education

研究資金：海外

研究概要：日本の幼稚園教育要領にあたる各国の要領の比較研究。主に、教育理念等の中心的な価値 (Core Value)、育てたい子ども像等について比較を行った。同研究の成果は、2021 年ヨーロッパ乳幼児教育学会 (EECERA) のシンポジウムにて発表した。

本専攻研究者：稲原美苗

研究代表：May-Britt Öhman (Luleå University of Technology) スウェーデン

共同研究者（海外）：Dag Avango (Luleå University of Technology), Liz-Marie Nilsen (Luleå University of Technology), Curt Persson (Luleå University of Technology), Malin Olsson (Luleå University of Technology), Catharina Melander (Luleå University of Technology), Henrik Andersson, Eva Charlotta Helsdotter (Uppsala University), Irene Molina (Uppsala University), Mehek Muftee (Uppsala University), Nils Harnesk (Norrbotten Museum), Paulina Öquist Haugen (Norrbotten Museum), Sophie Nyblom (Piteå Museum), Ann-Catrin Blin (Laponiatjuottjudus / Laponiaförvaltningen), Kim TallBear (University of Alberta), Kyle Whyte (University of Michigan), Gunhild Hoogensen Gjörv (UiT, Norwegian Arctic University)

共同研究者：(本学教員) 稲原美苗

研究課題：Pandemic in the (sub) Arctic North: A supra- and crossdisciplinary data collection on experiences, resilience and social mobilisation during the Covid19 pandemic focusing on Norrbotten county. (from October 2020 to April 2022.)

研究資金：Funder: FORMAS Registration no: 2020-02706. Grant amount: 3,089M SEK.

研究概要：本研究の主な目的は、コロナ禍での北欧の先住民族や一人一人の経験の語りや生きづら

さについてのデータを集め、社会的な動きを捉え、多様性を考えるような政策提言を試みることにあ
る。学際的な考察に基づき、北欧の先住民サーミ族の人々のトナカイの飼育などの生活様式、介護施
設での先住民の認知症ケアに特に焦点を合わせ、マイノリティとパンデミックの関係性を考察する。
データ収集は、パンデミックが進行中の状況である間に、インターネットでのアンケート調査、画像・
映像収集、エスノグラフィー、インタビュー調査、哲学対話などから実施している。

本専攻研究者：北野幸子(共同研究者)

研究代表者：榊原洋一 (CRN 所長、お茶の水女子大学名誉教授)

共同研究者(海外) ; Prof. Aminah binti Ayob (Sultan Idris Education University, Malaysia), Dr.
Christine Chen (Association for Early Childhood Educators, Singapore), Prof. Sasilak Khayankij
(Chulalongkorn University, Thailand), Dr. Poh Tin Tan (Tan Specialist Child and Family Clinic,
Malaysia), Dean Dr. Sofia Hartati (State University of Jakarta, Indonesia), Fasli Jalal
(Professor, State University of Jakarta, Indonesia), Dr. Thelma Rabago Mingoa (De La Salle
University, Philippine), Dr. Lee-Fong Wong (National Taipei University of Education, Taiwan),
Dr. Felix Hung (National Taipei University of Education, Taiwan) Mazlina Che Mustafa (Sultan
Idris Education University, Malaysia), Dr. Sirithida Chinsangthip (Chulalongkorn University,
Thailand), Dr. Anita Chu (National Taipei University of Education, Taiwan), Sri Indah
Pujiastuti (State University of Jakarta, Indonesia), Dr. Jiaxiong Zhu (East China Normal
University, China), Dr. Nianli Zhou (East China Normal University, China)

共同研究者(国内)：星三和子(十文字女子大学)、佐藤朝美(愛知淑徳大学)、深見俊崇(島根大学)

研究課題: Exploring Factors Nourishing Happy and Resilient Children among Asian Countries

研究資金: Child Research Net Asia、ベネッセ教育研究所研究資金

研究概要: 子どもの安心、安全に係る資質の中で近年注目されている。本研究では、コロナ禍がどの
ような影響を与えているのか、またどのような環境が子どものレジリエンスやウェルビーイングの向
上につながっているのかについて、5歳児、7歳児の子どもを対象に8か国で調査し、比較検討した。

本専攻研究者：津田英二、稲原美苗・清野未恵子・赤木和重・岡崎香奈・大田美佐子・松岡広路

研究代表：津田英二

共同研究者(海外)：J. W. Kim, J. H. WOO

共同研究者(本学教員)：稲原美苗・清野未恵子・赤木和重・岡崎香奈・大田美佐子・松岡広路

研究課題: 障害者の文化芸術活動の実践分析に基づくエンパワメント評価及び支援システム開発研究
研究資金: 科学研究費補助金・基盤(B)

研究概要: 障害者の文化芸術活動を対象として、1) それらがどのような効果をもたらすものである
のか、2) その効果を把握する現実的な評価方法はいかなるものであるべきか、3) 多様に展開されてい
る障害者の文化芸術活動を社会や行政はいかに支援しえるか、という3点を明らかにする共同研究で
あり、韓国ナザレ大学及び劇団ラハプとの共催でオンラインシンポジウムを行っている。

(2) 国内共同研究等

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：望月俊男(専修大学)

研究課題: 一見矛盾する事実から真実を導き出す能力を育む協調学習環境の開発と実践的評価(課題
番号: 20H01729)

研究資金: 2020~2022年度・基盤研究(B)(一般)

研究概要: 一見矛盾する事実から真実を導き出す能力を育む協調学習環境の開発に取り組んでいる。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：山下晃一(神戸大学)

研究課題: 分権型教員人事の存立要件に関する日・米・英比較研究: 教員集団への影響に着目して

研究資金: 科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要: 本研究は、公立小学校を主たる対象に絞りながら、各々異なる分権化の度合い・質を持つ
米国・英国・日本の現状を比較調査し、分権型の教員人事が教員集団へ与える影響に着目した上で、

その存立要件の解明を目的とするものである。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：浜田博文（筑波大学）

研究課題：校長のリーダーシップ発揮を促進する制度的・組織的条件の解明と日本の改革デザイン

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(A)

研究概要：本研究は、校長のリーダーシップ発揮の促進要因を、校長職をとりまく制度的・組織的条件に焦点づけて実証的に解明し、とりわけ制度的・組織的条件の解明と整備＝システムアプローチの観点から日本における改革デザインを提示することを目的とする。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：元兼正浩（九州大学）

研究課題：学校経営コンサルティング型組織開発—リアリティを追究する教育実践研究の再構築

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：本研究は、学校経営コンサルテーション（対話型プロセスを重視した組織開発）とその実証を通じて、教職員自身の自己治癒力と研究者のコンサルテーション力を目指し、内発的な学校改革を支援する教育経営学研究の新たな可能性を提示する。

本専攻研究者：渡邊隆信

研究代表者：宮本健市郎（関西学院大学）

研究課題：新教育運動期における自然保護運動の昂揚と環境教育の起源に関する比較史的 研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究の目的は、新教育を主張した人物の思想、または新教育を実施した学校 において、自然保護のための教育がどのような形で構想され、実施されたのかを確認し、それが人間中心（子ども中心）の教育を超える視点があったかどうかを考察する。

本専攻研究者：吉永潤

研究代表者：吉永潤（神戸大学）

研究課題：社会参加の主体性と協働的問題解決能力を育成する未来創出型社会科授業の開発

研究資金：基盤研究(C)（一般）（課題番号 18K02664）

研究概要：社会状況の変化を踏まえたゲーム開発や改良，社会実装可能性検証を行い，成果を発表した。

本専攻研究者：川地亜弥子，赤木和重，勅使河原君江

研究代表者：川地亜弥子（神戸大学）

研究課題：日英における「意味深さの評価」の理論と実践に関する研究

研究資金：基盤研究(C)（一般）（課題番号 17K04549）

研究概要：日英の理論調査をもとに，意味深さの評価の理論と実践について検討した。勅使河原准教授が学術 Weeks を企画した。最終報告書を刊行した。

本専攻研究者：川地亜弥子，赤木和重，勅使河原君江，中谷奈津子

研究代表者：川地亜弥子（神戸大学）

研究課題：英国の初等教育におけるオーラシー育成：教育目標・評価，指導の実際，環境デザイン

研究資金：基盤研究(C)（一般）（課題番号 20K02516）

研究概要：英国初等教育におけるオーラシー（話す・聞くことによって育つ力）の教育について，文献収集・分析を行った。

本専攻研究者：川地亜弥子

研究代表者：植田健男（花園大学）

研究課題：「学習指導要領体制」の構造的変容に関する総合的研究

研究資金：基盤研究(A)（一般）（課題番号 20H00103）

研究概要：戦後初期の学習指導要領（1947，1951 年版）の意義と内容について，その到達点を現代的観点から分析した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子

研究課題：位置測位システムを活用した幼児理解の深化と根拠に基づくカリキュラム・マネジメントによる実践の充実方法に関する調査研究

研究資金：文部科学省令和3年度幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究

研究概要：位置測位システムを活用し，保育実践の指導方法の充実を図る方法について，特にカリキュラム・マネジメントの観点から，探求した。幼児理解の深化，実践の検証，休園判断等に有効な活用方法を開発した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子

研究課題：保育の ICT 環境に関する実態調査と保育者支援システム創りに関する研究

研究資金：令和3年度大学発アーバンイノベーション神戸研究助成

研究概要：神戸市内の全ての園種公私を含むすべての保育施設における ICT 環境の実態調査を行った。また各区拠点園へのポータブル・Wi-Fi と端末を貸出，地域の保育者の連携協働システムを開発した。保育者支援について資料提供，研修開発等を行った。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子

研究課題：乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究

研究資金：神戸市こども家庭局事業費

研究概要：神戸市事業として乳幼児保育研究部会を立ち上げ，遠隔公開保育の方法の開発，実践事例の可視化と発信方法の開発等，保育の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性についての検討を行った。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：三村真弓（広島大学）

研究課題：音楽科固有の資質・能力の基礎となる音楽的感覚及び音楽能力育成カリキュラムと指導法

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：音楽的感覚及び音楽能力育成カリキュラムと指導法について開発した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：埋橋玲子（同志社女子大学）

研究課題：「音と声」に注目した保育者研修プログラム－ECERS 及び音環境調査に基づいて

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：ECERS 及び音環境調査による保育者研修プログラムを開発した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：寺見陽子（神戸松蔭女子学院大学）

研究課題：家庭養育と乳児保育の質の向上を促す家庭と乳児保育の連携プログラムの開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：0-3 歳児を中心とした家庭と園の連携に関するプログラムの国内外の実態調査を行った。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：藤掛絢子（ノートルダム清心女子大学）

研究課題：実習との往還を図った音楽表現領域における保育者養成教育プログラムと評価の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：保育領域「表現」の特に音楽表現に関して，学内の講義・演習と園での実習との往還的養

成教育のプログラム開発とその評価方法の開発を行った。

本専攻研究者：木下孝司

研究代表者：木下孝司

研究課題：文化伝達に着眼した幼児期の「集団の育ち」に関する評価

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：幼児期の保育において、「集団の育ち」と言われるものを、文化進化論的観点から文化伝達に着眼して検討して、保育者の集団づくりを分析する研究。

本専攻研究者：勅使河原君江

研究代表者：勅使河原君江

研究課題：戦後関西における子どもと教師の学びの循環 - 西田秀雄による絵日記指導を中心に -

研究資金：基盤研究(C) (一般)

研究概要：1950年代に京都市立小学校教諭・西田秀雄の絵日記指導によって作成された絵日記の資料収集とその分析を行い、絵日記指導を通じた教師と子どもとの交流から生まれた学びの創生の分析に取り組んだ。

本専攻研究者：勅使河原君江

研究代表者：ロニー・アレキサンダー (神戸大学)

研究課題：被災者が表現活動を通して具現化する「安心」～寄り添い支援の実証的研究と理論の展開～

研究資金：萌芽的研究(萌芽) 研究概要：災害後に行われる社会モデルとしての「寄り添い支援」に着目し、「表現型寄り添い支援」活動中に被災者がアート等を通して表現する「安心」を分析し、支援活動の意義や方法論を明確にした。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表者：中谷奈津子

共同研究者：木曾陽子、鶴宏史、吉田直哉、関川芳孝

研究課題：保育所等における生活困難家庭に対する組織的支援と実践理論の構築

研究資金：令和3(2021)年度 基盤研究(B)

研究概要：保育所等における生活課題の早期発見後の介入方法、組織内での合意形成や意思決定プロセスに関する組織体制の質的把握、不十分な家庭養育に対する補完・補償の方法の提示、イギリスにおける研修システムと支援体制の把握を行う。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表者：亀崎美沙子

共同研究者：鶴宏史、中谷奈津子

研究課題：保育における倫理的意思決定モデルに関する基礎研究

研究資金：令和3(2021)年度 基盤研究(C)

研究概要：本研究では、保育における国内外の倫理的ジレンマの収集・分析を通して、保育における倫理的意思決定モデルを構築することを目的とする。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表者：川地亜弥子

共同研究者：勅使河原君江、赤木和重、中谷奈津子

研究課題：英国の初等教育におけるオーラシー育成：教育目標・評価、指導の実際、環境デザイン

研究資金：令和3(2021)年度 基盤研究(C)

研究概要：学習の深さの評価と子どものケアをつなぐ鍵概念がオーラシーである。英国の初等教育の場におけるオーラシー育成に関する目標と評価、教育実践、環境、評価について、文献調査、英国での観察、聴取調査を通じて、明らかにする。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：目黒強

研究課題：「近代日本における通俗教育にみる課外読み物の選書に関する基盤的研究」

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C) (課題番号：21K00282)

研究概要：公共図書館・国語科教育・児童文学に着目し、近代日本における通俗教育行政における課外読み物の統制の諸相を明らかにするとともに、課外読み物に関する目録などのデータベース化を通して課外読み物の研究基盤を整備する。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：土居安子（一般財団法人大阪国際児童文学振興財団）

研究課題：明治・大正期における児童文学・児童文化史の研究—巖谷小波未発表資料の検討を通して

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C) (課題番号：20K00335)

研究概要：巖谷小波が明治・大正期の児童文学・児童文化の分野で果たした役割について、小波の未発表資料を中心に明らかにするとともに、未発表資料のデータベース化を通して小波研究の研究基盤を整備する。

本専攻研究者：松岡広路、清野未恵子

研究代表者：田中治彦（上智大学）

研究課題：SDGs と社会教育・生涯学習

研究資金：日本社会教育学会

研究概要：学会のプロジェクト研究として実施されている。SDGs と ESD および社会教育の関係を多角的に検討するプロジェクトである。来年度研究成果を出版予定である。

本専攻研究者：松岡広路

研究代表者：原田正樹（日本福祉大学）

研究課題：多文化共生とボランティア

研究資金：日本福祉教育・ボランティア学習学会

研究概要：学会の課題研究として実施されている。多文化共生・ボランティアと福祉教育・ボランティア学習との関係を多角的に検討するプロジェクトである。

本専攻研究者：松岡広路（研究主任）、清野未恵子（研究主任），津田英二，稲原美苗，喜屋武享

共同研究者：太田和宏，井口克郎，小林洋二（日本福祉大学），ESD 推進ネットひょうご神戸（国連大学 RCE）

研究課題：ESD プラットフォーム創成の方法と課題

研究資金：ESD プラットフォーム WILL 基金・神戸大学基金等

研究概要：SDGs/ESD を促進する「当事者性の交差」の具体的な場を研究開発し、その有効性を評価することを目的とする。マルチステークホルダーの多様な観点および多様な指標の観点で、具体的な教育装置の効果を検討し、ESD に資するプラットフォーム学習論のモデル化を図るものである。毎年 ESD 実践研究集会を実施し、論文集『ESD 実践研究』を発行している。

本専攻研究者：稲原美苗，松岡廣路，津田英二

研究代表者：稲原美苗

研究課題：哲学プラクティスと当事者研究の融合：マイノリティ当事者のための対話と支援の考察

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B) 2019-04-01 - 2024-03-31

研究概要：本研究の申請者たちは、ジェンダー、セクシュアリティ、エスニシティ、貧困、障害、疾病、加齢、災害などが理由で、社会的属性が少数派に位置する者の立場やその集団（マイノリティ）を主題にした学際的研究や対話実践を続けてきた。マイノリティ当事者にとって「生きづらさ」を自分で「考える・語る・表現する」ことが重大な意義を持つという認識をし、「対話」を共通テーマとする実践の研究構想に至った。本研究は、哲学・倫理学、当事者研究、ジェンダー学、社会教育学、環境リスク学などの領域の知見をも取り入れ、対話実践を支援に繋げることを目的とする。各分野の知見を総合し、その成果を教育・医療・福祉の現場にフィードバックする。

本専攻研究者： 稲原美苗

研究代表者： 村山留美子

研究課題：COVID-19 流行は市民のリスク観をどのように変えるのか？：合意形成の観点から

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B) 2021-04-01 - 2024-03-31

研究概要：本研究の目的は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）について、そのリスクに対する市民の認知とその構造を明らかにするとともに、その世界的流行が、日本社会全体の「リスク観」に与えた影響を明らかにすることである。社会調査手法を用い、COVID-19に対する市民のリスク意識等について検討するとともに、これまで継続して観察を行ってきた市民の各種事象のリスク認知や対応行動について、感染症流行に伴う構造の変動を探索し、その変動を明らかにする。以上より、市民のリスクに対する意識についての新たな知見と感染症流行の影響を明らかにし、合意形成の現場に必要な新たなコミュニケーションに資する知見の集積を行う。

本専攻研究者： 喜屋武享, 石原暢

研究代表者： 喜屋武享

研究課題：子どもの well-being を規定する要因の特定：生活行動・心理社会的環境を指標とした多層的検討

研究資金： 研究推進支援経費

研究概要：世界と比して日本の子どもは、死亡率や肥満を指標とする身体的健康が良好である一方、生活満足度と自殺率を指標とする精神的幸福度は最下位と well-being のパラドックスが生じている。世界規模の課題とされる青少年のメンタルヘルスの問題は、日本ではより深刻で急務の課題である。本研究の目的は子どもの well-being に影響を与える要因について“個人の生活行動”“社会関係”“心理社会的環境”“家庭の社会経済状況”等、多層的の観点から特定することとした。研究方法として、小中学生 6,500 名規模の既存ビッグデータをもとに well-being と関連のある要因を多層的に検討した（継続中）。

(3) 産学官共同研究等

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：ICT を活用したドキュメンテーションツールの開発～「おうちえん」についての機能強化、新展開に関わる共同研究～

研究資金：産学官共同研究（神戸大学・㈱神戸大学イノベーション・㈱スマートエデュケーション）

研究概要：産学官連携による園と家庭との連携ツールを開発した。附属幼稚園における「おうちえん」の実証研究を踏まえ、ドキュメンテーションツールを開発した。

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：0 歳児から 6 歳児までの保育・教育を考えるー非認知的能力はどのようにして育まれるのかー

研究資金：令和 2 年度大阪府私立幼稚園連盟共同研究 寄付金

研究概要：0 歳児から 6 歳児までの非認知的能力の育成方法についての実践開発を行った。本研究の成果については、広く配布するためのリーフレットを作成した。

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の視点から子どもの育ちをとらえる

研究資金：令和 3 年度福井県私立幼稚園・認定こども園協会共同研究 寄付金

研究概要：幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿に基づく、教育実践開発を行った。

本専攻研究者： 赤木和重、大田美佐子、岡崎香奈、川地亜弥子、清野未恵子、稲原美苗

研究代表者： 津田英二

研究課題：地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築

研究資金：文部科学省受託「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」

研究概要：知的障害者に大学教育を開くことをめぐる理論的・実践的課題を明らかにし、大学教育プログラムを開発・実施する実践的なモデル開発研究、及び兵庫県内の障害者の生涯学習機会創出の

モデル開発を行なう研究である。

(4) 国際会議発表論文 (Web of Science 収録国際会議論文)

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Yamamoto, T., & Wakabayashi, K. (2021). An intervention study on students' decision-making towards consensus building on socio-scientific issues. *International Journal of Science Education*, 43 (12), 1965-1983. <https://doi.org/10.1080/09500693.2021.1947541>

Kyan, A., Takakura, M. (in press). Socioeconomic inequalities in physical activity among Japanese adults during the COVID-19 pandemic *Public Health*. *Public Health*. doi: 10.1016/j.puhe.2022.03.006 査読あり

(5) 著書

(単著)

北野幸子『地域発・実践現場から考えるこれからの保育一質の維持・向上を目指して』わかば社、2021年12月

喜屋武享 (2021) 文武両道は成り立つ③アクティブ・レッスン・プログラムのすすめ, 大修館書店 (保体オンライン)

URL: <https://www.taishukan.co.jp/hotai/media/blog/?act=detail&id=288>

喜屋武享 (2021) 文武両道は成り立つ②アクティブ・レッスン・プログラムの例, 大修館書店 (保体オンライン)

URL: <https://www.taishukan.co.jp/hotai/media/blog/?act=detail&id=287>

喜屋武享 (2021) 文武両道は成り立つ①体力向上は学力向上に寄与する!?, 大修館書店 (保体オンライン)

URL: <https://www.taishukan.co.jp/hotai/media/blog/?act=detail&id=282>

(編著)

松崎正治・藤原顕・目黒強 (編著)『対話を通してことばを深く学ぶ主体の形成—神戸大学附属住吉小学校・中学校の国語科総合単元学習の軌跡』溪水社, 2021年5月

(分担執筆)

奈良教育大学附属小学校, 川地亜弥子 (2021)『みんなのねがいで作る学校』クリエイツかもがわ (担当:「ねがいを育て, 深め, みんなでみんなの社会をつくる」 pp.197-208)。

勝村謙司, 川地亜弥子『続・こころの作文:綴り, 読み合い, 人として生きていくことを励まし合う』かもがわ出版 (担当:「学校で学ぶことと生活綴方・作文教育」 pp.169-176)。

鈴木慎一, McCulloch, G., 顧明遠, Rao, P. V., Hong, J. Y. (2021) *The Routledge encyclopedia of modern Asian educators: 1850-2000*. Singapore: Routledge (川地亜弥子担当: 'Mineji, Mitsushige', pp.139-140, 'Sasaoka, Tadayoshi', pp.160-161)。

田中耕治 (2021)『よくわかる教育評価 第3版』ミネルヴァ書房 (川地亜弥子担当:「生活科における評価」 pp.138-139,「道徳における評価」 pp.152-153,「特別活動における評価」 pp.154-155,「障害児教育における評価」 pp.156-157)。

西岡加名恵, 石井英真 (2021)『教育評価重要用語事典』明治図書出版 (川地亜弥子担当:「通知表」 p.23,「特別活動における評価」 p.203)。

西岡加名恵, 石井英真, 田中耕治 (2022) 『新しい教育評価入門 増補版』有斐閣 (川地亜弥子担当: 「日本における教育評価の歴史」 pp. 243-269)。

西岡加名恵, 藤本和久, 石井英真, 田中耕治監訳 (2021) 『カリキュラム研究事典』ミネルヴァ書房 (川地亜弥子翻訳担当: 「エスニシティ研究」 pp. 48-50, 「エスノグラフィ研究」 pp. 50-53, 『教育の機会均等』 p. 235, 「経験されたカリキュラム」 p. 292, 「経験主義」 pp. 292-294, 「公正性」 pp. 338-339, 「排除/周縁化された声」 pp. 606-607, 「優生学」 pp. 730-731, 「幼児期のカリキュラム」 pp. 731-734, 「幼児期のカリキュラムの歴史」 pp. 734-735, 「倫理文化学校」 pp. 759-760)。津田英二「排除されてきた人々をめぐる生涯学習支援」小林繁・松田泰幸・「月刊社会教育」編集委員会編『障害をもつ人の生涯学習支援』旬報社、2021年7月、pp. 255-264

津田英二「特別な配慮を要する人々の学習」小池茂子・本庄陽子・大木真徳編著『生涯学習支援の基礎』学文社、2022年2月、pp. 159-172

(6) 論文

山下晃一(2021)「教育学の方法論から教育法学の基礎概念へ—宗像誠也の貢献—」『季刊教育法』第211号, pp. 58-62, 査読なし。

山下晃一, 黒田友紀, 高橋望, 鄭修娟, 高野貴大(2021)「『教師であること』を支える制度的基盤の多国間比較へ向けて—カナダ・ニュージーランド・韓国・米国—」『教育制度学研究 (日本教育制度学会)』第28号, pp. 245-251, 査読なし。

山下晃一(2021)「教育行政学の魅力と未来—教育学における位置と意義に注目して—」『日本教育行政学会年報』第47号, pp. 220-223, 査読なし。

渡邊隆信 (2021)「コロナ禍での学校教育活動—2020年度神戸大学附属小学校の記録—」日本ペスタロッチャー・フレール学会編『人間教育の探究』第33号, 2021年, pp. 33-45, 査読あり。

川地亜弥子 (2021)「生活綴方・作文教育における作品批評と到達度評価: 京都綴方の会を中心に」『教育目標・評価学会紀要』第31号, pp. 19-26, 査読なし。

川地亜弥子 (2021)「現代の学校教育をめぐる政策・提言と教材論」『障害者問題研究』第49巻第3号, pp. 2-9, 査読なし。

川地亜弥子 (2021)「学校で学ぶことと生活綴方」『作文と教育』第888号, pp. 6-10, 査読なし。

川地亜弥子 (2021)「児童生徒の学習評価における『学びに向かう力, 人間性等』の評価に関する覚書」『教科外活動と到達度評価』22号, pp. 70-71, 査読なし。

川地亜弥子 (2021)「特別支援教育の動向と課題」『教育』910号, pp. 69-76, 査読なし。

川地亜弥子 (2021)「日本近代教育の申し子としての随意選題思想を問う」『図書新聞』3482号, p. 5, 査読なし。

川地亜弥子 (2022)「楽しい節目をつくりだす」『みんなのねがい』674号, pp. 28-31, 査読なし。

川地亜弥子 (2022)「青年期を謳歌する」『みんなのねがい』673号, pp. 30-33, 査読なし。

川地亜弥子 (2022)「学校のねうち」『みんなのねがい』671号, pp. 28-31, 査読なし。

川地亜弥子 (2021)「恋うる心を授業にする」『みんなのねがい』670号, pp. 28-31, 査読なし。

川地亜弥子 (2021) 「やってみる, なってみる」『みんなのねがい』669号, pp. 28-31, 査読なし。

川地亜弥子 (2021) 「一人ひとりが輝くみんなで学ぶ授業をつくる」『みんなのねがい』668号, pp. 28-31, 査読なし。

川地亜弥子 (2021) 「子育て・療育・発達相談」『みんなのねがい』667号, pp. 28-31, 査読なし。

川地亜弥子 (2021) 「実践報告・記録のねうち」『みんなのねがい』666号, pp. 28-31, 査読なし。

川地亜弥子 (2021) 「ゆたかな人間関係と偏食指導」『みんなのねがい』665号, pp. 28-31, 査読なし。

川地亜弥子 (2021) 「要求を育てる」『みんなのねがい』664号, pp. 28-31, 査読なし。

川地亜弥子 (2021) 「一人ひとりの姿, 思いを深く想像して」『みんなのねがい』663号, pp. 28-31, 査読なし。

川地亜弥子 (2021) 「『むっちゃ楽しい』クラスの中で」『みんなのねがい』662号, pp. 28-31, 査読なし。

川地亜弥子 (in press) 「『日本における教育的進歩主義, 文化的邂逅と改革』(2017) 序章・1章・2章の日本語への仮翻訳にあたって」『教育科学論集』第23号。
ミシェル・ヴァンデンブロック, 北野幸子 (2021) 「園と保護者との連携における互惠性を考えるーベルギーのフランダースにおける家庭との連携事例を中心にー」『チャイルド・サイエンス』Vol. 22, pp. 9-14 (査読あり)

北野幸子 「オンライン化時代におけるICTを活用した家庭と園の連携・協働」『教育と医学』2021年7月, pp. 332-339 (査読なし)

木下孝司 (2022) 「教える目的に応じた幼児の教示行為の調整について」『神戸大学人間発達環境学研究科紀要』, 第15巻, 第2号, 2022年3月 (印刷中) (査読なし)

アレキサンダー・ロニー, 桂木聡子, 勅使河原君江 (2022) 「被災者の多様で個別的な安心についてお絵描きを通して思索する活動」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』15(2). 2022年3月, pp. 53-65, (査読付き)

中谷奈津子・木曾陽子・吉田直哉・鶴宏史・関川芳孝 (2022) 「子ども家庭支援に関する保育者間の情報共有とその戦略」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第15巻, 第2号. (印刷中)

中谷奈津子・木曾陽子・吉田直哉・鶴宏史・関川芳孝 (2022) 「子ども家庭支援における園内の情報共有ー様々な気づきが事務室に集約される園に着目してー」『学校教育センター紀要』第7号. (印刷中)

目黒強 (2021) 「日常感覚を異化する絵本ー安野光雅とヨシタケシンスケ」『ユリイカ 総特集 安野光雅』第53巻, 第7号, pp. 361-367. (査読なし)

目黒強 (2022) 「巖谷小波の児童文化施設構想」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第35号 (印刷中) (査読なし)

稲原美苗, 中川雅道, 津田英二, (2021) 「大学院生のための学際的探究コミュニティの創成と対話実践」『思考と対話』3巻, pp. 41-7 (査読付き)

Yogi, Y., Kyan, A. (2021). Psychological changes in anxiety, enjoyment, and value of learning in junior high school students learning judo. *Journal of Physical Education and Sport*. 21(4). pp. 1676-1681 (査読あり)

喜屋武ゆりか, 喜屋武享, 我那覇ゆり子, 新城澄枝. (2021). 栄養教諭養成における食物アレルギーに関する教育の実態. *学校保健研究* 63 (3). pp. 139-148 (査読あり)

Ishihara, T., Kyan, A. (in press). A narrative review of the relationship between early-life physical activity and later-life cognitive function. *The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine*. (査読あり)

(7) 国際会議発表

Oura, H., Mochizuki, T., Chinn, A., Winchester, E., & Yamaguchi, E. (in press). Detecting cherry-picked evidence in texts: Challenges for undergraduate students. *Proceedings of International Society of Learning Sciences Annual Meeting 2022*.

Kawaji, A. (in press). Daily Life Writing in Japan: Creating alternative textbooks and culture. *Proceedings of 45th World Education Fellowship International Conference (WEF 100th Anniversary Meeting)*.

INAHARA, Minae (2021) “Phenomenological Expressions of Pain: A Sense of Movement and Onomatopoeic Expressions in Japanese”, *TWO CULTURES: TWO SENSES: How the arts and humanities can contribute to Healthcare Education and facilitate improved intercultural understanding in Japan and the UK: SEMINAR AND WORKSHOP II – A SENSE OF MOVEMENT* (オンライン開催: 2021年4月24日, 招待あり)

Kyan, A., Takakura, M., Miyagi, M., Kobayashi, M. (2021). Adherence to 24-hour movement guidelines among Japanese elementary and junior high school students. *European Journal of Public Health*. 31(Supplement 3). pp. iii487

Takakura, M., Kyan, A., Miyagi, M., Kobayashi, M. (2021). Trends in current alcohol use among Japanese adolescents by sociodemographic groups. *European Journal of Public Health*. 31(Supplement 3). pp. iii480

Matsuoka, K, (2021) To the Sustainable Future ~ESD Projects in Kobe Univ. For Building the Platform of the 3 Educational Phases~, *The 11th Kobe University Brussels European Centre Symposium (Online)*

(8) 国際シンポジウムの企画・運営

Ayako Kawaji & Junko Grant Hotsuki: English and Japanese education, childcare and family support with Pandemic in 2021, 2021.7.12.

Ayako Kawaji & Natsuko Nakatani: Family and parental support in England: Focusing on the Meadows Children and Family Wing, 2022.3.21.

津田英二、International Art Festival & Academic Symposium「障害のある芸術家の活動と生活」(オンライン) 2021年12月18日 (劇団ラハプ/社団法人ラハプとの共催)

清野未恵子、The 11th Kobe University Brussels European Centre Symposium (Online)、2021年9月17日 (オンライン)

(9)受賞

受賞者：我部杏奈，高倉実，宮城政也，喜屋武享

受賞名：日本学校保健学会 学会賞

受賞題目：小学生の永久歯齲蝕（うしょく）と社会経済因子および学校給食後の歯みがき時間設定状況との関連

受賞年月：2021年11月

受賞者：神谷義人，喜屋武享，金城昇，仲宗根正，高倉実

受賞名：第29回日本健康教育学会学術大会 優秀演題賞

受賞題目：育児中の女性における中学3年時の家庭の経済状況と現在の自尊感情との関連

受賞年月：2021年9月

(10)教育系の総括と課題

総じて、各教員は、各自、学問のグローバル化を視野に置きながら、研究およびそれにつながる実践や取り組みを進めてきたといえよう。国際的な研究ネットワーク形成およびそこでのプレゼンスを高める研究発表が徐々に増えている。また、国内においても、各領域において有為な研究成果を着実に挙げている。

しかし、「教育」の枠組みの広さとその協働的な推進が求められる現場をより意識し、学校教育、社会教育、幼児教育などの分断された研究・実践領域を接続させるような研究・実践の展開が期待される。包括的な教育学の構築に向けてのグローバルなプレゼンスを高める研究ユニットづくりをめざしたいものである。

(人間発達専攻長 稲垣成哲)

7.7.2. 人間環境学専攻

人間環境学専攻は、法学、経済学、社会学、理学、工学、農学、生活科学等の領域の研究者の学際的な協働のもとで、「人間の発達を支える環境」に係る諸事象について、「人間の発達を促進し、支援する環境要因の解明」という視点から、総合的な教育研究を実践してきた。この専攻に含まれる「人間環境学講座環境基礎科学系教育研究分野」は、人間を取り巻く自然環境や多様化・高度化した情報環境が人間発達に及ぼす要因を解明すると同時に、それに基づく高度な科学技術の開発を目指している。また、「人間環境学講座環境形成科学系教育研究分野」は、技術進歩と制度発展により多様化・複雑化した人間を取り巻く生活環境と、グローバル化の進行による社会環境の変化が人間発達に及ぼす要因を解明すると同時に、それらが引き起こす問題状況の克服の方向性を探究する教育研究分野である。

本専攻では、多分野の教員が自身のテーマを発展させ、多彩な研究プロジェクトに従事することで、人間環境学と研究ネットワークの発展に貢献してきた。人間環境学に関する多様なプロジェクトを国内外で共同実施し、統括する役割をはたしている。また、それらの業績を論文や著書としてまとめ、報告している。

研究公表の内訳と数は、(1)研究プロジェクト（代表者で、研究費総額200万円以上）計35件、(2)国際共同研究 計12件、(3)教員の受賞 計7件、(4)国際共著論文 計20報、(5)著書 計16報（編著1報、共著14報、共訳著1報）、(6)WoS論文 計62報、(7)その他論文 計39報である。

以下に、本専攻研究者が展開する研究の概要と成果内容を紹介する。

(1) 研究プロジェクト（専攻研究者が代表者で、研究費総額 200 万円以上）

<自然環境論>

研究代表者（本専攻教員）：青木茂樹

共同分担者：中野敏行（名古屋大学）、連携研究者：高橋覚（本専攻教員）

研究課題：気球搭載型エマルジョン望遠鏡による宇宙ガンマ線未解決課題の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤（S），2017-2021 年度，総額（直接経費）15,390 万円

研究概要：気球搭載型のエマルジョン望遠鏡を開発し、天体などからのガンマ線観測を行う。

研究代表者（本専攻教員）：蘆田弘樹

共同研究者：蓮沼誠久（神戸大学）

研究課題：電気エネルギーを利用し大気 CO₂ を固定するバイオプロセスの研究開発 CO₂ 取込み・濃縮機構の付与

研究資金：NEDO ムーンショット型研究開発事業／地球環境再生に向けた持続可能な資源循環を実現、2020-2022 年度，総額（直接経費）4,282 万円

研究概要：微生物への CO₂ 取込み・濃縮機構を導入し、CO₂ 資源化のためのホスト生物を創製する。

研究代表者（本専攻教員）：蘆田弘樹

研究課題：光合成 CO₂ 固定代謝の進化的分子基盤の解析

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽），2019-2021 年度，総額（直接経費）500 万円

研究概要：光合成生物の進化過程で CO₂ 固定代謝経路がどのように確立された分子機構を解析する。

研究代表者（本専攻教員）：丑丸敦史

共同研究者：石井博（富山大学）、岡本朋子（岐阜大学）

研究課題：複雑な花形態が適応的になる生態学的条件の解明：種間比較・群集間比較を通じた検討

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2019-2022 年度，総額（直接経費）1,703 万円

研究概要：複雑な形態を持つ花の進化を説明する新たな仮説の検証を行う。

研究代表者（本専攻教員）：丑丸敦史

共同研究者：源利文（本専攻教員）、佐藤真行（本専攻教員）、石井弘明（本学農学研究科）研究課題：里地里山の生物多様性向上に向けた整備及び生態系サービスの評価に係る調査研究

研究資金：神戸市・受託研究，2021 年度，総額（直接経費）298 万円

研究概要：神戸市の放棄された里地里山の管理導入による生物多様性再生の検証および市民への波及効果について調査を行う。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

研究課題：トポロジカルクロマチンマッピングによる染色体高次構造の解明

研究資金：2020 年度三菱財団自然科学研究 助成，2020-2021 年度，総額（直接経費）412 万円

研究概要：物理学的アプローチであるトポロジカルクロマチンマッピングを発展させ、生物学の重要

命題である染色体軸，クロマチン繊維，タンパク質，DNA の担体である染色体の高次構造と機能について明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Stefan Wanke（Technische Universität Dresden）

研究課題：Characterization of two complementary Hydrangea collections

アジサイの相互補完的遺伝資源植物コレクションの構築

研究資金：二国間交流事業共同研究，2020-2021 年度，総額（直接経費）399 万円

研究概要：ドイツのザクセン州立植物園ならびに神戸市森林植物園に自生するアジサイ植物材料を用いて，アジサイ 100 種について植物材料の選抜と特性評価，評価法の統一化，染色体標本解析，倍数性，ゲノム解析を実施する。

研究代表者（本専攻教員）：小谷野由紀

研究課題：流速場と拡散ダイナミクスの相乗的な効果による拡散促進現象

研究資金：科学研究費補助金・若手研究，2020-2023 年度，総額（直接経費）320 万円

研究概要：攪拌における移流と拡散の協働現象に関して，一般的な定式化を試みた。

研究代表者（本専攻教員）：窪田薫

共同分担者：石川剛志（海洋研究開発機構）

研究課題：過去 700 万年間の大気中二酸化炭素濃度の連続記録の作成

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2020-2022 年度，総額（直接経費）1,370 万円

研究概要：海底堆積物中の有孔虫のホウ素同位体分析から古代の大気中二酸化炭素濃度を復元し，地球の気候システムの理解を深める。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

研究課題：低波数ラマン分光法を利用した高分子の分子間相互作用の直接観察

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2020-2022 年度，総額（直接経費）1,400 万円

研究概要：低波数領域のスペクトルから高分子の分子間相互作用の直接観察を目指す。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

研究課題：テラヘルツおよび低波数ラマン分光法による高分子の高次構造解析と分子間相互作用の直接観察

研究資金：NEDO ムーンショット型研究開発事業／地球環境再生に向けた持続可能な資源循環を実現／非可食バイオマスを原料とした海洋分解可能なマルチロック型バイオポリマーの研究開発，2020-2024 年度，総額（直接経費）4,409 万円

研究概要：テラヘルツおよび低波数領域のラマンスペクトルより高分子の海洋分解機構を解明する。

研究代表者（本専攻教員）：高見泰興

共同研究者：小笠原道生（千葉大学）

研究課題：比較ゲノミクスと進化発生学から紐解く機械的生殖隔離の強化と種分化

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2021-2023年度，総額（直接経費）1,000万円

研究概要：集団ゲノミクスと遺伝子発現解析により，種分化の遺伝発生学的要因を解明する。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同分担者：山中裕樹（龍谷大学）

研究課題：環境DNA分析による繁殖レジームの多種同時分析系の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2020-2022年度，総額（直接経費）1,340万円

研究概要：環境DNA分析によって魚類の繁殖レジームを網羅的に分析するための手法を開発する。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同分担者：駒井智幸（千葉県立中央博物館），中野智之（京都大学）

研究課題：無脊椎動物における調査方法の開発と実践，ならびに基盤データの整備

研究資金：環境研究総合推進費・戦略的研究開発課題（SII-7），2020-2022年度，総額（直接経費）3,215万円

研究概要：深海域における無脊椎動物の多様性を推定するための手法として環境DNA分析を適用するための手法を開発する。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同研究者：丑丸敦史，佐藤真行，（本専攻教員），清野未恵子（人間発達専攻教員）

研究課題：生物多様性に関する市民意識の把握と市民参加型の多様性調査手法の開発

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸，2021-2022年度，総額（直接経費）227万円

研究概要：生物多様性保全とそれにとまなう問題に関する市民の意識を探るとともに，環境DNA分析を利用した市民参加型の多様性調査手法を開発する。

<数理環境論>

研究代表者（本専攻教員）：長坂耕作

研究課題：代数曲面の近似・変形・補間の各操作に適する数値・数式融合計算の開発と検証

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2019-2023年度，総額（直接経費）330万円

研究概要：代数的な性質を用いたCGやCAD等のために必要となる基盤的な計算アルゴリズムを開発し，その適用可能性を検証する。

<生活環境論>

研究代表者（本専攻教員）：平山洋介

共同研究者：

研究課題：超高齢・持ち家社会における住宅相続の増大と階層化

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (B)，2018-2022 年度，総額 (直接経費) 480 万円

研究概要：増大する住宅相続の実態とそれが住宅事情の構造に与えるインパクトを理論的・実証的に解明する。

研究代表者 (本専攻教員)：平山洋介

共同研究者：なし

研究課題：超高齢・持ち家社会における住宅相続の増大と階層化

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (B)，2018-2022 年度，総額 (直接経費) 480 万円

研究概要：増大する住宅相続の実態とそれが住宅事情の構造に与えるインパクトを理論的・実証的に解明する。

研究代表者 (本専攻教員)：平山洋介

共同研究者：佐藤岩夫 (東京大学)，祐成保志 (東京大学)，川田菜穂子 (大分大学)

研究課題：住宅セーフティネットの再構築に関する実態・制度・比較分析

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (B)，2021-2023 年度，総額 (直接経費) 610 万円

研究概要：住宅セーフティネットに関する政策実践の実態を実証的に解明すると同時に，その制度構造に理論を組み立て，さらに，日本での実態・制度の特性を国際比較のなかで明らかにする。

研究代表者 (本専攻教員)：平山洋介

共同研究者：なし

研究課題：超高齢社会における「家族住宅不動産」の蓄積と階層化

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究 (萌芽)，2021-2023 年度，総額 (直接経費) 480 万円

研究概要：住宅資産の階層論を世帯単位ではなく，複数世代を含む「家族」を単位として解明するアプローチの理論構築とそれにもとづく実証分析

研究代表者 (本専攻教員)：佐藤真行

共同研究者：源利文 (神戸大学)，村山留美子 (神戸大学)，小林勇太 (横浜国立大学)

研究課題：新型コロナウイルスの感染拡大下での都市の生態系サービスとその評価

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸，2020-2021 年度，総額 (直接経費) 240 万円

研究概要：外出制限を踏まえた都市における生態系サービス評価を行う。

研究代表者 (本専攻教員)：湯浅正洋

研究課題：ビオチンによる β 酸化調節因子 ACC2 制御機構解明とメタボリック症候群予防への応用

研究資金：科学研究費補助金・若手研究，2018-2021 年度，総額 (直接経費) 310 万円

研究概要：ビオチンによる β 酸化調節因子・アセチル CoA カルボキシラーゼ (ACC) 2 作用抑制の可能性およびその機序と，ビオチンによるメタボリックシンドローム予防・改善効果を明らかにする。

研究代表者 (本専攻教員)：湯浅正洋

研究課題:エネルギー代謝変動による妊娠期潜在性ビオチン欠乏症と胎児奇形の関連解明とその予防

研究資金: 科学研究費補助金・若手研究, 2021-2023 年度, 総額(直接経費) 350 万円

研究概要: 妊娠期における潜在性ビオチン欠乏症とエネルギー代謝変動・胎児奇形発症頻度との関連を明らかにし, 妊娠期における潜在性ビオチン欠乏症の予防法の提案を目指す。

研究代表者(本専攻教員): 大野朋子

共同研究者: 大形徹(立命館大学)

研究課題: 伝統的文化を背景とした植物利用が地域性の形成と地域環境に与える影響に関する研究

研究資金: 科学研究費補助金・基盤(C), 2018-2021 年度, 総額(直接経費) 330 万円

研究概要: 宗教や伝統工芸など文化的背景を持ちながら利用される植物の栽培, 維持, 逃げ出しが地域景観と自然環境に与える影響を明らかにする。

研究代表者(本専攻教員): 大野朋子

共同研究者: 田畑智博(本専攻教員), 村山留美子(本専攻教員)

研究課題: 感染症対策下における都市公園の重要性評価とこれからの公園利用への提案

研究資金: 若手研究者への研究活動経費助成制度大学発アーバンイノベーション神戸(令和2年度), 2020-2021 年度, 総額(直接経費) 245 万円

研究概要: 都市公園での人々の利用状況から, 公園の重要性評価を行う。この成果から神戸市の再整備計画に寄与する今後の, 感染対策を踏まえた都市公園のあり方や利用方法を提案する。

研究代表者(本専攻教員): 大野朋子

共同研究者: 田畑智博(本専攻教員)

研究課題: 植物利用の変遷および地域差異から探る持続的人文景観要素の解明と現代的地域性の担保

研究資金: 科学研究費補助金・基盤(C), 2021-2023 年度, 総額(直接経費) 320 万円

研究概要: 祭祀植物から捉えた人文景観形成の要素とライフスタイルの変化時期やその程度などを総合して検証し, 持続的人文景観要素の解明, 現代的地域性の担保と展開を論考する。

研究代表者(本専攻教員): 内山愉太

共同研究者: 徳山美津恵(関西大学), 香坂玲(名古屋大学)

研究課題: 里山・里海のマネジメントを促す地域圏の解明: 当事者意識の向上と都市地域連携

研究資金: 科学研究費補助金・基盤(C), 2020-2023 年度, 総額(直接経費) 290 万円

研究概要: 環境保全やコミュニティの維持・形成等の地域の多様な側面に関わる観光資源としての里山・里海について, 少子高齢化の状況下で管理を行うモデルを開発する。

研究代表者(本専攻教員): 村山留美子

共同研究者: 稲原美苗(神戸大学), 藤長愛一郎(大阪産業大学), 内山巖雄(公益財団法人 ルイ・パストゥール医学研究センター)

研究課題: COVID-19 流行は市民のリスク観をどのように変えるのか?: 合意形成の観点から

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2021-2023 年度，総額（直接経費）1,230 万円

研究概要：新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行が，日本社会全体の「リスク観」に与えた影響を明らかにする

研究代表者（本専攻教員）：福田博也

共同分担者：

研究課題：低コストで使い捨てが可能な歩行計測用スマートインソールの開発

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽），2019-2021 年度，総額（直接経費）490 万円

研究概要：「歩き方」や「走り方」を評価するために，市販の安価なセンサと他の材料を組み合わせることで，低コストで使い捨てが可能な歩行計測用デバイスを開発する。

<社会環境論>

研究代表者（本専攻教員）：浅野慎一

共同分担者：川地亜弥子（本研究科教員），江口怜（和歌山信愛大学教員），横関理恵（拓殖大学北海道短期大学教員）

研究課題：戦後日本の夜間中学にみる公共圏の史的変遷：ポスト・コロニアリズムの視座から

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2021-2024 年度，総額（直接経費）1,310 万円

研究概要：戦後日本の夜間中学に関する史料を集成し，その変遷の内在論理を解明する。

研究代表者（本専攻教員）：阿部紀恵

研究課題：グローバル法としての国際環境法の諸原則の比較研究

研究資金：科学研究費補助金・研究活動スタートアップ，2021-2022 年度，総額（直接経費）240 万円

研究概要：国際貿易法における国際環境法の諸原則の発展の在り方を明らかにし，他分野と比較・検討することを通じて，諸原則をグローバル法として位置付ける新たな理論を構築する。

研究代表者（本専攻教員）：井口克郎

共同研究者：浅野慎一（本専攻教員），岩佐卓也（本専攻教員），岡田章宏（本学名誉教授），澤宗則（本専攻教員），橋本直人（本専攻教員），原将也（本専攻教員），加戸友佳子（本専攻研究員），洪シネ（本専攻教博士後期課程院生）

研究課題：国連「健康権」枠組みに基づく新型コロナウイルスへの各国対応の評価と理論的再構成

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽），2021-2023 年度，総額（直接経費）：320 万円

研究概要：新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的流行に対する各国の動向について，国際人権規約第1規約（社会権規約）12条に規定される「健康権」（right to health）の枠組みから検討する。

研究代表者（本専攻教員）：岩佐卓也

研究課題：企業横断的労使関係の存立構造とその変容—ドイツを主な対象として

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2018－2021 年度，総額（直接経費） 210 万円

研究概要：企業横断的な労使関係の存立構造を実証的・理論的に明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：澤 宗則

共同研究者：南 埜 猛（兵庫教育大）

研究課題：南アジア系移民のエスニック戦略とトランスナショナルな領域化の比較考察

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2020-2023 年度，総額（直接経費） 240 万円

研究概要：南アジア系移民のエスニック戦略とトランスナショナルな領域化のプロセスを比較することにより，南アジア系移民社会の特質を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：原 将也

研究課題：アフリカにおける多民族社会成立の解明—地方行政における伝統的権威の裁量に着目して

研究資金：科学研究費補助金・若手研究，2019-2022 年度，総額（直接経費） 310 万円

研究概要：植民地期以降現在までのアフリカにおいて，間接統治のもと権力が強化された伝統的権威に着目し，多民族社会が成立する要因を実証的に解明する。

（2）国際共同研究

<自然環境論>

研究代表者（本専攻教員）：蘆田弘樹

共同研究者：Antoine Danchin (Institut Cochin, Université Paris Descartes, France)

研究課題：光合成 CO₂ 固定酵素の分子進化

研究資金：

研究概要：光合成において CO₂ 固定を触媒する RuBisCO の進化的起源を解析した。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Stefan Wanke (Technische Universität Dresden)

研究課題：Characterization of two complementary Hydrangea collections

アジサイの相互補完的遺伝資源植物コレクションの構築

研究資金：二国間交流事業共同研究，2020-2021 年度，総額（直接経費） 399 万円

研究概要：ドイツのザクセン州立植物園ならびに神戸市森林植物園に自生するアジサイ植物材料を用いて，アジサイ 100 種について植物材料の選抜と特性評価，評価法の統一化，染色体標本解析，倍数性，ゲノム解析を実施する。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Kornsorn Srikulnath (Kasetsart University, Thailand)

研究課題：Development of nano-visualization for structural analyses of genetic materials and early infection process for further innovation of functional bio-nanotechnology

遺伝物質の構造および初期感染過程のナノ可視化法の開発によるバイオナノテクノロジーの新たな

展開

研究資金：戦略的国際共同研究プログラム（SICORP）

研究概要：アジアに特有の生物種を材料に用い、細胞核および細胞分裂期に構築される遺伝物資の担体である染色体の構造についてナノ可視化法を用いて明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Astari Dwirant（Department of Biology, Faculty of Mathematics and Natural Sciences, Universitas, Indonesia）

研究課題：Chromosomes Inner Structure Study using High-resolution Electron Microscopy
高感度電子顕微鏡を用いた染色内部構造

研究資金：寄付金

研究概要：染色体の内部構造について、様々な陽イオンの状態を変化させて明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Misa Hayashida（NRC-NANO, National Research Council, Canada）

研究課題：3D observation of chromosome scaffold structure using electron tomography
電子トモグラフィーを用いた染色体スキャホールド構造の3D観察

研究概要：染色体を構成するクロマチン軸構造について、位相差トモグラフィーを用いて明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：小谷野由紀

共同研究者：Alexander S. Mikhailov（代表：金沢大学・Fritz Haber Institute of the Max Planck Society）、好村滋行（中国科学院大学・温州研究院）、北畑裕之（千葉大学）

研究課題：Enzymes as Active Matter at Nanoscales

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C）、2019-2021年度、総額（直接経費）330万円

研究概要：酵素などに代表されるマイクロかつアクティブな素子によって引き起こされる拡散・移流現象を明らかにした。

研究代表者（本専攻教員）：小谷野由紀

共同研究者：Jerzy Gorecki（代表：Polish Academy of Sciences）、Alina Ciach（Polish Academy of Sciences）、Wojciech Gozdz（Polish Academy of Sciences）、北畑裕之（代表：千葉大学）、中田聡（広島大学）、田中晋平（広島大学）、末松信彦（明治大学）、住野豊（東京理科大学）他

研究課題：相互作用する自己駆動粒子が創発する時空間パターン

研究資金：二国間交流事業共同研究、2020-2021年度、総額（直接経費）475万円

研究概要：自己駆動粒子と受動粒子、非等形状の粒子、変形しつつ運動する液滴に見られる挙動や集団運動について研究を行った。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

共同研究者：Sergei G. Kazarian (Imperial college London, UK)

研究課題：ATR-FTIR イメージング法を用いたポリマーブレンドの相分離と結晶化挙動の解析

研究資金：

研究概要：ATR-FTIR イメージング法を用いてポリマーブレンドの相分離に伴う分子間相互作用の変化を可視化する。(国際共著論文[1]参照)

研究代表者 (本専攻教員)：佐藤春実

共同研究者：Mirosław Antoni Czarnecki (University of Wrocław)

研究課題：近赤外分光法と DFT 計算によるフェノール水溶液中の相互作用に関する研究

研究資金：

研究概要：近赤外分光法によるフェノール水溶液中の弱い水素結合と強い水素結合の競合について、DFT 計算も併せ用いて解析した。

研究代表者 (本専攻教員)：源利文

共同研究者：金子 聡 (代表：長崎大学), 佐藤 綾人 (名古屋大学), 矢口貴志 (千葉大学), Ahmed Fahal (University of Khartoum, Sudan)

研究課題：早期・潜在性真菌腫診断に関する研究：バイオマーカーの探索・POC 診断と臨床疫学プラットフォームの開発

研究資金：医療分野国際科学技術共同研究開発推進事業 (アフリカにおける顧みられない熱帯病 (NTDs) 対策のための国際共同研究プログラム)

研究概要：顧みられない熱帯病のひとつであるマイセトーマの原因菌の自然界における分布を解明するとともに、簡易な診断法を開発し、疫学研究を行うためのプラットフォームを開発する。

<数理情報環境論>

研究代表者 (本専攻教員)：ESCOLAR Emerson Gaw

共同研究者：Mickaël Buchet (Graz University of Technology), Hideto Asashiba (Shizuoka University), Ken Nakashima (RIKEN), Michio Yoshiwaki (RIKEN)

研究課題：位相的データ解析におけるマルチパラメータ・パーシステンスの研究

研究資金：

研究概要：複数のパラメータをもつデータの位相的データ解析に向けて、区間分解論などを用いて理論を整備しアルゴリズムの開発を行った。

共同研究者：Mitsuru Igami (Yale University), Yasuaki Hiraoka (Kyoto University)

研究課題：企業の技術革新の位相的データ解析

研究資金：

研究概要：位相的データ解析を用いて企業の技術空間を可視化して、技術革新との関係を、既存の手法と比べながら更に詳しく調べた。

<生活環境論>

研究代表者（本専攻教員）： 平山洋介

共同研究者： Misa Izuhara (University of Bristol)

研究課題： 超高齢社会の孤立と住宅条件に関する国際比較分析

研究資金： 各自調達

研究概要： 先進諸国に共通して重要な課題となっている高齢者の孤立の回避について、居住条件から解明するアプローチの理論構築とそれにもとづく西洋・東洋の比較分析

(3) 教員の受賞

受賞者： 蘆田弘樹

受賞名： 神戸大学学長表彰（財務貢献）

受賞対象： 研究費獲得

受賞日： 2021年10月21日

受賞理由： 教育活動を通して大学の発展に貢献した。

受賞者： 窪田薫

受賞名： 神戸大学 優秀若手研究者賞

受賞対象：「生物源炭酸塩に対する地球化学分析技術を駆使した海洋炭素循環研究」

受賞日： 令和3年1月13日

受賞理由： 卓越した業績を上げた若手研究者であり、将来神戸大学の研究リーダーとして活躍することを期待されるため。

受賞者： 窪田薫

受賞名： 岩手県 三陸海域研究論文 特別賞

受賞対象： 岩手県 三陸海域研究論文「岩手県大槌湾・船越湾に生息する長寿二枚貝ビノスガイの殻を用いた古環境・古災害研究」

受賞日： 令和3年12月22日

受賞理由： 2011年の東日本大震災による津波が底生生物に与えた影響を科学的に明らかにしたため。

受賞者： 源 利文

受賞名： 第21回生態学琵琶湖賞

受賞対象： 水域生態学に関わるこれまでの一連の業績に対して。

受賞日： 令和3年7月27日

受賞理由： 水域生態学に関わるこれまでの一連の業績が学術的貢献と社会貢献の両面で高く評価されたため。

受賞者： 源 利文 ほか16名

受賞名： 令和3年度日本水産学会論文賞

受賞対象：Fisheries Science 87 巻 3 号：321-330 (2021). “Spatiotemporal distribution of *Flavobacterium psychrophilum* and ayu *Plecoglossus altivelis* in rivers revealed by environmental DNA analysis”

受賞日：令和3年3月28日

受賞理由：責任著者として執筆した Fisheries Science 誌掲載の論文が、資源保全のために有益な内容を含むだけでなく産業への波及効果も期待されると高く評価されたため。

受賞者：源 利文 ほか10名

受賞名：令和3年度日本水産学会論文賞

受賞対象：Fisheries Science 85 巻 2 号：327-337 (2019). “Dispersion and degradation of environmental DNA from caged fish in a marine environment”

受賞日：令和3年3月28日

受賞理由：共著者として執筆した Fisheries Science 誌掲載の論文が、同誌において過去6年間に出版された論文の中で最も多く引用されたことが高く評価されたため。

受賞者：原 将也

受賞名：日本熱帯生態学会 第25回吉良賞奨励賞

受賞対象：「Hara M. (2020) Coexistence of multiple ethnic groups practicing different slash-and-burn cultivation systems adapted to field conditions in miombo woodlands in northwestern Zambia. *Tropics* 28(4): 75-89」と関連研究。

受賞日：令和3年6月26日

受賞理由：受賞対象の論文とその関連研究であるザンビア北西部の多民族農村における資源利用と生業に関する研究が、今後の熱帯研究の発展に寄与する優秀なものであると評価されたため。

(4) 国際共著論文 (海外との研究)

< 自然環境論 >

Abe K et al. (2021) Improved constraints on neutrino mixing from the T2K experiment with 3.13×10^{21} protons on target. *Phys. Rev. D*, 103, 112008

Abe K et al. (2021) First T2K measurement of transverse kinematic imbalance in the muon-neutrino charged-current single- π^+ production channel containing at least one proton. *Phys. Rev. D*, 103, 112009

*Biurrun I, et al. (223 coauthors and AU is 199th) (2021) Benchmarking plant diversity of Palaearctic grasslands and open habitats. *Journal of Vegetation Science* 32:e13050.

Kovacs, Z., Muncan, J., Ohmido, N., Bazar, G., & Tsenkova, R. (2021). Water Spectral Patterns Reveals Similarities and Differences in Rice Germination and Induced Degenerated Callus Development. *Plants (Basel)*, 10(9). <https://doi.org/10.3390/plants10091832>

Liaw, Y., Liu, Y., Teo, C., Cápál, P., Wada, N., Fukui, K., Doležal J, Ohmido, N. (2021). Epigenetic Distribution of Recombinant Plant Chromosome Fragments in a Human-Arabidopsis

- Hybrid Cell Line. *Int J Mol Sci*, 22(11). <https://doi.org/10.3390/ijms22115426>
- Liu, Y., Liaw, Y. M., Teo, C. H., Cápal, P., Wada, N., Fukui, K., Doležel J, Ohmido, N. (2021). Molecular organization of recombinant human-Arabidopsis chromosomes in hybrid cell lines. *Sci Rep*, 11(1), 7160. <https://doi.org/10.1038/s41598-021-86130-4>
- Cartagena-Sierra A, Berke MA, Robinson RS, Marcks B, Castañeda IS, Starr A, Hall IR, Hemming SR, LeVay LJ, Expedition 361 Scientific Party (2021) Latitudinal Migrations of the Subtropical Front at the Agulhas Plateau Through the Mid-Pleistocene Transition. *Paleoceanogra Paleoclimatol*. doi.org/10.1029/2020PA004084.
- Czarnecki MA, Morisawa Y, Katsumoto Y, Takaya T, Singh S, Sato H, Ozaki Y (2021) Solvent Effect on Competition Between Weak and Strong Interactions in Phenol Solutions Studied by Near-infrared Spectroscopy and DFT Calculations. *Phys. Chem. Chem. Phys.* 23: 19188-19194. doi: 10.1039/D1CP02103F.
- Lu H, Sato H, Kazarian SG (2021) Visualization of Inter- and Intramolecular Interactions in Poly(3-hydroxybutyrate)/Poly(L-lactic acid) (PHB/PLLA) Blends During Isothermal Melt Crystallization Using Attenuated Total Reflection Fourier Transform infrared (ATR FT-IR) Spectroscopic Imaging. *Applied Spectroscopy*. 75: 980-987. doi:10.1177/00037028211010216.
- Sota T, Takami Y, Ikeda H, Liang H, Karagyan G, Scholtz K, Hori M (2022) Global dispersal and diversification in ground beetles of the subfamily Carabinae. *Molecular Phylogenetics and Evolution* 167: 107335. doi: 10.1016/j.ympev.2021.107355.
- Park YH, Jang TW, Kim JK, Kim SK, Kim IK, Kim CJ, Takami Y (2021) Temporal variation dominates in local carabid beetle communities in Korean mountains. *Insects* 12(11): 1019. doi: 10.3390/insects12111019.
- Yamahira K, Ansai S, Kakioka R, Yaguchi H, Kon T, Montenegro J, Kobayashi H, Fujimoto S, Kimura R, Takehana Y, Setiamarga DHE, Takami Y, Tanaka R, Maeda K, Tran HD, Koizumi N, Morioka S, Bounsong V, Watanabe K, Musikasinthorn P, Tun S, Yun LKC, Masengi KWA, Anoop VK, Raghavan R, Kitano J (2021) Mesozoic origin and ‘out-of-India’ radiation of ricefishes (Adrianichthyidae). *Biology Letters* 17: 20210212. doi: 10.1098/rsbl.2021.0212.
- Hashizume H, Taga S, Sakata MK, Taha MHM, Siddig EE, Minamoto T, Fahal AH, Kaneko S. (2022) Detection of multiple mycetoma pathogens using fungal metabarcoding analysis of soil DNA in an endemic area of Sudan. *PLoS Neglected Tropical Diseases* 16: e0010274.
- Sakata MK, Kawata MU, Kurabayashi A, Kurita T, Nakamura M, Shirako T, Kakehashi R, Nishikawa K, Hossman MY, Nishijima T, Kawamoto J, Miya M, Minamoto T (2022) Development and evaluation of PCR primers for environmental DNA (eDNA) metabarcoding of Amphibia. *Metabarcoding and Metagenomics* 6: 15-26.
- *Osathanunkul M, Minamoto T (2021) eDNA based detection of a vulnerable crocodile newt (*Tylototriton uyenoii*) to influence government policy and raise public awareness. *Diversity and Distributions* 27:1958-1965.

Wu Q, Sakata MK, Wu D, Yamanaka H, Minamoto T (2021) Application of environmental DNA metabarcoding in a lake with extensive algal blooms. *Limnology* 22:363-370.

Osathanunkul M, Minamoto T (2021) Molecular detection of giant snakeheads, *Channa micropeltes* (Cuvier, 1831), one of the most troublesome fish species. *Scientific Reports* 11:9943.

<生活環境論>

Saiful, I., Samreth, S., Saiful, AHM I, Sato, M. (2022), "Climate change, climatic extremes and households' food consumption in Bangladesh: A longitudinal data analysis", *Environmental Challenges*, forthcoming.

Saiful, I., Okubo, K., Saiful, AHM I, and Sato, M. (2022) "Food Scurity, Food Loss and Climate Change in Bangladesh", *Springer Nature Business and Economics*, Vol.2, 4.

Sato, M., Aoshima, I., Chang, Y. (2021) "Connectedness to Nature and the Conservation of the Urban Ecosystem: Perspectives from the Valuation of Urban Forests", *Forest Policy and Economics*, Vol.125, 102396.

(5) 著書

編著

<社会環境論>

重田康博, 太田和宏, 福島浩治, 藤田和子共編著 (2021)『日本の国際協力 アジア編—経済成長から「持続可能な社会」の実現へ』 ミネルヴァ書房 全 291 頁.

分担執筆

<自然環境論>

Ozaki Y, Sato H (2022) Polymer Spectroscopy - Spectroscopy from the Far-Ultraviolet to Far-Infrared/Terahertz and Raman. pp 3-44. in Ozaki Y & Sato H (eds.). *Spectroscopic Techniques for Polymer Characterization: Methods, Instrumentation, Applications* WILEY-VCH.

Sato H (2022) Far-Infrared/Terahertz and Low-Frequency Raman Spectroscopies in Polymers. pp 107-124. in Ozaki Y & Sato H (eds.). *Spectroscopic Techniques for Polymer Characterization: Methods, Instrumentation, Applications* WILEY-VCH.

Sato H (2022) Weak Hydrogen Bonding in Biodegradable Polymers. pp 435-452. in Ozaki Y & Sato H (eds.). *Spectroscopic Techniques for Polymer Characterization: Methods, Instrumentation, Applications* WILEY-VCH.

佐藤春実 (2021) 「高分子のテラヘルツおよび低振動ラマン分光」, 日本化学会編 CSJ カレントレビュー第 42 号『赤外線の利用 近赤外からテラヘルツまで』化学同人, pp. 140-147

源利文 (2022) 「環境 DNA 分析」, 澤田嗣郎監修『先端の分析法 第 2 版』株式会社エヌ・ティー・エス, pp. 756-765.

<生活環境論>

平山洋介 (2021. 4) 「経済を活性化する住宅建設」日本家政学会住居学部会 (編)『住まいの百科事典』丸善出版, 370-1.

井上真理 (2021) 「衣料品, 衛生製品分野における開発事例と使用感, 快適さの評価事例・衣服の着

心地の客観評価」, 技術情報協会編『ヒトの感性に寄り添った製品開発とその計測, 評価技術』
技術情報協会, pp. 527-541

佐藤真行 (2022), 「制度の質と持続可能性指標」, 大塚直・諸富徹 (編)『持続可能性と Well-being』,
日本評論社.

湯浅正洋, 渡邊敏明 (2021) 「2.8.5 栄養学 (栄養疫学) (2.8 ビオチン)」, 日本ビタミン学会編『ビ
タミン・バイオフィクター総合事典』朝倉書店, pp. 263-266

Kondo Y, Kumazawa T, Kikuchi N, Kamatani K, Nakahara S, Yasutomi N, Uchiyama Y, Hayashi K,
Hashimoto S, Miyata A, Muramatsu S (2022) Research Institute for Humanity and Nature: A
Japanese center for inter- and trans-disciplinary consilience of socio-cultural dimensions
of environmental sustainability. In Baptista BV, Klein JT (eds) Institutionalizing
Interdisciplinarity and Transdisciplinarity: Collaboration across Cultures and Communities.
pp. 168-184. Routledge. (*in press*)

<社会環境論>

浅野慎一 (2022) 「中国残留日本人孤児にみる歴史問題の和解と市民運動」, 外村大編著『和解をめ
ぐる市民運動の取り組み—その意義と課題』明石書店, pp. 292-325 (印刷中)

井口克郎 (2021) 「介護保険 20 年, 矛盾の帰結としての自助・互助推進政策」 『女性白書 2021』日
本婦人団体連合会編, 102~105 ページ

Kazuhiro Ota (2022) Migration and nation-state: The contradiction of globalization pp. 161-174.
In Kazunari Sakai eds. (2022) Migration Governance in Asia: A Multi-level Analysis (Global
Perspectives on Immigration and Multiculturalisation) Routledge

太田和宏 (2021) 「貧困の系譜と地域研究-「開発」の矛盾を克服するために」, 児玉谷史朗, 佐藤章,
嶋田晴行編著『地域研究へのアプローチグローバル・サウスから読み解く世界情勢』ミネルヴ
ア書房, pp. 53-69

共訳書

<社会環境論>

William I Robinson 著 松下洸監訳, 太田和宏, 岩佐卓也, 山根健至 (共訳) (2021) 『グローバル
警察国家: 人類的な危機と「21 世紀型ファシズム」』花伝社 全 348 頁

(6) WoS 論文 (10%論文には, 文頭に*を付す)

<自然環境論>

Abe K et al. (2021) Improved constraints on neutrino mixing from the T2K experiment with 3.13×10^{21} protons on target. *Phys. Rev. D*, 103, 112008

Abe K et al. (2021) First T2K measurement of transverse kinematic imbalance in the muon-neutrino
charged-current single- π^+ production channel containing at least one proton. *Phys.
Rev. D*, 103, 112009

Nakamura Y et al. (2021) Performance of an emulsion telescope for gamma-ray observations in
the GRAINE2018 balloon-borne experiment. *Progress of Theo. and Exp. Physics*, 2021,
123H02 (掲載時に “Editor’s Choice” として選出された)

- Watanabe R, Ashida H, Kobayashi-Miura M, Yokota A, Yodoi J (2021) Effect of chronic administration with human thioredoxin-1 transplastomic lettuce on diabetic mice. *Food Science&Nutrition* 9(8), 4232-4242.
- Nakata T, Ishii R, Yaida YA and Ushimaru A (2022) Horizontal orientation facilitates pollen transfer and rain damage avoidance in actinomorphic flowers of *Platycodon grandiflorous*. *Plant Biology* early view
- Nishizawa R, Nakao R, Ushimaru A and Minamoto T (2022) Development of environmental DNA detection assays for snakes in paddy fields in Japan. *Landscape and Ecological Engineering* xx:xx-xx.
- Murakami K, Katsuhara KR and Ushimaru A (2022) Intersexual flower differences in an andromonoecious species: small pollen - rich staminate flowers under resource limitation. *Plant Biology* 24:259-265.
- Katsuhara KR, Tachiki Y, Iritani R and Ushimaru A (2021) The eco-evolutionary dynamics of prior selfing rates promote coexistence without niche partitioning under conditions of reproductive interference. *Journal of Ecology* 109:3916-3928.
- *Biurrun I et al. (2021) Benchmarking plant diversity of Palaeartic grasslands and other open habitats. *Journal of Vegetation Science* 32:e13050. (223 coauthors and AU is 199th)
- Ushimaru A, Ishii R and Katsuhara KR (2021) Covering and shading by neighbouring plants diminish pollinator visits to and reproductive success of a forest edge-specialist dwarf species. *Plant Biology* 23:711-718.
- Kovacs, Z., Muncan, J., Ohmido, N., Bazar, G., Tsenkova, R. (2021). Water Spectral Patterns Reveals Similarities and Differences in Rice Germination and Induced Degenerated Callus Development. *Plants (Basel)*, 10(9). <https://doi.org/10.3390/plants10091832>
- Liaw, Y., Liu, Y., Teo, C., Cápál, P., Wada, N., Fukui, K., Doležel J, Ohmido, N. (2021). Epigenetic Distribution of Recombinant Plant Chromosome Fragments in a Human-Arabidopsis Hybrid Cell Line. *Int J Mol Sci*, 22(11). <https://doi.org/10.3390/ijms22115426>
- Liu, Y., Liaw, Y. M., Teo, C. H., Cápál, P., Wada, N., Fukui, K., Doležel J, Ohmido, N. (2021). Molecular organization of recombinant human-Arabidopsis chromosomes in hybrid cell lines. *Sci Rep*, 11(1), 7160. <https://doi.org/10.1038/s41598-021-86130-4>
- Seike K, Sassa S, Shirai K, Kubota K (in press) Sediment hardness and water temperature affect the burrowing of *Echinocardium cordatum*: implications for mass mortality during the 2011 earthquake-liquefaction-tsunami disaster. *Estuarine, Coastal and Shelf Science*.
- Kubota K, Shirai K, Murakami-Sugihara N, Seike K, Tanabe K, Minami M, Nakamura T. (2021) Evidence of mass mortality of the long-lived bivalve *Mercenaria stimpsoni* caused by a catastrophic tsunami. *Radiocarbon* 63, 1629-1644.
- Cartagena-Sierra A, Berke MA, Robinson RS, Marcks B, Castañeda IS, Starr A, Hall IR, Hemming SR, LeVay LJ, Expedition 361 Scientific Party (2021) Latitudinal Migrations of the Subtropical Front at the Agulhas Plateau Through the Mid-Pleistocene Transition. *Paleoceanogra Paleoclimatol*. doi.org/10.1029/2020PA004084.

- Kubota K, Ishikawa T, Nagaishi K, Kawai T, Sagawa T, Ikehara M, Yokoyama Y, Yamazaki T (2021) Comprehensive analysis of laboratory boron contamination for boron isotope analyses of small carbonate samples. *Chemical Geology* 576, 120280.
- Nagata Y, Nishino H, Kuroda K, Shinohara T, Satomi D, Terada K, Nishimura T, Kuroda T, Inoue Y, Park YH, Takami Y (2022) Reproductive phenology and female mating frequency of the praying mantid *Tenodera angustipennis* in western Japan. *Ecological Entomology*: online. doi: 10.1111/een.13127.
- Nishimura T, Nagata N, Terada K, Xia T, Kubota K, Sota T, Takami Y (2022) Reproductive character displacement in genital morphology in *Ohomopterus* ground beetles. *The American Naturalist* 199: E76–E90. doi: 10.1086/717864.
- Mitani E, Ozaki Y, Sato H (2022) Two Types of C=O · · · HO Hydrogen Bonds and OH · · · OH (Dimer, Trimer, Oligomer) Hydrogen Bonds in PVA with 88% Saponification/PMMA and PVA with 99% Saponification/PMMA Blends and Their Thermal Behavior Studied by Infrared Spectroscopy. *Polymer* (in press).
- Sato H, Morisawa Y, Takaya S, Ozaki Y (2022) A Study of C=O···HO and OH···OH (Dimer, Trimer, and Oligomer) Hydrogen Bondings in a Poly(4-vinylphenol)30%/Poly(methyl methacrylate)70% Blend and its Thermal Behaviour Using Near-infrared Spectroscopy and Infrared Spectroscopy. *Applied Spectroscopy* (in press).
- Sharma T, Nishio Y, Tamano Y, Sato H, Takahashi I (2021) Correlation of physical aging and glass transition temperatures in ultrathin polystyrene films supported on SiO₂. *Polymer* 230:124103.
- Czarnecki MA, Morisawa Y, Katsumoto Y, Takaya T, Singh S, Sato H, Ozaki Y (2021) Solvent Effect on Competition Between Weak and Strong Interactions in Phenol Solutions Studied by Near-infrared Spectroscopy and DFT Calculations. *Phys. Chem. Chem. Phys.* 23:19188–19194.
- Nishimae A, Sato H (2021) Study of Co-crystallization and Intermolecular Hydrogen Bondings of Poly(glycolide-co-L-lactide) Copolymers by Terahertz and Low-Frequency Raman Spectroscopy. *Macromolecules* 54:6440–6448.
- Nochi M, Ozaki Y, Sato H (2021) Water-induced conformational changes in the powder and film of ε-poly(L)lysine studied by infrared and Raman spectroscopy. *Spectrochimica Acta Part A: Molecular and Biomolecular Spectroscopy* 260:119900.
- Lu H, Sato H, Kazarian SG (2021) Visualization of Inter- and Intramolecular Interactions in Poly(3-hydroxybutyrate)/Poly(L-lactic acid) (PHB/PLLA) Blends During Isothermal Melt Crystallization Using Attenuated Total Reflection Fourier Transform infrared (ATR FT-IR) Spectroscopic Imaging. *Applied Spectroscopy*. 75: 980–987.
- Shinohara T, Takami Y (2022) Prey preference of a wasp determined by nest size supports the role of natural selection in body size evolution in Cassidinae leaf beetles. *Biological Journal of the Linnean Society* 135: 184–194. doi: 10.1093/biolinnean/blab135.
- Satomi D, Ogasa W, Takashima H, Fujimoto S, Koshio C, Kudo S, Takami Y, Tatsuta H (2021) Limits

- to exaggeration and diversification in a male sexual trait in the false blister beetle *Oedemera sexualis*. *Entomological Science* 24: 219–227. doi: 10.1111/ens.12469.
- Kawai T, Ohshima T, Tanaka T, Ikawa S, Tani A, Inazumi N, Shin R, Itoh Y, Meyer K, Maeda N (2022) *Limosilactobacillus (Lactobacillus) fermentum* ALAL020, a probiotic candidate bacterium, produces a cyclic dipeptide that suppresses the periodontal pathogens *Porphyromonas gingivalis* and *Prevotella intermedia*. *Frontiers in Cellular and Infection Microbiology* 12:804334.
- Shimada J, Yamada M, Tani A, Sugahara T, Tsunashima K, Tsuchida Y, Hirai T (2022) Thermodynamic properties of tetra-*n*-butylphosphonium dicarboxylate semiclathrate hydrates. *Journal of Chemical & Engineering Data* 67:67–73.
- Shimada J, Shimada M, Sugahara T, Tsunashima K, Takaoka Y, Tani A (2021) Phase equilibrium temperature and dissociation enthalpy in the tri-*n*-butylalkylphosphonium bromide semiclathrate hydrate systems. *Chemical Engineering Science* 236:116514.
- Hashizume H, Taga S, Sakata MK, Taha MHM, Siddig EE, Minamoto T, Fahal AH, Kaneko S. (2022) Detection of multiple mycetoma pathogens using fungal metabarcoding analysis of soil DNA in an endemic area of Sudan. *PLoS Neglected Tropical Diseases* 16: e0010274.
- Nagayama S, Oota M, Fujita T, Kitamura J, Minamoto T, Mori S, Kato M, Takeyama N, Takino F, Yonekura R, Yamanaha H (2022) Autumn dispersal and limited success of reproduction of the deepbody bitterling (*Acheilognathus longipinnis*) in terrestrialized floodplain. *Knowledge and Management of Aquatic Ecosystems* 423:4.
- Sasano S, Murakami H, Suzuki KW, Minamoto T, Yamashita Y, Masuda R. (2022) Seasonal changes in the distribution of black sea bream *Acanthopagrus schlegelii* estimated by environmental DNA. *Fisheries Science* 88: 91–107.
- Murakami H, Masuda R, Yamamoto S, Minamoto T, Yamashita Y (2022) Environmental DNA emission by two carangid fishes in single and mixed-species tanks. *Fisheries Science* 88:55–62.
- Tsuji S, Nakao R, Saito M, Minamoto T, Akamatsu Y (2022) Pre-centrifugation before DNA extraction mitigates extraction efficiency reduction of environmental DNA caused by the preservative solution (benzalkonium chloride) remaining in the filters. *Limnology* 23: 9–16.
- Jo T, Sakata MK, Murakami H, Masuda R, Minamoto T (2021) Universal performance of benzalkonium chloride for the preservation of environmental DNA in seawater samples. *Limnology and Oceanography: Methods* 19:758–768.
- Fukuda A, Usui M, Uchiyama K, Shrestha D, Hashimoto N, Sakata MK, Minamoto T, Yoshida O, Murakami K, Tamura Y, Asai T (2021) Prevalence of antimicrobial-resistant *Escherichia coli* in the migratory bird (*Anser albifrons*) and their habitat in Miyajimanuma, Japan. *Journal of Wildlife Diseases* 57:954–958.
- *Osathanukul M, Minamoto T (2021) eDNA based detection of a vulnerable crocodile newt (*Tylototriton uyenoii*) to influence government policy and raise public awareness.

Diversity and Distributions 27:1958–1965.

- Ogata M, Masuda R, Marino H, Sakata MK, Hatakeyama M, Yokoyama K, Yamashita Y, Minamoto T (2021) Environmental DNA preserved in marine sediment for detecting jellyfish blooms after a tsunami. *Scientific Reports* 11:16830.
- Wu Q, Sakata MK, Wu D, Yamanaka H, Minamoto T (2021) Application of environmental DNA metabarcoding in a lake with extensive algal blooms. *Limnology* 22:363–370.
- Fukaya K, Murakami H, Yoon S, Minami K, Osada Y, Yamamoto S, Masuda R, Kasai A, Miyahira K, Minamoto T, Kondoh M (2021) Estimating fish population abundance by integrating quantitative data on environmental DNA and hydrodynamic modeling. *Molecular Ecology* 30:3057–3067.
- Jo T, Ikeda S, Fukuoka A, Inagawa T, Okitsu J, Katano I, Doi H, Nakai K, Ichianagi H, Minamoto T (2021) Utility of environmental DNA analysis for effective monitoring of invasive fish species in reservoirs. *Ecosphere* 12:e03643.
- Jo T, Minamoto T (2021) Complex interactions between environmental DNA (eDNA) state and water chemistries on eDNA persistence suggested by meta-analyses. *Molecular Ecology Resources* 21:1490–1503.
- Osathanunkul M, Minamoto T (2021) Molecular detection of giant snakeheads, *Channa micropeltes* (Cuvier, 1831), one of the most troublesome fish species. *Scientific Reports* 11:9943.
- Yasashimoto T, Sakata MK, Sakita T, Nakajima S, Ozaki M, Minamoto T (2021) Environmental DNA detection of an invasive ant species (*Linepithema humile*) from soil samples. *Scientific Reports* 11:10712.
- Doi H, Minamoto T, Takahara T, Tsuji S, Uchii K, Yamamoto S, Katano I, Yamanaka H (2021) Compilation of real-time PCR conditions toward the standardization of eDNA methods. *Ecological Research* 36:379–388.
- Tenma H, Tsunekawa K, Fujiyoshi R, Takai H, Hirose M, Masai N, Sumi K, Takihana Y, Yanagisawa S, Tsuchida K, Ohara K, Jo T, Takagi M, Ota A, Iwata H, Yaoi Y, Minamoto T (2021) Spatio-temporal distribution of *Flavobacterium psychrophilum* and ayu *Plecoglossus altivelis* in rivers revealed by environmental DNA analysis. *Fisheries Science* 87:321–330.
- Sakata MK, Watanabe T, Maki N, Ikeda K, Kosuge T, Okada H, Yamanaka H, Sado T, Miya M, Minamoto T (2021) Determining an effective sampling method for eDNA metabarcoding: a case study for fish biodiversity monitoring in a small, natural river. *Limnology* 22:221–235.

<数理情報環境論>

- Escolar EG, Meehan K, & Yoshiwaki M (2021) Interleavings and matchings as representations. *Applicable Algebra in Engineering, Communication and Computing*
<https://doi.org/10.1007/s00200-021-00530-7>

<生活環境論>

- Hirayama, Y. (2021) Housing, family, and life-course in post-growth Japan, *Japan Architectural*

Review, 4 (2), 267-76

- Saiful, I., Samreth, S., Saiful, AHM I, Sato, M. (2022), "Climate change, climatic extremes and households' food consumption in Bangladesh: A longitudinal data analysis", *Environmental Challenges*, forthcoming.
- Saiful, I., Okubo, K., Saiful, AHM I, and Sato, M. (2022) "Food Security, Food Loss and Climate Change in Bangladesh", *Springer Nature Business and Economics*, Vol.2, 4.
- Hayashi, T., Kunii, D., and Sato, M. (2021) "A Practice in Valuation of Ecosystem Services for Local Policymakers: Inclusion of Local-Specific and Demand-Side Factors", *Sustainability*, 13, 11894.
- Sato, M., Aoshima, I., Chang, Y. (2021) "Connectedness to Nature and the Conservation of the Urban Ecosystem: Perspectives from the Valuation of Urban Forests", *Forest Policy and Economics*, Vol.125, 102396.
- Yuasa M, Kawabeta K, Morikawa M, Iwami M, Tominaga M (2021) Antioxidant and taste properties of fresh onion (*Allium cepa* L.) leaves. *Journal of Food Measurement and Characterization* 15(2):1083-1091.
- Kawanami F and Tabata T (2022) Model Analysis of the Impact of Increased Time at Home on Energy Consumption: A Japanese Case Study during the COVID-19 Lock Down, *Journal of Sustainable Development of Energy, Water and Environment Systems*.
- Zhou J and Tabata T (2022) Economic, societal, and environmental evaluation of woody biomass heat utilization: A case study in Kobe, Japan, *Renewable Energy*, 188, 256-268.
- Sun N and Tabata T (2021) Environmental impact assessment of China's waste import ban policies: An empirical analysis of waste plastics importation from Japan, *Journal of Cleaner Production*, 329 (20), 129606.
- Tabata T and Wang T.Y (2021) Life Cycle Assessment of CO₂ emissions of online music and videos streaming in Japan, *Applied Sciences*, 11 (9), 3992.
- Miyake Y, Kimoto S, Uchiyama Y, Kohsaka R (2022) Income Change and Inter-Farmer Relations through Conservation Agriculture in Ishikawa Prefecture, Japan: Empirical Analysis of Economic and Behavioral Factors. *Land*, 11(2): 245.
- Kohsaka R, Uchiyama Y (2022) Status and Trends in Forest Environment Transfer Tax and Information Interface between Prefectures and Municipalities: Multi-Level Governance of Forest Management in 47 Japanese Prefectures. *Sustainability*, 14(3): 1791.

(7)その他論文

<自然環境論>

窪田薫 (in press) 長寿二枚貝ビノスガイの殻の地球化学分析を通じた古環境復元～海流から津波まで～. 化石.

Sakata MK, Kawata MU, Kurabayashi A, Kurita T, Nakamura M, Shirako T, Kakehashi R, Nishikawa K, Hossman MY, Nishijima T, Kawamoto J, Miya M, Minamoto T (2022) Development and evaluation

of PCR primers for environmental DNA (eDNA) metabarcoding of Amphibia. *Metabarcoding and Metagenomics* 6: 15–26.

瀬口雄一, 山本義彦, 竹門康弘, 源利文 (2021) 淀川大堰湛水域における琵琶湖産アユの河川残留個体の存在. 魚類学雑誌, 68 巻, pp. 163–172.

赤塚真依子, 高山百合子, ムチェブエ エドウィン, 伊藤一教, 渡辺謙太, 桑江朝比呂, 源利文 (2021) 藻場モニタリングのための環境 DNA 分析プロトコル作成に向けた検討. 土木学会論文集 B2 (海岸工学) . 77 巻, pp. I_895–I_900.

<数理情報環境論>

Nagasaka K (2021) Relaxed NewtonSLRA for Approximate GCD, *Computer Algebra in Scientific Computing (CASC 2021, Lecture Notes in Computer Science)* Vol.12865, 272–292.

<生活環境論>

平山洋介 (2022. 3) 「郊外——反都市の系譜」『都市計画』355

平山洋介 (2021. 12) 「老々相続の現実と求められる流動化政策」『中央公論』135(12), 48–57.

平山洋介 (2021. 10. 8) 「経済教室——公的家賃補助の整備急げ」『日本経済新聞』

川田菜穂子・平山洋介 (2021. 9) 「「賃貸世代」の住宅アフォーダビリティと持ち家取得意向」日本建築学会建築社会システム委員会『利用を主とするハウジングシステムを考える』61–66.

平山洋介 (2021. 9) 「海をもう一度——小松左京『大震災’95』から」『現代思想』10 月臨時増刊号, 148–157.

平山洋介 (2021. 6) 「住宅問題とは何か——“脱商品化／再商品化”の視点から」『生活協同組合研究』(545), 5–15.

平山洋介 (2021. 4) 「これが本当に住まいのセーフティネットなのか」『世界』(944), 189–96.

井上真理 (2021) 接触冷温感の客観的評価としての最大熱流束 (q_{max}) の標準化, 繊維学会誌. 77(9): P-456–P-459

木下信, 佐藤真行, 依田高典 (2021) 「ベイズ確率改定と感染予防行動: 日本の COVID-19 感染第一波のエビデンス」, 京都大学大学院経済学研究科ディスカッションペーパーシリーズ, No. J-21-003

本郷涼子, 湯浅正洋, 片山実悟, 田中麻以, 安井佳世, 世羅至子 (2022) 造血細胞移植後の患者に対する生野菜・生果物の提供ならびに患者食の追加加熱殺菌の妥当性の検討, 日本病態栄養学会誌, in press.

湯浅正洋 (2021) 超音波を調理へ応用できるのか? —食品加工や調理における超音波利用の現状と展望—, 分子調理, 9: 8–11.

富永美穂子, 飛奈卓郎, 植村(石見)百江, 湯浅正洋, 永山千尋, 立松麻衣子 (2021) 大学主催の「健康カフェ」による継続的な健康介入が地域高齢者の意欲と生活意識に及ぼす影響, 広島大学大学院人間社会科学部研究科紀要「教育学研究」, 2: 134–142.

山村春男, 吉野豊, 大曲勝久, 湯浅正洋, 宮田優, 田中一成 (2021) 黒ショウガサプリメント継続摂取が冷え改善に及ぼす影響 —ランダム化二重盲検プラセボ対照並行群間比較試験—, 薬理と治療 (JPT), 49(10): 1705–1714.

Omagari K, Koba C, Nagata A, Ngo LCT, Yamasaki M, Fukuda A, Yuasa M, Suruga K, Inada N, Ichimura-Shimizu M, Tsuneyama K (2021) Olive leaf powder prevents nonalcoholic

steatohepatitis in Sprague-Dawley rats fed a high-fat and high-cholesterol diet. *Clinical Nutrition Open Science* 37:47-59.

Tsai P, Tabata T, Onishi A (2021) Investigation of public perception and attitude towards the disposal of disaster waste in Japan, *Cities for people: From theory to practice*, IACSC2020.

丸山愛海, 田畑智博 (2021) 若年層の消費行動が環境に与える影響の分析 : 1989年・2004年・2014年を対象として, 土木学会論文集G(環境), 77(6): II_217-II_226.

Takekawa, A., Kajiura, M., Fukuda, H. (2021) Role of Layers and Neurons in Deep Learning With the Rectified Linear Unit. *Cureus Journal of Medical Science*, 13(10), doi:10.7759/cureus.18866

<社会環境論>

浅野慎一 (2021) パンデミックと都市・地域—新型コロナ禍の中で地域社会学は何を問うのか, 地域社会学ジャーナル. 2: 4-9 頁

浅野慎一 (2021) 夜間中学とその生徒の史の変遷過程, 基礎教育保障学研究. 5: 77-93 頁

佟岩・浅野慎一(2022)ポスト・コロニアルの中国における残留日本人の労働・生活とその時空, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要. 第15巻第2号: 印刷中

井口克郎・岩佐卓也・太田和宏・原将也・加戸友佳子・浅野慎一(2022)斎藤幸平『人新世の資本論』集英社新書をどう読むか, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要. 第15巻第2号: 印刷中

井口克郎 (2021) 「地域包括ケアシステム, コンパクトシティおよび防災集団移 転の一体的展開と住民生活への影響 —東日本大震災被災地における住民生活実 態調査から—」『医療福祉政策研究』第4号, 日本医療福祉政策学会編, 59~84 頁

井口克郎 (2021) 「制度発足 20 年の現実から介護保険を問い直す—コロナ禍を契 機とした対抗と課題—」『京都民医連医報』45 (1), 京都民主医療機関連合 会, 17~20 頁

井口克郎 (2021) 『介護保険制度 20 年の失敗と現局面—健康権を軸とした介護保 障制度への転換を—』『民医連医療』No. 591, 6~9 頁

井口克郎 (2021) 「介護保険の本質的矛盾と介護保障への転換—「健康権」 (right to health) の遵守を—」『大阪保険医雑誌』No. 663, 14~17 頁

井口克郎 (2021) 「社会保障費抑制・社会保障後退政策への対抗軸としての憲 法・国際人権規約 (社会権規約) における社会保障後退禁止規定・健康権規定」 『国民医療』No. 352, 日本医療総合研 究所編, 40~59 頁

太田和宏(2021) SDGs と開発イデオロギー: 途上国の視点から, 経済. 第310号: 71-82. 頁

太田和宏(2021) フィリピン・ドゥテルテ政権下の6年, 米中対立のはざままで, 経済. 第318号: 48-58 頁

澤 宗則・南埜 猛 (2022) ネパール人留学生に関するトランスナショナルな関係—ネパールの日本語学校の立地と戦略に注目して, 移民研究. 18: 印刷中 査読付き

斉藤史朗・佐藤典子・橋本直人・渡曾知子・出口剛司 (2021) 「今, 学説史研究の未来と可能性を考える」, 社会学史研究 (招待論文), 第43号, 19-40 頁

橋本直人「マックス・ウェーバーの理論的变化に関する計量テキスト分析の試み」, 神戸大学大学院

人間発達環境学研究科研究紀要, 第 15 巻第 2 号, 印刷中

原 将也 (2021) 「ザンビア北西部における生業からみた多民族農村の暮らし」, 日本熱帯生態学会ニューズレター, 第 125 号, pp. 4-10.

黒崎龍悟・原 将也・中澤芽衣・佐藤孝宏 (2021) 「群馬県東南部におけるキャッサバ栽培—農事組合法人アグリファームによる取り組み」, 産業研究, 第 57 巻, 第 1 号, pp. 15-30. (査読付き)

原 将也・横山貴史・宇津川喬子・伊藤徹哉・島津 弘 (2022) 「宮城県名取川下流域における堤外地空間の利用と管理」, 地域研究, 第 60 巻, in press. (査読付き)

(人間環境学専攻長 近江戸伸子)

8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動

8.1. 産官学共同プロジェクト

(1) 木製玩具が幼児の遊びと発達に及ぼす影響

株式会社丸紅木材と有限会社新宅善寛商店との共同研究として檜玩具や木製玩具が幼児の遊びや発達にもたらす影響について文献研究を行い, 評価指標の設定や今後の研究計画について議論した。

(人間発達専攻 山根隆宏)

(2) 檜が人の生体反応や行動・発達に及ぼす影響の解明 研究資金：丸紅木材・株, 有・新宅善寛商店

檜の匂いが生体の生理学的や精神的な機能に及ぼす影響を明らかにする。

(人間発達専攻 近藤徳彦, 山根隆宏)

(3) 薄井憲二バレエ・コレクション第 28 回企画展「バレエで描かれたインド～想像と創造～」

兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」企画展として, 兵庫県立芸術文化センターロビー (2 階) 展示室ポックにて開催 (2022 年 1 月 13 日～3 月 6 日)。アンティークプリント・プログラム・台本・写真・葉書・絵画など約 35 点を展示。展示の企画およびリーフレットの監修を務めた。

(人間発達専攻 関典子)

(4) 地域コミュニティを対象とした e スポーツの展開

西日本電信電話株式会社との共同研究であり, 地域コミュニティの住民を対象とした e スポーツ体験がコミュニケーション活性や気分にもたらす影響を明らかにする。

(人間発達専攻 増本康平)

(5) 乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究

神戸市事業として乳幼児保育研究部会を立ち上げ, 遠隔公開保育の方法の開発, 実践事例の可視化と発信方法の開発等, 保育の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性についての検討を行った。

(人間発達専攻 北野幸子)

(6) ICT を活用したドキュメンテーションツールの開発～「おうちえん」についての機能強化、新展開に関わる共同研究～

産官学連携による園と家庭との連携ツールを開発した。附属幼稚園における「おうちえん」の実証研究を踏まえ、ドキュメンテーションツールを開発した。

(人間発達専攻 北野幸子)

(7) 地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築

知的障害者に大学教育を開くことをめぐる理論的・実践的課題を明らかにし、大学教育プログラムを開発・実施する実践的なモデル開発研究、及び兵庫県内の障害者の生涯学習機会創出のモデル開発を行なう研究である。

(人間発達専攻 津田英二)

(8) 積水化学工業株式会社との共同研究

高分子材料の構造物性評価に関する研究

テラヘルツ分光法およびラマン分光法を用いて、高分子材料の物性特性に関して、特に構造と物性の相関に関する研究を行った。

(人間環境学専攻 佐藤春実)

(9) 三菱ケミカル株式会社との共同研究

生分解性高分子の構造物性に関する研究

生分解性高分子のテラヘルツスペクトルおよび低波数領域を含むラマンスペクトルを測定し、それらのスペクトル変化から、構造と物性の関係について調べた。

(人間環境学専攻 佐藤春実)

(10) LG Japan Lab 株式会社との共同研究

プラスチック材料の評価に関する研究

テラヘルツ時間領域分光法を主に用いて、種々のプラスチック材料の評価を行った。

(人間環境学専攻 佐藤春実)

(11) スカイワークスフィルターソリューションズジャパン株式会社

基盤材料の評価に関する研究

加工プロセスを経た基板材料の評価技術として ESR や XPS, STEM などの分析法を用い、基板内での面内ダメージの分布の把握に取り組んだ。また、ESR 法による評価方法の手順を見直すことで、評価方法の改善に取り組んだ。

(人間環境学専攻 谷篤史)

(12) Studio Phones

Kobe Studio Seminar

Studio Phones と数理情報環境論が産学連携で実施する少人数と分野横断などをコンセプトと

するセミナー活動である。2021年度も、新型コロナウイルスの感染防止の観点からオンラインにて5回の講演等のセッションを実施した。

(人間環境学専攻 長坂耕作)

(13) 有限会社 井上企画・幡

衣類の着心地と糸・生地風の風合いの数値評価に関する研究

日本伝統の蚊帳生地織物を材料とした服の着心地として、温熱快適性と風合いを捉える材料物性測定と評価を行った。また、蚊帳地織物生産時に廃棄物とされていた部分を使用した糸及び生地の風合い評価に関する研究を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(14) パナソニック株式会社 コアテクノロジー開発センター

衣類への機能付加による風合い変化の定量化について

機能剤を付加した衣類の官能評価と材料特性の測定・評価を行い、機能材を付加したことによって生じる風合いの変化をとらえるとともに、そのメカニズムの解明について検討した。

(人間環境学専攻 井上真理)

(15) 公益財団法人 ひょうご環境創造協会

CNF活用による植物性廃棄物の資源化研究

竹を中心とした植物性廃棄物より条件を変えて分離・漂白したセルロースナノファイバーの物性評価の確認を行うとともに、それらのファイバーを用いた製品の要求特性評価方法確立のための研究を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(16) 農林水産省 農林水産政策研究所との共同研究

「環境保全型農業による社会経済的影響の評価と生態系への影響も合わせた総合的評価手法の開発に関する研究」(連携研究スキームによる研究, 2021-2024)

環境に配慮した農業の取組事例(例えば、総合的病害虫管理(IPM)、湛水管理、粗放的栽培等を取り入れた事例)について、生態系及び生態系サービスに与える影響と社会経済的な影響を総合的に評価するための手法を開発し、その試行的適用を行った。

(人間環境学専攻 佐藤真行)

(17) 神戸市環境局との共同研究

「生物多様性神戸プラン」に基づき、生物多様性の保全の取り組みを進めた放置里山林や不耕作棚田等の整備に取り組むことで、生物多様性を高めるとともに、自然豊かな神戸の魅力を外内に発信していくための調査研究を行った。

(人間環境学専攻 佐藤真行)

(18) 生活協同組合コープこうべ

買い物弱者対策としての移動販売事業の展開に関する分析

買い物弱者対策としての移動販売事業を通して、移動販売事業の採算性向上のための改善策の検討や地域貢献に資する事業展開のあり方を検討した。神戸市を中心とした移動販売事業の利用者に対する聞き取り調査を行い、移動販売の利用や移動販売の利用を通じた地域住民とのコミュニケーションの活性化の度合いなどを分析した。

(人間環境学専攻 田畑智博)

(19) 環境省 近畿地方環境事務所

災害廃棄物の分別・搬出方法の住民広報を実現するための戦略的広報技術の開発

平時のうちから、自治体が地域住民に対する災害廃棄物の分別や撤去・運搬に関する情報提供やコミュニケーションを円滑にすすめるための広報手段を提案することを目的とする。近畿地方や九州地方の自治体、住民を対象とし、災害廃棄物に関する情報提供に対する自治体と住民との意識のギャップを分析した。

(人間環境学専攻 田畑智博)

(20) 村田機械株式会社, 他数社との共同研究

CNT ニットセンサの研究開発 (2021 年度～, 年度ごとに研究費補助)

スマートテキスタイルとしての CNT (Carbon Nanotube) ニットの機械-電気特性を理論的・実験的に明らかにし、人間計測における「指先センサ」「回旋センサ」「嚙下センサ」などの開発に取り組んだ。得られた研究成果は、特許として共同出願の手続きを行っている。

(人間環境学専攻 福田博也)

(21) 農事組合法人アグリファーム

日本におけるキャッサバ栽培技術に関する研究

2020 年より農事組合法人アグリファーム (群馬県邑楽郡邑楽町) と高崎経済大学と連携し、日本における熱帯作物キャッサバの栽培実践の定量的な把握に取り組んでいる。日本でのキャッサバ栽培の先例はほとんどなく、現在の実践を把握して分析することで、日本におけるキャッサバの栽培技術の確立につながることを期待できる。

(人間環境学専攻 原 将也)

8.2. 地域連携プロジェクト

(1) 障害児の感覚運動指導実践

神戸市総合児童センターと神戸松蔭女子学院大学と連携・協働し、障害のある子どもと家族を対象とした感覚運動指導教室 PRIME を神戸市総合児童センターにて開催した。新型コロナウイルス流行の影響により、前期は休室し、10 月より開室した。計 12 組の家族を対象とした 14 回の継続指導や、次期活動希望者を対象とした教育相談等、本学や神戸松蔭学院大学の学部生・大学院生および地域の心理職とともに実践とその効果検証を行った。

(人間発達専攻 山根隆宏)

(2) 重度重複障害児の感覚運動指導実践

神戸市総合児童センターと神戸松蔭女子学院大学、姫路大学と連携・協働し、重度重複障害児とその家族を対象に、神戸大学名誉教授中林稔堯主催で「チャレンジルーム」を神戸市総合児童センターにて開催した。本学の学部生・大学院生も参加し、重度重複障害児への感覚運動指導を3回行った。

(人間発達専攻 山根隆宏)

(3) 健康ビッグデータを活用した県民の健康づくり事業

兵庫県委託事業 特定健康診査等のデータ分析や健康教育に関する調査を実施し、健康教育に関わる地域特性を明らかにした。

(人間発達専攻 加藤佳子 高田義弘)

(4) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の視点から子どもの育ちをとらえる

福井県の私立幼稚園・認定こども園協会との連携で、幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿に基づき、教育実践開発を行った。

(人間発達専攻 北野幸子)

(5) 0 歳児から 6 歳児までの保育・教育を考えるー非認知的能力はどのようにして育まれるのかー

大阪府私立幼稚園連盟との共同研究として、0 歳児から 6 歳児までの非認知的能力の育成方法についての実践開発を行った。本研究の成果については、広く配布するためのリーフレットを作成した。

(人間発達専攻 北野幸子)

9. 社会的活動・震災復興支援

9.1. 災害地への支援活動

九州南部豪雨災害支援 熊本県八代市坂本町

コロナウィルスの影響もあり、本格的な支援はかなわなかったが、2019 年 7 月 4 日前後の集中的な豪雨により被害がもたらされた熊本県球磨川流域での復興活動に対して、引き続き支援活動を行った。主な活動は、ネットワーク活動、募金活動、直接訪問によるボランティア・調査活動の三つである。

発災後に生まれた多大学のネットワークを利用して情報収集に努めるとともに、支援を計画している諸団体と連絡を取り、新型コロナウイルスの感染拡大を意識した活動の在り方を検討した。九州の諸大学（熊本大学、熊本県立大学、熊本学園大学など）の動きとともに支援プランを作り、被災地外からの後方支援（義援金、情報提供）、地域拠点運営支援、情報発信支援、現状確認を目的とした訪問活動を行った。

訪問活動は、7 月 2～4 日で、清野未恵子准教授の引率の元、6 名が八代市坂本町社会教育センターを拠点として清掃活動やヒアリングによる状況把握のための活動を行った。また、その際、東日本大震災を契機とした『11 えん募金』の一部を、「球磨川アドベンチャーズ」に手渡した。これらにかかわったのは、本研究科教員（人間発達専攻教員 3 名、人間環境学専攻教員 1 名）、学生（のべ 40 名）、学外 NPO メンバー 10 名程度であるが、オンラインを用いたおかげで、全国の有志とのネットワーク

を作ることができた。今後の災害支援時にこうしたネットワークは、実際の経験知とともに有益に機能することが期待される。

東日本大震災復興支援 岩手県大船渡市赤崎町

2011（平成23）年3月11日に津波によって大きな被害を受けた岩手県大船渡市への復興支援を続けて、11年になる。コロナウィルスの感染リスクを避けるため、昨年度同様、今年度も、オンライン・電話・手紙を活用した住民との交流が主な活動となったが、3月11日前後には、現地とのオンライン交流準備や現地住民のみの慰霊式典の準備を目的として、本学教員1名、学生1名が岩手県赤崎町を訪問した。

現在、大船渡市では、防災集団移転、災害公営住宅移転、防潮堤建設などが終わり、復興道路も工事段階に入り、ハードの整備はほぼ終わりに近づいている。それに伴い、教育・福祉・医療の仕組みも徐々に正常に戻りつつあって、社会の基本的な枠組み、いわば「外形」は復興してきたように見える。しかし、津波によって失われた人の活力、町のコミュニティの力は、いまだ「戻ってきた」とはいいがたい。「復興疲れ」と言われて久しいが、漸減的な活力の低下が見て取れる。公民館活動の減少、地域自治会の弱体化、婦人会などの地縁組織の解体、人口減少による学校の統廃合、より現象的には地域祭りや各種地域行事の不開催などがある。それに拍車をかけているのが新型コロナウイルスである。高齢者の人口割合が高いこの地区では、外部との接触のみならず住民間の交流も自制されている。多くの地域活動が現在は中止されている。復興の中心メンバーは「地域の力が失われた。これからどうなることか…」と肩を落とす。

新型コロナウイルス禍がいつ落ち着くのかはまだわからないが、さまざまな地域活動が再始動される際に住民の人たちの力が再び沸き起こるべく、サポートできる体制を整えておきたい。また、このボランティアプログラムは、本学ヒューマン・コミュニティ創成研究センターおよび都市安全研究センターの運営基金及び神戸大学基金によって支えられているが、稲原美苗准教授、津田英二教授、朴木佳緒留本学名誉教授らの科研、および、本大学院院生人間発達専攻博士課程後期院生（長田真）の心理学会での奨励研究にも支えられている。

（人間発達専攻 松岡広路）

10. 附属施設

10.1. 発達支援インスティテュート

10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会

本委員会は青木茂樹発達支援インスティテュート長（研究科長）、松岡ヒューマン・コミュニティ創成研究センター長、伊藤俊樹心理教育相談室長、源利文サイエンスショップ室長、国土将平教育連携推進室長、片桐恵子アクティブエイジング研究センター長、及び近藤徳彦先端融合研究環コーディネーターで構成される。また、春名正基事務部長、藤村さとみ総務係長も出席した。

令和3年度も本委員会を毎月1回のペースで開催し、研究科としての研究基盤の強化を図ると同時に、毎回各室・センターの活動報告を定例化し相互の連携を強めた。特に、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が続く中での各センター・室の取り組み方法に関して情報共有を継続的に行った。

なお、本委員会での検討事項は以下のとおりである。

	検討事項
第1回 (4月30日)	1. 2021年度人間発達環境学研究科年次計画について 2. 若手研究者キャリアアップ支援制度について 3. “Well-being シンポジウム” について
第2回 (5月28日)	1. インスティテュート研究会(“シンポジウム”)開催の可能性について 2. 「研究力の国際化加速事業」について
第3回 (6月25日)	1. インスティテュート研究会 (“セミナー”) 開催について 2. 「研究力の国際化加速事業」について
第4回 (8月3日)	1. インスティテュート研究会 (“セミナー”) 開催について 2. 2. 第4回神戸大学 SDGs フォーラムについて
第5回 (9月24日)	1. 「発達支援インスティテュート・シンポジウム2021」について 2. 学内共同利用施設等の見直しに係る年次報告書の提出について
第6回 (10月29日)	1. 「発達支援インスティテュート・シンポジウム2021」を終えて 2. 学内共同利用施設等の見直しに係る年次報告書の提出について
第7回 (11月26日)	1. 都市再生機構 (UR都市機構) 西日本支社兵庫エリア経営部と本研究科との協定について 2. (その他)部局年次計画等に関するヒアリングについて
第8回 (12月24日)	1. (その他)UR都市機構西日本支社兵庫エリア経営部と本研究科との協定調印式について
第9回 (1月28日)	1. 新型コロナの感染急拡大への対応について 2. (その他)JSPS 課題設定事業_学術知共創プログラムについて
第10回 (3月3日)	1. (その他)社会変革を先導する「異分野共創研究教育グローバル拠点」の形成について

(発達支援インスティテュート長 青木茂樹)

10.1.2. 心理教育相談室

心理教育相談室は、市民を対象とし、地域に開かれた相談室である。臨床心理学や心理療法に関する知見を生かして、地域の人々の心の健康に貢献することを目的としている。同時に、当相談室は、本研究科人間発達専攻臨床心理学コースが臨床心理士養成第I種指定校としての認可を維持するために必要な実習機関であり、コース所属の学生たちの臨床訓練の場として機能する目的を有している。平成12年度に総合人間科学研究科の附属施設として設立され、平成17年度からは同研究科附属発達支援インスティテュートの一部門に位置づけられた。心理教育上のさまざまな問題について、臨床心理学の立場から専門的な援助を提供する活動を行っている。年間を通じて開室し(年末年始、夏季の休室期間を除く)、カウンセリング、プレイ・セラピーなどの心理療法を中心に、必要に応じて心理テストを実施するなどの心理臨床実践を行っている。相談は有料である。相談内容は、幼児期・児童期に家庭や学校でみられる発達教育上の問題、青年期のアイデンティティ形成に絡む課題、成人期のメンタルヘルス、熟年期の家族関係や生き方に関することなど、多岐にわたっている。また、

平成 30 年度より本学研究科人間発達専攻博士課程前期課程こころ系講座臨床心理学コースにおいて、国家資格である公認心理師の養成が始まり、心理教育相談室はその実習の一部を引き受けている。心理教育相談室に所属する臨床相談員が実習指導者となり、公認心理師のカリキュラムに指定された実習時間（450 時間以上、そのうち心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援等 270 時間以上）の一端を担う役割をしている。なお、心理教育相談室における研修生の面接担当時間の確保等、今後公認心理師カリキュラムに対応するための対策が重要な課題の一つとなってくるものと思われる。

相談室の組織構成、ならびに相談システムについては以下のとおりである。心理教育相談室は、心理教育相談室運営委員会により管理運営される。委員会の構成員は、運営委員会委員長の相談室長をはじめ、副相談室長、ほか 2 名の委員からなる。また、本年度の相談室スタッフは、教員 6 名（臨床心理学コース担当、臨床心理士、公認心理師）、博士後期課程こころ系 A 講座院生 1 名、前期課程臨床心理学コース院生 24 名（M1：12 名、M2：12 名）、事務補佐員 1 名である。今年度の相談室の運営そのものは、去年とは異なりコロナそれ自体からは影響を受けず、4 月 1 日から現在に至るまで開室中である。相談室は、ウイルス感染対策として、体温の計測、消毒の徹底、相談室の椅子のソーシャルディスタンスの確保、窓を開けることによる換気、テーブルにアクリル板を立てて飛沫感染を防止するなどを行い、密をさけるために待合室を制限しケース数を減らしながら相談を行っている。

新規の相談申込みは、基本的に電話受付によって行われている。この受付業務も、臨床心理学コースの授業「臨床心理基礎実習」の一環となっており、修士課程 1 年（M1）の学生たちが相談室スタッフの一員として交代で臨んでいる。受付時間は、月曜日の午後 1 時～2 時 45 分、火曜日～金曜日の午後 1 時～6 時（いずれも祝日は除く）である（年末年始、夏季のお盆期間は閉室）。毎年 30 件弱の新規相談申込みがあり、受理面接、インテークカンファレンスを経て面接受理、担当者、継続面接の形式等が決定される。今年度はいったんコロナが終息しかけた 9 月から、新規相談件数が大幅に増えた。今までコロナで相談に来るのを躊躇していた相談者が、一気に申し込みをしたものと思われる。11 月には相談室スタッフのキャパシティを超える新規相談申し込みがあったため、3 月まで新規申し込みの受け入れを中断した。

年間相談件数は、平成 22 年度以降おおむね 800 から 1000 件程度で推移しているが、昨年度はコロナの影響のため大幅に減少したが、今年度は持ち直した。地域住民の心の健康に貢献する心理相談機関として、ならびに、臨床心理士養成に関わる実習機関として適切な活動している。なお、詳細な面接受付件数、面接受理数、面接回数等は年次報告資料編に掲載するとおりである。平成 22 年度より心理教育相談室は、年 1 回『神戸大学大学院発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要』を発刊しており、院生たちに心理臨床の実践研究をまとめる場を提供している。今年度第 12 号は、事例研究論文 3 篇、相談室活動報告、相談員・研修生活動報告から構成される。なお、掲載された 3 篇の事例研究論文の題目は以下の通りである。・博士課程前期課程 2 年 出口 美咲 自分一人で子育てや家庭の維持に奮闘する 40 代女性との面接 ・博士課程前期課程 2 年 石田 芽依 家族の中で翻弄され続けてきた 40 代女性との面接 ・博士課程前期課程 2 年 生田 邦紘 我が子が発達障害かもしれないと心配する 40 代の母親の心理面接～自分自身の不安の問題に気づきを得るまで～

また、平成 28 年度から、発達支援インスティテュート HC センターとの共同で「サテライト施設のびやかスペース・あーち」において、一般の子育て中の保護者を対象とした「心理教育相談室 子育て支援セミナー」を開催しているが、今年度はコロナの影響のため開催を取りやめた。

[研究活動]

昨年度、研究推進支援経費を頂いて行った研究「新型コロナウイルス・パンデミックによる人々の行動・生活環境変化の実態調査とポストコロナ社会での well-being 支援—こころのケア-遠隔（オンライン）による心理支援の実態—」を元にして、国際会議で以下の 2 つの発表を行った。

・ Kiyohara Maiko; Keiko Nogami; Toshiki Ito; Takahiro Yamane; Tomonori Adachi; Naoki Aizawa; Keigo Yoshida; Keiko Kawasaki ;Aya Taniguchi ‘The Reality of Remote Psychological Support during the COVID-19 Pandemic in Japan’, The 32th International Congress of Psychology (ICP) (Online), 2021,7,21

・ Keiko Nogami; Aya Taniguchi; Maiko Kiyohara; Takahiro Yamane; Tomonori Adachi; Toshiki Ito; Keigo Yoshida; Yoshiko Kawasaki; Naoki Aizawa ‘The COVID-19 Pandemic’s Impact on the Challenges and Advantages of Using Telepsychology in Japan’, The 32th international congress of psychology (ICP)(Online), 2021, 7, 22

また、「神戸大学大学院・人間発達環境学研究科 発達支援インスティテュート・シンポジウム 2021—ポストコロナ社会における研究・実践の展望—」にて、相談室長の伊藤が「オンラインカウンセリングの可能性と課題～ポストコロナ社会に向けて」と題してシンポジストとして発表を行った。

(心理教育相談室長 伊藤俊樹)

10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

(1) 多文化・子どもコミュニティ支援部門

1) 高等学校における ESD の推進

以下の要領にて、当該部門リーダー（喜屋武）が、高等学校の「総合的な探求の時間」における生徒の学習成果発表会に対する指導助言を行った。

- 【目的】(1) 学習成果を発表する機会とする。
(2) 専門家の指導助言を受け、改善につなげる。
(3) 大学の先生および学生との交流を深め、進路意識の向上を図る。

【日時】令和 4 年 3 月 7 日（月）123 時（9：05～12：25）※60 分授業

【対象】2 年生クラス代表の希望した班（4 班；1・3・7・8 組）

1 組 8 班「Flower loss」

3 組 6 班「ナハ国美ら肌プロジェクト！～あなたの肌を守ります～」

7 組 7 班「直球勝負今日収穫僕超得昆虫食 No 道德超究極もう中毒 So 注目！！」

8 組 1 班「おからはおたから」

【場所】情報研修室

【方法】スライド発表（各班 10 分） ※ZOOM によるオンライン発表

【会順】

時間	内容	備考
08:55～09:05	準備・説明	司会：教諭
09:05～09:15	校長挨拶および講師紹介	校長
09:15～10:05	発表①・②／質疑応答および指導助言	発表①1組8班／発表②3組6班
休憩		
10:15～11:05	発表③・④／質疑応答および指導助言	発表③7組7班／発表④8組1班
11:05～11:15	発表全体を通しての講評	講師：喜屋武享氏
休憩		
11:25～11:35	神戸大学の紹介	講師：喜屋武享氏
11:35～11:45	大学生活について	学生
11:45～11:55	交流会	
11:55～12:00	お礼の言葉	生徒代表
12:00～12:05	閉会の言葉	教頭
12:05～12:10	片付け	

2) 沖縄県 SDGs 教育連携ネットワークとの連携

以下の要領にて、当該部門のリーダー（喜屋武）が、沖縄県 SDGs 教育連携ネットワークシンポジウムのワークショップに講師として登壇した。

【目的】SDGs 教育は学校種や教科を横断して議論できる内容である。沖縄県 SDGs 推進本が設置され全県的な活動が本格化する中で、教育機関の連携強化を図るためのネットワーク構築を目指し、議論を深める。

【主催】国立大学法人琉球大学

【共催】沖縄県教育委員会，国際協力機構沖縄センター

【日時】2022年3月19日（土）9:00～13:30

【会場】琉球大学文系講義棟（オンライン同時配信）

※新型コロナウイルス感染症の状況によって完全オンラインに変更

登壇するワークショップの要領は以下の通りである。

【テーマ】高校における国際保健をエントリーポイントとした ESD の推進～探求型の学習を深めるための問いの育て方～

【目的】1) 国際保健をテーマに探求学習を深めていくための基礎的な理論（プロセス）を知る。

2) 学校現場で健康をテーマとした探求学習を実践していくための技術を身に着ける。

3) 保健分野における高大連携事業における琉球大学へのニーズ把握

【プログラム】

1. ワークショップ目的説明（琉球大学医学 教授 小林潤）

2. ワークショップ 1 ～国際保健をテーマとした ESD 探求型の学習のススメ～

- ① 新しい学習指導要領における「国際保健」と「総合的な探求の学習」
- ② グループワーク：「ラクの物語」から読み解く「問いの育て方」
- ③ 問いを立てるための極意の解説「5W1H と No.1 は誰だ？メソッド」

(信州大学教育学部 准教授友川幸)

3. ワークショップ 2 「問いを育てる」しかけ開発

グループワーク／教材化のための議論／最後の全体まとめ

グループ 1：ニュースの記事から (オンライン)

ファシリテーター 神戸大学人間発達環境学研究所 助教 喜屋武享

グループ 2：地元の問題から (会場)

ファシリテーター 琉球大学医学保健学科 講師 和氣則江

グループ 3：ディベートから (会場)

ファシリテーター JICA 沖縄嘱託専門家 竹内理恵

グループ 4：ロールプレイから (オンライン)

ファシリテーター 信州大学総合人文科学研究科 上野真理恵

4. 総合討論 高大連携におけるニーズ

(担当 喜屋武享)

(2) ジェンダー・コミュニティ支援部門

2021 年度から続いている新型コロナウイルスの感染拡大の影響によって、コミュニティの中で分断や格差の問題が深刻化している。そこで、異なる文化や問題をもって生きている人々が共生できるコミュニティの在り方を考え直す必要性が出てきた。このような課題に向き合い、共に考えようとする一つの試みが「対話実践」である。本部門は、一人一人が日常生活の中で抱えている多く問題を共に考える探究のコミュニティ(一般的に「哲学カフェ」と呼ばれている)を創成する試みをしてきた。それらの課題を「マジョリティ」の立場ではなく、むしろ「マイノリティ」の立場から捉え直そうとする臨床哲学的な実践を行い、多様な側面から一人一人の「語り」の地平を拓き、全ての支援には欠かせない「生きづらさ」の哲学を探究する。男女間の格差やセクシュアリティに関する差異、障害の有無、世代間や文化間違いを踏まえて「生きづらさ」について考える上で、社会の様々な場所で潜在的に問題となっていることを、社会の中で生きている人々との対話を通して掘り起こし、問いを作り、ゆっくりじっくり考えること、つまり、哲学プラクティスに取り組んでいる。例えば、ジェンダーやセクシュアリティの問題をはじめ、医療、介護、福祉、教育、テクノロジー、環境などについて、それらの問題に常に関わっている人々との対話実践を行う中で「何が問題であるのか」を吟味することを重視してきた。2021 年度中にジェンダー・コミュニティ支援部門が開催して 5 つの活動について報告する。

1. 「ジェンダーや身体の多様性について考えるメルロ＝ポンティ現象学研究会」

2021 年度、当該研究会を計 6 回 (5/22, 7/10, 9/11, 11/4, 1/9, 2/20) 開催した。コロナ禍の昨年度と同様、すべての研究会を Zoom によるオンライン開催となった。(オンラインで開催を続けて

いるため、一般の方々や関東からの参加者が新たに加わった。) メルロ＝ポンティ研究者である松葉祥一氏(同志社大学)を招き、主に、『ソルボンヌ講義』の中の「子どもの心理—社会学」や『意識と言語の獲得』の中の「大人から見た子ども」を輪読しながら、ジェンダー、子ども、母子関係、父子関係、看護、介護、生老病死、障害、身体、表現などをテーマに、参加者全員で対話をした。現象学的アプローチを用いた研究の意義についても議論を重ねた。本学の学生、院生、教員、他大学の院生や教員の方々、そして一般の方々も参加し、ジェンダーや現象学を中心に掘り下げて議論を続けてきた。現象学などの専門書の読解に並行して、子育て支援、医療、看護、介護、音楽、気功などの実践者や専門家たちと対話をする中で、それぞれの「生きられた経験」を考察した。さらに、私たちの経験、身体の動き方、感情などを詳細に記述する現象学的アプローチを行うことで、マイノリティ当事者や子どもの社会的・心理的な状態の理解と支援の在り方について考えた。

2. 「WACCA 女性やシングルマザーと子どもたちの居場所」(神戸市長田区)での哲学カフェ

例年、NPO 法人「女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ」が運営している WACCA の支援者(主にスタッフ・ボランティア)が対象の哲学カフェを隔月のペースで開催していたが、昨年度同様、2021 年度は一度も開催できなかった。先方に Zoom での哲学カフェの開催を勧めたが、パソコンやスマートフォンを所有していない人もいたため参加者の中に情報格差があり、哲学カフェの開催は難しいと判断した。しかしながら、当該 NPO 法人の代表理事である正井禮子氏とはインターネット上で情報交換を続けている。コロナ収束後の再開を目指して準備を続けている。

3. HC Café ～哲学対話の時間～ オンライン哲学カフェ

昨年度と同様の理由(新型コロナウイルス感染拡大の影響)で、2021 年度も神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設「のびやかスペースあーち」での対面哲学カフェを一度も開催できなかった。その代わりにオンラインでの哲学カフェを7回開催した。今年度も関西学院大学高等教育推進センターの三井規裕氏と一緒に実践を続けている。なお、本プロジェクトは、本学 GSP の研修型プログラム(国内フィールド学修)として学生を受け入れてきた(春募集5名、秋募集5名、計10名の学生を迎えた)。学生に主体的で開かれた学びの場を提供し、ジェンダーやマイノリティに関する問題を多角的に考える場を共に作り出すのと同時に、哲学カフェのファシリテーションスキルを習得できる学びの場としても機能している。本年度は、特に、対面での開催とは異なるオンラインの対話の場をデザインするために工夫した。

2021 年度は、哲学カフェを7回開催した。開催日、テーマ、参加人数を下記の表にまとめておく。

開催日	テーマ	参加人数(スタッフ)
2021年5月8日	異文化に触れるとはどういうことか?	14(7)
2021年6月26日	あなたにとっての伝統文化とは?	16(7)
2021年7月17日	幸せの定義とは?	17(7)
2021年10月9日	なぜ学校に行かないといけないのか?	9(2)
2021年11月20日	安全・安心って何なのか?	15(3)
2022年1月29日	ルッキズムとどのように向き合うのか?	19(7)
2022年3月20日	結婚という制度についてどう考えるか?	18(7)

HC Café のプロジェクトの哲学カフェは、2 の WACCA の哲学カフェとは異なり、事前登録をすれば、誰でも参加でき、日常生活の中にあふれている（普段あまり深く考えない）問いについて、立ち止まって考えてみようという試みであり、異世代間交流をしながらジェンダーを考えるグローバルな視野をもてるように市民の学びの場を構築している。11 月 20 日の回では、本研究科の村山留美子氏を迎えて、環境と健康に関するリスクの専門家の立場からお話いただき、哲学カフェの在り方の幅を広げた。本年度も哲学カフェをオンラインで開催したおかげで、参加者の年齢・職業・地域などの層が広がった。

4 オンライン・シンポジウム：定時制高等学校の役割と可能性～哲学プラクティスの視点から～
2021 年 8 月 14 日にオンライン・シンポジウム「定時制高等学校の役割と可能性～哲学プラクティスの視点から～」を開催した（主催：科研費、共催：本部門）。登壇者に、西山正三氏（宮崎県立宮崎東高等学校）、寺澤佐世氏（三重県立名張高等学校）、山方元氏（愛知県立豊川工科高等学校）、赤井郁夫氏（一般社団法人 office ひと房の葡萄）の 4 名が発表した。梶谷真司氏（東京大学大学院総合文化研究科）、中川雅道氏（神戸大学附属中等教育学校）、村瀬智之氏（東京工業高等専門学校）が司会を務め、参加者が質問しやすい環境を創り出した。

昨年度のオンライン・シンポジウム「不登校と哲学プラクティス」に引き続き、本シンポジウムでは、定時制高等学校での学びに焦点を当てて、普通学校に行きにくくなり、学校に関わりにくい子どもたちと対話的教育実践との関係性について考えた。定時制高等学校や工業高等学校、そして学校外での居場所づくりを実践している教員や支援者たちが、それぞれの子ども（生徒）たちとの関わりや経験について語った。その後、参加者たちと共に考える対話の時間を持った。このシンポジウムに 78 名が事前登録し、当日の参加者は 71 名だった。

5 神戸市職員や大学教員、そして支援団体などとの LGBTQ+当事者のための政策研究ネットワーク

2021 年度、神戸市役所に勤務している「職員による都市政策研究プログラム研究メンバー：グループ 2」から依頼があり、「誰もが住みやすい社会的包摂都市の実現～LGBTQ+の支援施策の検討を通して～」というプロジェクトの研究協力者となった。神戸大学でジェンダー問題を研究している教員 3 名（青山薫氏、ロニー・アレキサンダー氏、工藤晴子氏）と一緒にプロジェクトに参加している。神戸市が誰にとっても住みやすい多様性のある包摂都市となるために、市職員の有志や NPO 法人の支援者、ジェンダー学の研究者などがネットワークを形成し、LGBTQ+当事者やその家族のための施策に着目し、既存のパートナーシップ制度の検討を通し、神戸市において LGBTQ+市民も包括し得る新しいパートナーシップ制度の提案を行うことを目的としている。来年度、本ネットワークでの哲学カフェの導入を考えており、ジェンダー問題を市民一人一人の問題として取り上げて、哲学対話の場を提供する企画案が出された。本ネットワークにおけるさらなる進展が期待できる。

（担当 稲原美苗）

(3) 社会教育・サービ斯拉ーニング支援部門

2017 年 4 月のヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、HC センター）の組織変更によって、新たに「社会教育・サービ斯拉ーニング支援部門」が創設され、4 年になる。この部門は、文

字通り、学校教育以外のノンフォーマルな教育（社会教育）の教育原理・方法の探究と、ノンフォーマル教育だからこそつ開拓性・斬新性・柔軟性・実際性を学校教育と連動させる「サービスマーケティング」の在り方の探究を、実践研究のターゲットにおく部門である。

一般に、社会教育は、学校教育以外の組織的な教育活動と理解されるが、本部門では、制度化されていない幅広い教育的な活動（インフォーマル・エデュケーション）を視野に入れ、「いかに新しい教育が立ち現れるのか？」を問いとする実践的な研究も課題とする。すなわち、社会的活動のなかで「教育らしきもの＝学び」が立ち現れ、ノンフォーマル教育として輪郭をもち、その過程で制度化された教育（フォーマル教育）としての学校教育と連動して教育的効果が高まっていく、という教育生成の流れを、全体構図とする。

それゆえ、「ボランティア」「エンパワメント」「インクルージョン」「アンラーニング」「対話」「共生」「ネットワーキング」「ソーシャルアクション」「持続可能な開発」など、他の部門で注視されるキーワードは、本部門においても重要となる。教育生成の全体の流れを意識したうえで、多様な領域を視野にいれながら、各キーワードを基盤とした実践・研究の連環的様態を探究することが、本部門の使命である。

現在は、こうした全体構図を否が応でも意識することになる「ESD(持続可能な開発のための教育)」をターゲットに、HCセンターの他部門との連携・協力のなかで研究的実践を展開している。ESDは、持続可能な開発という理想を実現するうえで生起する、さまざまな社会的課題間の葛藤・矛盾を教材とする新しい教育である。「ESDがいかに立ち現れるか」を問いとしてモデル実践を組み立て、ESD実践の理論化を図ることを目標としている。

具体的には、以下の5つの実践フィールドをもつ。

1. ESD ネットワーキング支援事業

国連大学認証組織（RCE 兵庫 - 神戸：「ESD 推進ネットひょうご神戸」）の組織化・企画創出の過程におけるアクションリサーチ（参与観察・関与観察など）を主とする。「自然共生地域支援部門」「インクルーシヴ社会支援部門」「国際開発実践支援部門」などの HC センターの他の部門及び発達支援インスティテュート「サイエンスショップ」と連携しつつ、環境系・福祉系・国際開発系・まちづくり系などの多様な市民・企業・行政組織が互いの活動ベクトルを接近・交差させる過程や、協働的活動のコーディネートの在り方、及び、その過程での学習プロセスの特徴を解明する。

新型コロナウイルスの影響を受け、本年度の RCE の主な活動は、オンライン方式の定例会議、第 6 回 ESD 実践研究集会の実施※、ウェビナー方式の各種国際会議への参加に終わったが、2022 年に向けての行動指針・計画を策定した。

※「(5) 自然共生地域支援部門」参照

2. ESD プラットフォーム WILL 支援事業

HC センターが主催・支援する高校生・大学・若手社会人を中心とする ESD 関連事業（「ESD ボランティアぼらぼん」「大船渡 ESD プロジェクト」など）の人的・物的資源の流動化を促進する時空間づくり、すなわち、プラットフォーム創成の過程を企図する事業である。「大船渡 ESD プ

プロジェクト」は、その支援母体が「ボランティア社会・学習支援部門」から「社会保障・ソーシャルアクション支援部門」へと移り、「ESD 学び隊」は、「自然共生地域支援部門」が主たる支援母体となっているが※、これらと本部門が所管する「ESD ボランティアぼらぼん」が、実質的に一元的な動きするようになることを企図する事業である。2017 年度末に 3 部門の間で協議され、今年度より本格的に実施の運びとなった。こうしたプラットフォーム化のなかで、あるいは、その結果として、学生などの若者だけではなく関係者すべてに ESD が立ち現れることが期待される。このプロセスから ESD 実践に必要な条件を輪郭化しようとするものである。

※「(5) 自然共生地域支援部門」「(7) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門」参照。

3. ESD フォーマル教育推進事業（フォーマル教育×ノンフォーマル教育）

神戸大学のフォーマルカリキュラムとして 2006 年に設立された ESD サブコースのカリキュラム・授業内容を実験的にデザインすることを主とするアクションリサーチである。

第 1 学年に配当される「ESD 基礎」「ESD ボランティア論」は、上記のノンフォーマルな ESD 事業との連動の中でデザインされている。ESD が立ち現れるサービ斯拉ーニングの在り方、および、その教育が ESD を推進する実践者育成に及ぼす効果を、比較的自由度の高い高等教育において探究することをめざしている。ESD 総合コーディネータの協力の元、学習者の学びのプロセスをデータ化した。

4. ESD 社会教育・生涯学習支援促進事業

これまでも神戸市・堺市・岸和田市などの生涯学習に関する施策策定に ESD を位置づける活動を行ってきた。あるいは、兵庫県嬉野台生涯教育センター生涯大学やいなみ野学園（高齢者大学校）のカリキュラムの変更のなかで ESD を位置づけるために指導助言を行ってきた。今年度は、特に、尼崎市生涯学習審議会委員として、ESD・社会教育事業の推進に関する計画づくりに関与した。

以上の 5 つの活動を通して、ESD としての教育の形成過程の研究、すなわち、教育哲学論、学習論、主体論、方法論の各視座から ESD とは何かを探究する研究を行っている。

（担当 松岡広路）

(4) インクルーシヴ社会支援部門

A. 2005 年度よりヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設として開設している「のびやかスペースあーち」において、「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」の実践を継続して行った。今年度は新型コロナ感染拡大を防ぐために、時間制限と人数制限を行なう中で実践を工夫した。

「よる・あーち」は、2006 年度より実施している「あーち居場所づくり」を基盤として、2016 年秋から開始したプログラムである。神戸市の「子どもの居場所づくり事業」の助成を受け、灘区連合婦人会との連携で、学習支援、子ども食堂、遊び、交流の 4 つの活動を柱とした複合的な場づくりである。さまざまな困難（主に社会性の問題、学力の問題、障害の問題など）をもつ子どもや家庭の支援に関心の中心に置き、その他にも障害のある青年や成人など、多様な課題を抱える人たちが、市民

や学生と相互に学び合う状況を創出している。今年度は時間短縮と人数制限を課したため、ターゲットになる子どもや青年のみに特化したケアを行なった。また、限定した機能の代替として昨年度開始したオンラインでの「居場所づくり」を9月まで行なった。毎週金曜日の夜約一時間、子ども、青年、学生、市民がオンライン会議システムで交流し、グループに分かれてコミュニケーションを持続させた。

B. 文部科学省受託により、知的障害者に大学教育を開く実践研究を行った。10月～2月に特別の課程として週3日の授業を展開し、知的障害者13名を聴講生として受け入れた。その成果に基づき報告書『神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム』を編集・刊行した。また、同じ文部科学省受託により、兵庫県全域で障害者の生涯学習推進のための情報収集や整理・発信、ネットワーク形成を行い、11月5日には、文部科学省、兵庫県教育委員会との共催で、近畿ブロック「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」を実施し、本部機能を担った。

C 学内の交流ルームに2008年度に設置されたカフェ・アゴラの運営に携わり、障害者雇用及び実習のモデル開発を継続した。9月には、附属特別支援学校の美術の授業を題材としたギャラリー展示「RAiN RAiN」を、博物館学芸員課程の学内実習として実施した。

D 交流協定を締結している韓国ナザレ大学とのオンライン交流を継続し、12月18日にWEB日韓交流セミナー「障害のある芸術家の活動と生活」を実施した。

E 障害児の放課後保障の観点から2008年度から開始したインクルーシブな学童保育の支援を継続して行った。

F 知的障害者のセルフ・アドボカシーグループの支援として、新聞編集支援を継続的に実施した。ほぼ毎月1回の編集活動を支援し、12月に第24号「フレンド新聞」を発行した。

(担当 津田英二)

(5) 自然共生地域支援部門

本部門では、自然と共生した地域社会の実現を目的として農村部等をフィールドにアクションリサーチ型の研究を行っている。本年度は主に以下の4つの内容を中心に研究・実践に取り組んだ。

1) 地縁型・テーマ型コミュニティを基盤とした獣害対策の推進

・獣がい対策を進める地縁・テーマ型コミュニティの創成支援

野生動物による農作物および生活被害は「獣害問題」と呼ばれ、全国各地で様々な対策がなされている。本部門では、NPO 法人里地里山問題研究所と連携し、野生動物を「害」と考えず、住民にとってプラスの存在に変えていく対策(=獣がい対策)を全国に発信している。兵庫県丹波篠山市畑地区では、人里に慣れた野生動物と地域住民との棲み分けを目標に、放棄柿を早期収穫し野生動物の集落への出没を防ぐ取り組みが8年前から行われている(さく×はた合戦)。この取り組みは都市農村交流や、地域住民の獣害対策に関する情報共有の場としても活用されており、今年度も2021年10月17日に実施し、その運営を支援した。さらに、当該地区では、地域と外部人材との関わりを強め、地域の人材不足を解消する可能性を模索するため新たに「さく×はた合戦」を展開している。これは、野生動物の集落への出没を防ぐ集落柵の点検作業に地域外人材が参加して行うもので、2021年3月6日に実施した。

・高校生らによる獣害問題への理解促進と実践者の育成

昨年度に引き続き丹波篠山市にある県立東雲高等学校および鳳鳴高等学校の高校生を交えて「獣がい対策」実践塾を実施し、シカ・イノシシ・サルの対策それぞれについて学び、高校生らが獣害問題に関わる仕組みを考案した。6/20, 7/25, 8/21, 9/26, 10/24, 12/19 の6回の研修会を経て、2022/1/10に開催された第4回獣がいフォーラムで成果を発表した。参加者の学年は1年～2年生で、担当の先生方からも好評のプログラムであった。

また、兵庫県立東雲高等学校では、丹波篠山市内の野生動物とその問題に関する授業とワークショップを行った。

・邑久光明園獣害対策支援

岡山県瀬戸内市にあるハンセン病療養所「邑久光明園」において、イノシシやシカの出没が増加し、入居者の方々の穏やかで安全な暮らしが阻害されている。そこで、NPO 法人里地里山問題研究所及びESD プラットフォーム WILL と連携し、ハンセン病療養所の獣害軽減のための対策支援に取り組み始めた。今年度は、長期的な対策計画を立案し施設側の承諾を得た。

2) コロナ禍の災害ボランティアのESDとしての可能性の探究

令和2年7月4日に発生した九州南部を中心とした豪雨により、熊本県等の多くの自治体が被災した。特に、熊本県の球磨川流域は被害が甚大で、球磨川とともに暮してきた方々の多くが今後の生活再興を余儀なくされた。この災害はコロナ禍に発生した最初の災害ということもあり、本部門は、発災時からの現地視察を通してコロナ禍における災害時の県外からのボランティアの可能性を探る機会を得た。今年度も地域と密接に関わり復旧復興を行う NPO 法人球磨川アドベンチャーズやつしろを訪問し、地域の復興プロセスを視察した。

3) 自然を生かした子育て・子育て拠点施設の運営支援

兵庫県丹波篠山市の「おとわの森子育てママフィールド～petit prix (以下、プティプリ)」は、旧味間認定こども園おとわ園舎を活用して平成28年7月に設立された地域子育て支援施設である。当施設の周囲には、子どもたちのために地域住民がボランティアに整備を行ってきた森林がある。こうした自然を生かした子育て拠点としての可能性も期待されている。そこで、自然環境を生かした子育て・子育ての環境づくりのための学びの場として「ツキイチ勉強会」を4年前からコーディネートしている。勉強会の目的は1)プティプリの新規利用者層の開拓、2)子育て中の親の興味関心を広げ、意識した学びの場づくりである。テーマや講師についてはスタッフの意見を聞きながら選定しているが、リピーターとなる参加者がみられるほか、テーマによっては新規の参加もあり、この勉強会を通じた子育て世代を対象とした学びの場が継続できている。

■ 2021年度ツキイチ勉強会のラインナップ

日	タイトル	講師	参加人数
4/23	SDGs ってナニ？ パート1	清野未恵子 (神戸大学人間発達環境学研究科)	2名+スタッフ

5/21	SDGs ってナニ？パート2	清野未恵子（神戸大学人間発達環境学研究科）	3名＋スタッフ
6/11	身近な性について考えよう	稲原美苗（神戸大学人間発達環境学研究科）	5名＋スタッフ
7/9	「アサーション」ってなあに？	高橋綾（大阪大学 CO デザインセンター特任講師）	4名＋スタッフ
9/14	幼児期の発達の特徴～自己中心性に焦点をあてて～	伊藤篤（甲南女子大学）	5名＋スタッフ
10/4	くらべっこどんぐり	山中亜季子（ちゃめっこはくぶつかん）	6名＋スタッフ
11/27	ミュージック・セラピー体験	岡崎香奈（神戸大学人間発達環境学研究科）	7名＋スタッフ
12/16	家庭における食育講座	藤岡敏夫（里山旬菜料理ささらい）	4名＋スタッフ
1/28	篠山における防災講座	中村伸一郎（みんなで減災し隊！）	3名＋スタッフ
3/23	子どもの生活リズムと発育発達	喜屋武亨（神戸大学人間発達環境学研究科）	7名＋スタッフ

4) フリースクールにおける ESD 推進手法の検討

神戸市西区の公立フリースクールである神出学園は、平成 29 年 3 月にユネスコスクールとして認定され、ESD を推進する様々な取り組みを行っている。令和 3 年度は、施設内に生息する野生動物の分布調査に関する指導助言を行った。学園全体で行った ESD 活動報告会では、このプロジェクトを通じて、想像していたものよりも多くの生き物が学園内に生息していることへの驚きや、保護という意味を改めて理解したといった感想を得た。

5) 市町村の環境政策立案支援

丹波篠山市の農都環境アドバイザーとして環境基本計画の実行計画策定にかかるワークショップの運営を支援したほか、加古川市の環境審議会での ESD の観点から、環境政策づくりへの助言をおこなった。

6) 市民を対象とした ESD や SDGs の研修会支援

丹波篠山市の市民センターまつりに参加する住民向けに、ESD および SDGs への理解促進のための研修会を実施した。コロナの感染拡大により市民センターまつりは実施できなかったが、参加予定の団体全てが参加し、SDGs の中で最も関連のある Goal をブースに掲示したり、SDGs に関連したブース配置などが検討され、研修会は、市民が主体となった ESD 実践につながった。

（担当 清野未恵子）

(6)ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

1. 地域におけるヘルスプロモーション・健康行動支援活動

① 健康あーち 子育て支援を通じたヘルスプロモーション・健康行動支援事業を行った。

【目的】乳幼児の保護者を対象とし、食生活を中心に健康について話し合いを行い、話し合いの中から課題を見つけたり、悩みの解決方法を考えたりしながら、子どもとその保護者の健康増進を目ざすことを目的として事業を展開した。

【場所】神戸市灘区民ホール 3 階 のびやかスペースあーち

Zoom および SNS を活用したリモート事業

神戸大学大学院人間発達環境学研究科実習観察園

【開催日とテーマ】 下記のテーマで全 10 回の健康あーちを開催した。

回 開催日

- 1 5月15日 オリエンテーション
- 2 6月18日 農園体験 実習観察園
- 3 6月19日 「子どもの気になる社会性の発達 異性への関心!？」
- 4 7月17日 お弁当の話:「3・1・2 弁当法」
- 5 8月27日 夏野菜を育てる(収穫) 実習観察園
- 6 9月24日 サツマイモの収穫体験/野菜やカンキツの手入れ体験 実習観察園
- 7 10月16日 野菜について
- 8 12月24日 カンキツの収穫体験 実習観察園
- 9 2月19日 Well-being 善き生 しあわせについて
- 10 3月19日 まとめ

プログラムは、企画会議で保護者およびスタッフと話し合い前年度の振り返りを経て作成、実施した。ひきつづき COVID-19 の影響で開催が極めて困難な状況であったが、保護者の協力を得ることが出来、ICT を活用しリモートでの健康あーちを実施した。10 回の実施のうち 6 回は Zoom による開催であり、4 回は実習観察園での開催であった。また LINE による交流も活発化しており、Zoom や実習観察園での取り組み後には、それぞれの感想を述べたり、実習観察園で収穫したものを実際に調理したものについて、写真でアップしたりと情報交換が活発に行われていた。

また永野和美氏(神戸大学附属中等教育校)、黒川通典氏(摂南大学)、黒川浩美氏(大阪青山大学)、黒田久恵氏(甲子園大学)木田薫氏(堺市/管理栄養士・栄養教諭)からも専門的な支援を得ることができた。結果的に、のべ 94 名の参加があった。

② 健康ビッグデータを活用した県民の健康づくり事業: レセプト情報・特定健診等の情報データベース(National Data Base: NDB)を活用し、兵庫県民の特定健診データを分析、視覚化するシステム「ひょうご健康づくり支援システム」が開発された。そして NDB に格納されていた平成 25 年~27 年分の県民の特定健診データを、集計・分析した資料(地域カルテ)が作成、公表されている。このシステムにより、兵庫県に住所地情報を有する医療保険加入者の特定健診の結果を地域別に把握する

ことが可能となった。この分析結果や他の調査結果を活用することで、兵庫県内の地域差・地域特性を検討し、地域の実情に応じた啓発媒体や保健指導用プログラムを作成し、保険者である市町が国民健康保険被保険者の健康づくりを支援することをめざす取り組みを実施。本年度はNDBを分析し市町の特徴を検討するとともに、質問紙調査を実施し健康教育の実践状況について把握した。

③ 特定健診・保健指導者向け研修プログラムの開発と実践：兵庫県の特定保健指導の指導者や関係者を対象とし、ヘルスプロモーション・行動変容に関わる理論や実践に関して、動画による研修を行った。（令和3年10月11日～令和4年2月28日：視聴可能期間）

2. 学校におけるヘルスプロモーション・健康行動支援活動

① 神戸大学附属初等教育学校の教員の実践研究のための指導助言を行った。

（10月6日、10月20日、11月10日、11月24日、1月16日、1月26日 遠隔5回、対面1回 計6回）

3. 国際的な事業

① 生活習慣改善のための国際プログラムの開発を旨とした教育研究活動：ELTE大学の教員による授業 “Introduction to motivational interviewing” を企画実施。（4月17日、29日）

② 心の健康のための国際プログラムの開発を旨とした研究活動：心の支援にあたる支援者を対象とした心の健康に関する国際調査を行うために、オーストリアに研究拠点を築き、海外での研究を進めている。

③ オーストリア（グラーツ大学）の教員を招聘し、グローバル・イシューについての講演を企画実施した。（7月16日）

（担当 加藤佳子）

(7) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門

◇東日本大震災津波跡地・高台移転先におけるまちづくり支援

2012年11月以後、継続的に、学生・院生及び教職員が赤崎地区公民館（2012年5月1日に、本研究科と連携協定と締結）に赴き、支援活動をしてきた。本年度も新型コロナウイルスの流行により、イベントの開催支援や大人数での現地訪問は控えたが、今後10年のまちづくりや復興のあり方について、研究活動等を行った。

◇社会保障裁判等における市民支援

2013年の国による生活保護基準引き下げの違憲性を問う「新生存権裁判・いのちのとりで全国裁判アクション」や、神戸市・西宮市が阪神・淡路大震災被災者に対し、借上復興公営住宅からの転居を求めて訴訟を起こしている問題について、市民・被災者の人権保障に寄与するための支援を行った。

（担当 井口克郎）

10.1.4. のびやかスペースあーち

1. 沿革

のびやかスペースあーち（以下「あーち」）は、本研究科のヒューマン・コミュニティ創成研究セ

ンターの附属サテライト施設である。開設当初より「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」の拠点をめし、様々な取組（プログラム等の提供）をおこなうとともに、実践的研究の場や学生・院生の実践の場（研究フィールド）を提供してきた。

- ・2005（平成17）年9月、神戸市との連携の下、灘区役所旧庁舎（灘消防署2階）において運営開始
- ・2007（平成19）年より、地域子育て支援拠点事業を神戸市より委託（現在に至る）
- ・2007（平成19）年度「ユニバーサルまちづくり賞」（兵庫県より）
- ・2009（平成21）年度「市民福祉奨励賞〈児童福祉〉」（神戸市より）
- ・2010（平成22）年度「学長表彰」（神戸大学より）
- ・2015（平成27）年度「ひょうご子育て応援賞」（兵庫県より）
- ・2016（平成28）年10月、神戸市から委託された「子どもの居場所づくり事業」を灘区民ホールにて先行実施
- ・2017（平成29）年4月、灘区民ホール（3階）に移転して運営継続

2. 取り組みの概要

「あーち」の中核事業は、神戸市から委託されている「A. 地域子育て支援拠点事業」と「B. 子どもの居場所づくり事業（学習支援・子ども食堂）」である。なお、「子ども食堂」は「灘区連合婦人会」との協働事業である。

A. 地域子育て支援拠点事業

本事業は、地域に暮らす子育て中の親子の交流促進や育児相談等を通して、子育ての孤立感や負担感などの低減・解消を図るなど、地域の子育て家庭を支える国の補助金事業（第2社会福祉事業）である。2007年度の交付開始当初は、全国で約4,400箇所、2020年度現在、全国で7,735箇所となっている。「あーち」では本事業の委託を受け、基本4事業（①交流の場の提供・交流促進 ②子育てに関する相談・援助 ③地域の子育て関連情報提供 ④子育て・子育て支援に関する講習等）を週5日（1日6時間）実施している。

B. 子どもの居場所づくり事業

本事業の背景には「子どもの貧困対策の推進に関する法律（2003年成立）」があり、貧困対策のうちの一つとして位置づく国事業である。各地域の実情に応じた多様な取り組みが可能だが、「子ども食堂」「学習支援」が主流である。「あーち」では、それまでの「居場所づくり」実践を発展させて「子どもの居場所づくり事業」を取り込み「よる・あーち」とし、週1回（金曜日17:00~21:00）実施している。地域の未就学児・小学生・中学生・高校生や青年、保護者、市民ボランティア、大学生・院生（他大学含む）が参加する。子ども・青年たちは学習支援を受けたり（講師は市民ボランティア・大学生らが担当）、ボランティア・保護者と夕食を共にしたり（調理は「灘区連合婦人会」の登録会員50名がシフト制で担当）、遊びのプログラムを楽しんだりする。

3. 2021年度の取り組みの概要

【新型コロナウイルス感染拡大の影響と対策】

本年度も新型コロナウイルスの感染拡大により、兵庫県に「緊急事態宣言」「まん延防止等重点措

置」が幾度か発出された。これを受けて、以下のような対策を取った。

- ・3回目の緊急事態宣言中（4/25～6/20）は、神戸市からの要請により4月27日～5月11日を休館
- ・その後は神戸市からの要請で土曜日のみを閉館（5月15日～6月19日）
- ・それ以降は多様な制限を設けて運営を継続（利用時間・利用者数・利用方法・プログラムの一部休止やプログラム内での制限など）
- ・休館中は、館内の清掃並びにおもちゃや備品の消毒を徹底し、事務作業の整理と効率化を図る
- ・開館時は、常時の換気や午前・午後の室内の清掃・消毒、利用者が使用した備品・おもちゃの洗浄・消毒を徹底
- ・スタッフの健康管理は当然のことながら、利用者にもマスク着用（小学生以上）、「健康おたずね表」への記載、手洗いなどを依頼（利用者は極めて協力的でありトラブル等はなし）
- ・「よる・あーち」と「健康あーち（後述）」についてはオンラインでも実施・運営

【2021年度における主な利用・運営状況】

<年間利用者数>

コロナ禍により上記の多様な制約があったため、「あーち」の年間利用者数（表1参照）は、新型コロナウイルス感染拡大前の各年度利用者数に比べて大幅に減少し、2月末現在で、4,252人（延べ）である。内訳は子ども1,922人・おとな2,330人であり、年間の利用者数を開館日数の207日で割ると1日平均、約21人の利用となる。

<プログラム開催状況>

本年度のプログラム開催状況を集計（2月末現在）すると、教員・一般ボランティアが主催するプログラムの実施回数（延べ数）は88回、大学の正規教育プログラム（GSP）の実施回数（延べ数）は40回である。

<学部生・院生による研究利用>

学部生・院生が卒業研究・修士研究の場として「あーち」を活用した実績については、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの教員のゼミ生に限っても、これまで、卒業論文9編・修士論文14編・博士論文3編が提出されている（2006～2019年度）。

<授業・実習の場としての活用>

例年、神戸大学国際人間科学部における博物館学内実習（学芸員資格取得）を受け入れているが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止とした。また、2012年より園田学園女子大学人間健康学部人間看護学科の4年次生（経験値統合実習）、3年次生（育成連携支援実習）などを継続的に受け入れていたが、昨年度同様に本年度も新型コロナウイルス感染拡大のため休止となっている。

<運営に必要な会議等>

- ・「あーち 連絡協議会（隔月に1回）」

本会議は、大学の「のびやかスペースあーち運営委員会」とは別に、日常的に「あーち」のプログラム等にかかわっているメンバーが参加する。本年度は教員・スタッフのみで開催した。

- ・「あーち通信編集会議（毎月1回）」

プログラム予定表、学生やスタッフによる絵本の紹介、利用者が担当する取材記事・コラム等を掲

載する月刊広報誌を編集するための会議である。本年度も毎月1回開催した。この通信は、利用者に配布されるだけでなく、灘区役所、灘区社会福祉協議会、灘区内各児童館、連携先の産婦人科クリニックにも配布・設置している。また、「あーち」のホームページ上で順次掲載されている。なお、2022年3月号が200号となる。

表1 年間および月別利用者数：延べ数（2021年4月～2022年2月）

月	開館日数	ふらっと		こらぼ+ゆーす		Web（リモート）		一日の利用者数		
		子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	合計
4	18	167	153	9	45	7	56	183	254	437
5	15	34	30	0	0	2	44	36	74	108
6	20	66	66	0	0	2	41	68	107	175
7	17	155	151	12	36	6	56	173	243	416
8	18	80	74	4	3	4	28	88	105	193
9	21	91	81	4	7	1	36	96	124	220
10	22	227	211	18	53	3	42	248	306	554
11	19	313	284	20	52	6	37	339	373	712
12	19	295	267	19	63	0	0	314	330	644
1	20	280	252	15	56	0	0	295	308	603
2	18	76	74	6	32	0	0	82	106	188
合計	207	1784	1643	107	347	31	340	1922	2330	4252

4. 2021年度の取り組みの詳細（教員・職員が中心に進めている主な活動を中心に）

【ドロップイン・サービス（神戸市委託「地域子育て支援拠点事業」）】

地域子育て支援拠点事業を神戸市との連携によって引き続き実施した。乳幼児とその保護者が安心して多様な人との交流を深めながら、社会的なつながりや活動に関わることができる場である。通常は1日6時間内に利用の区切りなどはないが、コロナ禍により昨年度から引き続き、室内清掃、備品・おもちゃの洗浄・消毒を徹底するため、午前2時間・午後2時間に利用を区切る運営を実施した。また、感染状況が悪化している時期は、1日を4枠に設定し、1枠1家族の利用に限定した。「あーち」において最も利用者が多いサービスであるとともに、さまざまなプログラムの拠点としても機能している。

【子育て相談事業（神戸市委託「地域子育て支援拠点事業」）】

上記ドロップインの場に、助産師・保健師・保育士などの資格を持つ相談員を配置し、保護者からの相談に応じた。灘区のまちづくり課から派遣されている地域活動支援コーディネーター（週1回）も子育て相談に応じた。相談内容として多かったものは、子どもの生活に関する相談、発育・発達に関する相談、離乳食・幼児食に関する相談、育児不安に関する相談、地域資源に関する相談であった（※この相談内容に関する分類・集計結果は毎年神戸市に報告している）。

【よる・あーちおよびWeb あーち】

学習支援，子ども食堂，居場所づくりなどを並行して実施する複合プログラムであり，毎週1回，夕方から夜にかけて実施している。多様な年齢や属性の人たちが大勢集まり，相互に学び合う場を形成している。本年度は，対面実施を休止した時期があり，再開後には時間を短縮して開催した。また，プログラム実施時間帯に参加が困難な利用者のために昨年度より開設した「Web あーち」は，今年度も併せて実施した。院生・学部生・卒業生も参加して，子どもや青年，保護者，市民ボランティアらと交流を深めている。

<学習支援（神戸市委託「神戸市子どもの居場所づくり事業」）>

神戸市の委託を受け，毎週1回，「よる・あーち」プログラムの一環として実施している。学習面，社会性の面で課題をもつ児童・生徒・青年が参加している。支援者は学生を中心に構成され，学習支援を契機とした支援者の学びに焦点を置いた取り組みを行っている。地域住民や保護者も支援に加わり，参加型研究のフィールドにもなっている。

<子ども食堂（神戸市委託「神戸市子どもの居場所づくり事業」）>

神戸市の委託を受け，灘区連合婦人会と連携して実施している。毎週1回，「よる・あーち」プログラムの一環として位置づく。本年度は感染予防の観点から休止した時期もあったが，再開後は必要な家庭に弁当を持ち帰ってもらうよう工夫した。

<居場所づくり>

毎週1回，「よる・あーち」プログラムの一環として実施している多様な人びとの間の関わりを促進する実践である。障害のある子どもの十分な参加をテーマとして活動を構成し，さまざまな年齢や属性の人たちが遊びや会話を通してエンパワーした。「都市型中間施設」概念に基づくモデル開発実践プログラムとしても位置づけている。

【地域子育て応援プラザ灘・灘区公立保育所との協働実践】

灘区内の公立の子育て支援関係施設と連携した「あーち」への保育士派遣事業（見守り，相談，親子遊びの実施）を実施した。

【地域の医療機関との協働実践】

例年，灘区歯科医師会と連携し，近隣の歯科医師が「あーち」に来館し，子育て中の親子が歯の相談ができるプログラムである。本年度は新型コロナ感染拡大の影響を受け，開催されなかった。しかし，他市で歯科医院を開業している歯学博士が，「だいじなお口のはなし」というテーマで「あーち通信」の連載コラムを担当してくれた。また，近隣の産婦人科の医師や助産師が，日常的に「あーち」の広報を行うことで，生まれてまもない乳児がいる家庭の利用促進を図った。

【健康あーち（食育プログラム）】

子育て中の親子の疑問や悩みに対応しながら，健康のあり方を考えるセミナーと交流会である。参加者である親たちが主体となり運営できるよう，教員や学生らが支援している。本年度は，対面で4回実施（うち4回は実習観察園での活動）と，Zoomを利用したリモート開催が6回実施された。

5. 2021年度に実施したプログラムの概要

本年度に実施できたプログラムのみを以下に掲載する（※コロナ禍以前に実施していたプログラムに関しては，過年度の年次報告を参照されたい）。また，開催できたプログラムの回数やプログラムにかかわったボランティアの人数を表2に示す。表2には，大学の授業・実習などもプログラムと

して掲載しているが、毎日提供されているドロップインおよび諸会議は掲載していない。なお、「よる・あーち」および「Web あーち」の利用者数（子ども・おとな・保護者）、これにかかわった一般ボランティア・学生ボランティアおよびスタッフの人数は表2にも含まれているが、別途、表3にもその詳細を示す。

【子どもとその保護者を主な対象にしたプログラム】

- ・ふらっと：地域子育て支援拠点事業（ドロップイン・サービス）として週5日提供
- ・おひさまひろば あーち：神戸市地域子育て支援センター灘の保育士・灘区公立保育所の保育士がドロップイン・サービスの利用者に対し、見守り・相談と親子遊び（ショートプログラム）を提供
- ・ベビーマッサージ：「あーち」利用者である母親がリーダーとなっておこなう交流プログラム
- ・おもちゃ病院：地域住民の有志によるグループが、壊れたおもちゃなどを修理してくれるプログラム
- ・親子のびのび体操：フリーランスで活躍する保育士による親子あそび
- ・リフレッシュ YOGA：「あーち」利用者による産後の母親の体調改善をめざすプログラム
- ・あらかると音楽あそび：手づくり紙芝居や絵本に音をつけて、一緒に音楽遊びを楽しむ

【発達障害のある子どもの保護者を対象にしたプログラム】

- ・パパママほっと：自閉症プログラムのお子さんを持つ、保護者のための、語らいと情報交換の場

【おとなを主な対象としたプログラム】なし（すべて休止）

【その他のプログラム】

- ・よる・あーち（居場所づくり＋学習支援＋子ども食堂）：多様な立場にある人たちが交流し、その時々のプログラムを企画し実践する/子どもや青年に対して学生や市民ボランティアが個別に学習支援を実施した後、子どもや保護者、ボランティアなどが、灘区連合婦人会が調理した夕食を一緒に楽しむ
- ・学ぶ楽しみ発見プログラム（KUPI）：大学の資源を無理なく効果的に活用することで、言語によるコミュニケーションが可能な知的障害のある青年が、学ぶことの楽しさを感じ、自己理解や他者理解、人格を陶冶するプログラム

表2 プログラム数およびボランティア数：延べ数（2021年4月～2022年2月）

2021 月	開館 日数	プログラム数				スタッフ・ボランティア数			学生
		一般 のプ ログ ラム	大学の授 業および 実習等	プログ ラム 総数	プログラ ム数1日 平均	スタッフ (含むプログラム リーダー) 数および一般 ボランティア数	スタッフ	一般	
						スタッフ	一般	合計	学生
4	18	9	4	13	0.72	28	9	36	49
5	15	0	4	4	0.27	1	1	0	13
6	20	1	4	5	0.25	2	4	4	36
7	17	12	4	16	0.94	39	17	51	58

8	18	2	3	5	0.27	12	3	13	21
9	21	4	3	7	0.33	15	3	17	23
10	22	14	5	19	0.86	46	14	55	54
11	19	17	4	21	1.24	57	10	65	67
12	19	13	3	16	0.84	41	9	49	34
1	20	12	3	15	0.79	33	9	41	40
2	18	4	3	7	0.39	16	5	20	11
合計	207	88	40	128	0.62	290	84	374	406

表3「よる・あーち Web あーち」利用数・ボランティア数：延べ数（2021年4月～2022年2月）

内訳		月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	合計	
利用者	子ども（未就学）		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	子ども （小学生）	1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		2年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2
		3年	8	0	0	9	4	4	5	7	9	8	3	57	
		4年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		5年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		6年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	小計		8	0	0	9	4	4	6	8	11	9	3	62	
	子ども （中学生）	1年	4	1	2	2	0	0	2	5	3	2	1	22	
		2年	2	0	0	4	0	1	2	4	0	0	0	13	
		3年	4	0	0	0	1	0	0	2	4	4	0	15	
	小計		10	2	2	6	4	1	4	11	7	6	1	54	
	高校生	1年	3	1	1	1	0	0	4	6	4	1	3	24	
		2年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
3年		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
小計		3	1	1	1	0	0	4	6	4	1	3	24		
保護者		13	0	0	12	4	4	9	15	23	16	12	108		
おとな		80	43	40	51	27	38	70	60	28	27	16	480		
小計		93	43	40	63	31	42	79	75	51	43	28	452		
ボラン ティア	一般		10	1	1	10	3	3	14	10	11	9	5	77	
	学部生		41	30	32	41	18	20	50	65	33	39	10	379	
	院生等		9	3	4	7	3	3	4	2	1	1	1	38	
	小計		60	34	37	58	24	26	68	77	45	49	16	494	
スタ ッフ	教職員		21	4	4	15	7	16	25	20	15	16	12	155	
	灘区婦人会		0	0	0	4	4	0	0	4	8	7	0	27	
	小計		21	4	4	19	11	16	25	24	23	23	12	182	

合計（人）	195	84	84	156	74	89	186	201	141	131	63	1404
-------	-----	----	----	-----	----	----	-----	-----	-----	-----	----	------

6. 2021 年度の見学・視察数

大学のサテライト施設として、社会的責任や地域貢献をはたし、アクション・リサーチの成果を社会に対してモデル提示したり発信したりする手段として、見学者やメディア取材の受け入れをおこなっている。2021 年 4 月から 2022 年 2 月末までの見学・視察者数は 34 名であった。以下、これを機関・組織別に整理する。なお、個人的な見学者に関しては省略する。

【「よる・あーち」見学・視察者】

灘区まちづくり課 7 名 第一生命 1 名 アソシア 1 名 神戸市企画調整局つなぐラボ 4 名
灘区社会福祉協議会 1 名 京都教育大学 2 名 兵庫県ビジョン委員会 2 名

【その他の見学・視察者】

神戸市こども家庭局こども青少年課 2 名 神戸市健康局健康企画課 1 名
灘区こども保健係保健師 2 名 およこふらっとひろば兵庫（兵庫区社会福祉協議会）1 名
放課後デイ「スマートキッズ」2 名 地域子育て応援プラザ灘 1 名
神戸市看護大学学生 4 名 YPC 保育園（企業主導型）2 名 ベルコ 1 名

7. 2021 年度の連携・協力先

「あーち」の運営にあたって、本年度に連携・協力を得た組織や団体名をその内容とともに以下の表 4 に整理する。なお、個人的な協力者に関しては省略する。

表 4 連携・協力関係にある組織・団体等とその内容

組織・団体名等	連携・協力の内容
神戸市市民参画推進局	運営協力
神戸市子ども家庭支援部こども青少年課	運営協力
灘区民ホール	運営協力／情報交換
神戸市灘区まちづくり推進部	地域活動支援コーディネーターの派遣
灘消防署	消防訓練（区民ホールでの訓練に参加）
神戸市地域子育て支援センター灘	ふらっと相談員／おひさまひろばあーち
灘区公立保育所（7 か所）	ふらっと相談員／おひさまひろばあーち
灘区地域コーディネーター（元幼稚園教諭）	ふらっと相談員
灘区社会福祉協議会	ボランティアコーディネート（募集）
灘区内児童館（10 か所）	情報交換
およこふらっとひろば灘	情報交換
灘区連合婦人会	「よる・あーち（子ども食堂）」の調理担当
社会福祉法人たんぼぼ	博物館実習
学童保育つむぎ	居場所づくり
カフェ「アゴラ」	居場所づくり
社会福祉法人かがやき神戸	居場所づくり

神戸ユニバーサルツーリズムセンター	居場所づくり
亀田マタニティ・レディース・クリニック	情報交換
おもちゃ病院（地域の有志）	「おもちゃ病院」の実施
神戸大学医学部保健学科地域連携センター	情報交換

（のびやかスペースあいち運営委員会委員長 相澤直樹）

10.1.5. サイエンスショップ

1. 概要と運営体制

サイエンスショップは、(a) 地域社会における広義の科学教育や科学コミュニケーションを含む市民の科学に関わる諸活動への支援、および (b) 神戸大学学生の主体的研究活動等への支援を行うことを目的とする。(a) については、科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じて、環境問題など科学に関わる課題への市民の取組や、社会における科学技術の進展とそれに関する政策形成過程などへの市民の参画を促す仕組づくりと実践を目指しており、実践研究として行われている。

令和3年度は、研究科専任教員（室長，副室長，ほか室員1名）と、学術研究員2名（非常勤職員），事務補佐員3名（非常勤職員）の体制で運営された（学術研究員および事務補佐員については、次項に記すグローバルサイエンスキャンパス事業に係る業務担当者を含む）。

2. 令和3年度の主な取組

(1) グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムの運営

サイエンスショップは、神戸大学を実施機関，兵庫県立大学，関西学院大学，甲南大学を共同機関として4大学の連携で実施する，高校生等を対象とした科学技術人材育成プログラムの事務局として事業運営の中核的役割を担っている。この教育プログラムは，国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）の次世代人材育成事業の一環である「グローバルサイエンスキャンパス（GSC）」の企画として同機構の支援を受けて実施されている。平成29年度からのJSTの支援期間4年間で令和2年度に終了したが，その成果を踏まえて新たな展開を目指す企画提案が令和3年度に採択となり，第Ⅱ期目の取組を開始した（企画の実施主担当者をサイエンスショップ副室長が務めている）。第Ⅰ期の企画名「根源を問い革新を生む国際的科学技術人材育成挑戦プログラム」（英語名：Research-Oriented On-site Training Program for innovative scientists in the future，略称：ROOT プログラム）に対して，第Ⅱ期の企画名は「“越える”力を育む国際的科学技術人材育成プログラム」（英語名：Research-Oriented On-site Training Program for young scientists to go beyond the boundaries）で，略称「ROOT プログラム」は第Ⅰ期から継承した。

第Ⅱ期において，神戸大学では大学教育推進機構等が主体となり，人間発達環境学研究科を含む全学の幅広い部局・組織の参画のもとで企画が進められている。その企画立案，実施等について審議するために，大学教育推進機構に「グローバルサイエンスキャンパス委員会」が設置されている。また，地域の幅広い連携のもとで人材育成を推進するために，兵庫県および周辺府県等の教育委員会や，兵庫県下の先端的研究機関（高輝度光科学研究センター，理化学研究所計算科学研究機構，同生命機能科学研究センター，兵庫県立人と自然の博物館，兵庫県立大学西はりま天文台）や，公益財団法人兵庫工業会などが連携機関として協力し，実施機関である神戸大学，共同機関を含めてGSCひょうご神

戸コンソーシアムが形成されている。

このプログラムでは、毎年、科学技術分野で優れた潜在的資質や高い意欲をもつ受講生を募集し、50名程度を選抜する。大学教員による講義・実習、先端的研究機関の見学などを含む約半年間の「基礎ステージ」を経て、受講生が研究課題を提案し、評価を受けて選抜された20名程度が、大学等において研究を行なう「実践ステージ」に取り組む。科学的課題設定力・探究力を培うプログラムと並行して、科学英語、海外研修など国際性を高めるプログラムも展開される（基礎ステージ、実践ステージの受け入れ枠は第Ⅰ期からそれぞれ10名程度拡大された）。

令和3年度も、前年度に引き続いて新型コロナウイルス感染症の影響により、基礎ステージはオンラインによる活動が中心となった。また、実践ステージの研究活動についても、アドバイザー教員との打ち合わせ、指導・助言などはオンラインを中心として行われ、大学での研究活動、野外でのフィールドワーク等は感染リスクを考慮し強い制限下で行われた。第Ⅰ期最終年度に選抜された第4期実践ステージ生7名が、引き続き第Ⅱ期のプログラムの実践ステージ生として受け入れられ、個別課題研究に取り組んだ。また、5月から6月にかけて第5期基礎ステージ生の募集を行い、109名の応募者（所属学校所在地：兵庫県、大阪府、京都府、奈良県、和歌山県、徳島県、岡山県、鳥取県、岐阜県、群馬県、埼玉県、東京都、アルメニア）から60名を選抜、それらの受講生が基礎ステージを受講した。令和4年1月には、その中から実践ステージ受講生候補者20名が選抜され、令和4年度の研究活動に向け、大学教員の指導・助言のもとで研究計画の具体化などを進めている。

これまでの修了生も含めて、英語による研究論文の発表、英語および日本語による学会発表の他、受講生が様々な科学コンテストで優秀な成績を収めるなど、優れた科学技術人材の発掘・育成の形ある成果が見られる。令和3年度にも、実践ステージ生が、令和3年度グローバルサイエンスキャンパス全国受講生研究発表会において審査委員長特別賞受賞、JSEC2021（第19回 高校生・高専生科学技術チャレンジ）において日本ガイシ賞受賞、ISEF（International Science and Engineering Fair）2022（令和4年5月開催予定）の日本代表の一人に選出されるなどの成果を収めた。

(2) 地域社会における市民の科学活動および科学コミュニケーション支援

市民による科学コミュニケーション活動の支援として、伊丹市を中心にサイエンスカフェの開催に取り組む市民グループ「サイエンスカフェ伊丹」によるサイエンスカフェ等の開催を支援した（共催：2回、協力：8回）。共催した令和3年11月の「新型コロナウイルスと mRNA ワクチンについて～医学ではなく化学の観点から～」、同12月の「中学生にもわかる？相対性理論」は、これらの話題についてサイエンスカフェ伊丹からゲスト紹介の要望を受け、人間発達環境学研究科の研究者がゲストを務めた（サイエンスカフェ開催支援のリストについては年次報告書資料編に掲載する）。

また、千種川流域圏で活動するグループ「千種川圏域清流づくり委員会」による河川環境モニタリング「千種川一斉水温調査」（8月）に、教員1名と学生2名が参加・協力を行った。

この他、淡路島でコミュニティづくりに取り組むNPO法人ソーシャルデザインセンター淡路や、兵庫県西部の佐用川でオオサンショウウオの保全・調査活動に取り組む「佐用川のオオサンショウウオを守る会」の活動に、参加・協力を行った。

これらは、令和3年度神戸大学地域連携事業（課題名：持続可能な社会づくりをめざす市民活動への支援事業）、事業主体：発達支援インスティテュート）の一環として学内の支援も受けて取組を進

めた。

この他、平成 19 年度以降実施している、市民が科学者とともに IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change : 気候変動に関する政府間パネル) の報告書を読み解く会「市民のための、IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」を 17 回開催した (第 2 期, 第 112 回から第 128 回)。

(3) 科学教育への支援

グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムについては、項目 (1) に記したが、それ以外の取組について以下に記載する。

令和 3 年 11 月には、兵庫県生物学会と共同で「高校生私の科学研究発表会 2021」をオンラインにより開催した。兵庫県、大阪府、奈良県、香川県の 13 校から、高校生 78 名、高等学校教員 13 名、本学学生 6 名を含む 108 名の参加者があり、活発な発表、交流が行われた。優れた研究に対して、サイエンスショップより優秀賞を授与した。

サイエンスショップに関わる教員は、様々な形で高等学校の科学教育活動への支援も行っている。令和 3 年度の特筆すべき成果の一つとして、前年度に岐阜県立岐阜高等学校科学部に対して支援を行った研究成果が、同科学部との共著で次の論文として出版され、日本水産学会の論文賞を受賞した。

Tenma, H., Tsunekawa, K., Fujiyoshi, R. *et al.* Spatiotemporal distribution of *Flavobacterium psychrophilum* and ayu *Plecoglossus altivelis* in rivers revealed by environmental DNA analysis. *Fisheries Science* **87**, 321-330 (2021).
<https://doi.org/10.1007/s12562-021-01510-z>

新型コロナウイルスの影響により、従来からサイエンスショップを窓口として神戸大学が協力を行ってきた兵庫「咲いテク」事業推進委員会主催の高校生の科学研究発表・交流会「サイエンス・カンファレンス in 兵庫」(令和 3 年 7 月) および「サイエンスフェア in 兵庫」は、規模を縮小して実施されることとなり、神戸大学からの会場提供等の協力は行われなかった。また、鶴甲小学校 PTA の要請を受けて、平成 19 年度以降毎年開催してきた「理科実験教室」、およびサイエンスショップ研究員による市民を対象とした「つるかぶと科学教室」の開催は見合わせた。

(4) 学部・大学院教育

本年度も、国際人間科学部のグローバルスタディーズプログラム (GSP) の国内フィールドとして学生 (前期 1 名, 後期 2 名) を受け入れた。新型コロナウイルスの影響により、活動が制限される中、学生は、フィールドワークとして、千種川流域の地域の市民による環境調査「千種川一斉水温調査」への参加・協力 (実地)、オンラインおよび対面による市民グループが開催するサイエンスカフェ等の科学コミュニケーションイベント、高校生の科学研究発表会等、サイエンスショップに関わる諸活動に参加した。

このように、サイエンスショップは、大学・大学院におけるアクティブ・ラーニング/サービス・ラーニングの場やそれを促す仕組みとしても機能している。

なお、サイエンスショップの枠組みで学生が取組む「天文ボランティアグループ アストロノミア」の活動については、新型コロナウイルスの影響により、小学校を訪問しての観望会は実施できなかつ

たが、学内での定期的なミーティングと天体望遠鏡操作の勉強会などを行った。

(5) その他

- ・ 鶴甲地区の高齢者を対象とした「かんたんスマホ講座」を開催した（令和3年11月3回および令和4年1月1回、主催は人間発達環境学研究科、アクティブエイジング研究センターと連携）。
- ・ 「発達支援インスティテュート・シンポジウム 2021-ポストコロナ社会における研究・実践の展望-」（令和3年9月、オンライン開催）において、講演「オンラインで拓く科学コミュニケーションの試み」を行った。
- ・ “The 1st KULOS Symposium for Development of the Academic Relationship between UW and KU: Past, Present and Future（第1回KULOSシンポジウム、神戸大学国際連携推進機構米州交流室主催、令和4年3月、オンライン開催）”において、ROOTプログラムおよび関連したワシントン大学との交流について紹介する講演2件（“ROOT: A Science Education Program for High School Students to Provide Early Research Experiences”，“Environmental DNA studies in Kobe”）を行った。

（サイエンスショップ室長 源 利文、副室長 伊藤真之）

表 神戸大学サイエンスショップ 令和3年度の主な取組

市民科学活動・科学コミュニケーション支援
<ul style="list-style-type: none"> ・サイエンスカフェ開催支援（県下のサイエンスカフェ開催等支援（共催2回、協力10回）） ・市民と研究者が協力して気候変動に関する IPCC レポートを精読する会「市民のための、IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」の定期開催（17回） 他
地域の科学教育支援
<ul style="list-style-type: none"> ・グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムの運営 他
大学教育・学生の活動
<ul style="list-style-type: none"> ・国際人間科学部グローバルスタディーズプログラム国内フィールド 『『市民の科学』プログラム：サイエンスショップ』提供 ・学生天文ボランティアグループ アストロノミア
研究会等の主催
<ul style="list-style-type: none"> ・「高校生・私の科学研究発表会 2021／兵庫県生物学会 2021 研究発表会」開催（主催：兵庫県生物学会、神戸大学サイエンスショップ） オンライン開催
イベント等開催協力
<ul style="list-style-type: none"> ・サイエンスカフェ伊丹（主催：サイエンスカフェ伊丹） 伊丹市
研究・開発等
<ul style="list-style-type: none"> ・「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」（神戸大学先端融合研究環 人文・社会科学系融合研究領域：人文学研究科等との共同） 他

（サイエンスショップ室長 源利文、副室長 伊藤真之）

10.1.6. 教育連携推進室

教育連携推進室では、教育連携部門、研究開発部門、拠点形成部門において、それぞれ以下の活動を行った。

教育連携部門では、神戸市教育委員会と共同して、神戸市立幼稚園、保育園、小学校及び私立の保育園等の教員・保育士を対象に、幼小接続期教育をテーマにして「つばめセミナー」（研修講座）を開催した。なお年度の計画としては年間全8回の予定であったが、コロナ感染症拡大の影響により、年間5回と規模を縮小して開催した。

研究開発部門では、高度教員養成プログラムを実施するとともに、7回のセミナーと神戸大学附属学校園や地域の学校及び教育施設等をフィールドとした教育実践のアクション・リサーチを含む理論的・実践的研究の推進に寄与した。本年度の認定証発行は8名であった。

拠点形成部門では、国内外の拠点形成を目指して、調査活動に従事する予定であったが、予定されていた渡航や協議は、コロナ感染症拡大の影響により、規模を縮小して実施せざるを得なかった。

国外については、ラオス国立大学との共同研究は、zoomを介して一月に一回の頻度で打ち合わせを実施した。今後、コロナの感染拡大の中でも、研究拠点の形成の手法や、感染収束後、国際的な研究拠点としての本室の活動が期待される場所である。

チャイルド・リサーチ・ネット・アジア子ども学研究ネットワークの8か国による国際比較共同研究「アジア諸国にみる「ハッピー&レジリエントな子どもをどう育むか」日本のカントリーレポート」に参加した。

ベルギーのヘント大学との園と家庭との連携に関する国際比較研究を実施し、研究成果を日本こども学会の学会誌に掲載することができた。各国の幼稚園教育要領における中心的な価値に関する比較研究を行いヨーロッパ乳幼児教育学会のシンポジウムでその中途成果を報告した。

国内については、附属幼稚園と連携し、文部科学省事業研究や、神戸市こども家庭局との共同研究等を行った。また、スポーツ庁の委託授業として神戸市立御影小学校において放課後運動プログラムを実施した。昨年度から開始した附属学校と連携したプロジェクト研究として、附属小学校、附属幼稚園における、歴史的資料のデータベースの作成を行った。

財務的には、現在多くの科研等の採択を獲得してきているが、今後もさらに継続して大型競争的資金の獲得に向けた申請及び申請の準備をする予定である。

令和元年度における教育連携推進室関係の連携を基礎とする主要な研究活動実績は以下の通りである。

1. シンポジウム共同企画・運営

- ① 神戸市乳幼児保育研究部会 プロジェクト研修会 神戸市共催 2021.12.13
- ② 神戸市乳幼児保育研究部会 全大会 神戸市共催 2022.3.7
- ③ 環太平洋乳幼児教育学会日本支部会 GSPプログラム後援 2022.3.26
- ④ 神戸大学大学院人間発達環境学研究科乳幼児教育学研究室ICT関連研究報告会 2022.3.28

2 研修セミナーの企画・運営

年月日：令和3年度

名称：次世代型研修プログラム開発事業「つばめセミナー」

内容：神戸市総合教育センターと連携して、保幼小連携の理論と実践を解説するセミナーを企画運営した。

3 高度教員養成プログラムの企画・運営

年月日：令和3年6月から令和4年2月

名称：高度教員養成プログラム

内容：参加院生（博士前期課程8名）向けに計7回セミナーを開催するとともに、連携先とのアクション・リサーチを主体とする研究活動を行った。

4 主要な研究業績

- ① Sachi Tomokawa, Kimihiro Miyake, Kenzo Takahashi, Aya Tomokawa, Shohei Kokudo, Marie Ueno, Mika Kigawa, Takashi Asakura 「Health screening system to ensure children's health and development in Japan」
『PEDIATRICS INTERNATIONAL 63(8)』 pp. 869-879 2021年8月（査読あり）
- ② 渡邊隆信「コロナ禍での学校教育活動：2020年度神戸大学附属小学校の記録」
『人間教育の探究（33）』 pp. 33-45 2021年6月（査読あり）
- ③ 中橋葵, 岡部恭幸「幼小接続期における領域「環境」と算数科のカリキュラムの課題に関する一考察 -サビタイジングを基盤とする認識と数の合成・分解の学びの道筋に着目して-」 『数学教育学会誌 61(1-2)』 2021年（査読あり）
- ④ Koga Yago, Yukiya Shingai, Wakana Kobayashi, Ryota Aoki, Yoshiaki Takeda, Fusako Kusunoki, Hiroshi Mizoguchi, Masanori Sugimoto, Hideo Funaoi, Etsuji Yamaguchi, Shigenori Inagaki
「Satoyama forest management learning game for SDGs education: Comparing the effect of providing additional information in the first half and latter half of the game」 [in press]
『Proceedings of the 13th International Conference on Computer Supported Education 1』
pp. 347-351 2021年4月（査読有り）
- ⑤ Oura, H, Mochizuki, T, Chinn, A, Winchester, E, Yamaguchi, E
Detecting cherry-picked evidence in texts: Challenges for undergraduate students [in press] Proceedings of International Society of Learning Sciences Annual Meeting 2022 2022年3月（査読有り）
- ⑥ 田中達也, 山口悦司「防災教育の視点を取り入れた中学校理科単元の提案：モデル実験を通じた自然災害発生メカニズムの理解深化を目指して」 『教育科学論集（25）』 pp. 1-9 2022年2月（査読有り）
- ⑦ 矢後恒河, 青木良太, 小林和奏, 武田義明, 楠房子, 溝口博, 杉本雅則, 舟生日出男, 山口悦司, 稲垣成哲「SDGs教育のための環境教育コンテンツ「里山管理ゲーム」におけるユーザーインターフェース改善が学習に与える影響」 『情報処理学会研究報告 2022-DCC-30(48)』 pp. 1-5 2022年1月

- ⑧ 望月 俊男, チン A. クラーク, 山口 悦司, 大浦 弘樹「ポスト真実時代における認識的認知に基づく情報リテラシーとその学習環境のデザイン」『教育システム情報学会誌 39(1)』pp. 17-34 2022年1月 (査読有り)
- ⑨ Kan Oishi, Takumi Aoki, Tetsuo Harada, Chiaki Tanaka, Shigeho Tanaka, Hideki Tanaka, Kazuhiko Fukuda, Yasuko Kamikawa, Nobuhiro Tsuji, Keisuke Komura, Shohei Kokudo, Noriteru Morita, Kazuhiro Suzuki, Masashi Watanabe, Ryoji Kasanami, Taketaka Hara, Ryo Miyazaki, Takafumi Abe, Koji Yamatsu, Daisuke Kume, Hidenori Asai, Naofumi Yamamoto, Taishi Tsuji, Kojiro Ishii『Association of Neighborhood Food Environment and Physical Activity Environment With Obesity: A Large-Scale Cross-Sectional Study of Fifth- to Ninth-Grade Children in Japan』
『INQUIRY-THE JOURNAL OF HEALTH CARE ORGANIZATION PROVISION AND FINANCING 58』 2021年11月 (査読あり)
- ⑩ 望月 俊男, チン A. クラーク, 山口 悦司, 大浦 弘樹「ポスト真実時代における認識的認知に基づく情報リテラシーとその学習環境のデザイン」『教育システム情報学会誌 39(1)』pp. 17-34 2022年1月 (査読有り)
- ⑪ Kan Oishi, Takumi Aoki, Tetsuo Harada, Chiaki Tanaka, Shigeho Tanaka, Hideki Tanaka, Kazuhiko Fukuda, Yasuko Kamikawa, Nobuhiro Tsuji, Keisuke Komura, Shohei Kokudo, Noriteru Morita, Kazuhiro Suzuki, Masashi Watanabe, Ryoji Kasanami, Taketaka Hara, Ryo Miyazaki, Takafumi Abe, Koji Yamatsu, Daisuke Kume, Hidenori Asai, Naofumi Yamamoto, Taishi Tsuji, Kojiro Ishii『Association of Neighborhood Food Environment and Physical Activity Environment With Obesity: A Large-Scale Cross-Sectional Study of Fifth- to Ninth-Grade Children in Japan』
『INQUIRY-THE JOURNAL OF HEALTH CARE ORGANIZATION PROVISION AND FINANCING 58』 2021年11月 (査読あり)
- ⑫ 望月俊男, Clark A. Chinn, 山口悦司, 北澤武, 舟生日出男, 大浦弘樹「ポスト真実社会の情報信頼再構築に向けた認識的能力育成に資する学習環境デザイン」(延長)
『公益財団法人電気通信普及財団研究調査助成報告書(36)』pp. 1-11 2021年9月
- ⑬ 渡邊隆信, 図書紹介 眞壁宏幹著『ヴァイマル文化の芸術と教育—バウハウス・シンボル生成・陶冶』日本の教育史学 64 158-159 2021年10月
- ⑭ 田中達也, 神山真一, 山本智一, 山口悦司「児童におけるアーギュメント自己評価能力とアーギュメント構成能力の関係性についての予備的検討: 主張-証拠-理由付けを含むアーギュメントを導入した小学校第3学年の単元「物と重さ」の事例」
『理科教育学研究 62(1)』pp. 119-131 2021年7月30日 (査読有り)
- ⑮ 俣野源晃, 山本智一, 山口悦司, 坂本美紀, 神山真一, 複数の証拠を利用するアーギュメント構成能力の育成: 小学校第5学年「電流がつくる磁力」の事例
『理科教育学研究 62(1)』pp. 187-195 2021年7月30日 (査読有り)

- ⑩ Sachi Tomokawa, Takashi Asakura, Ngouay Keosada, Vannasouk Bouasangthong, Vanthala Souvanhxay, Phetnoy Navamal, Kethsana Kanyasan, Kimihiro Miyake, Shohei Kokudo, Ryuichi Watanabe, Sithane Soukhavong, Khamseng Thalangsy, Kazuhiko Moji
「Introducing Ecohealth education in a Teacher Training Institute in Lao PDR: a case study」
『HEALTH PROMOTION INTERNATIONAL 36(3)』 pp. 895-904 2021年6月 (査読あり)
- ⑪ 山口悦司, 教師を目指す大学生に「科学技術の社会問題」の解決過程を経験させる: 未知の状況に対応できる児童生徒を育成するために求められる理科教師の養成の実践事例, 一般社団法人日本理科教育学会『理科の教育』2021年6月号 pp. 21-23 2021年6月
- ⑫ 新階幸也, 青木良太, 小林和奏, 武田義明, 楠房子, 溝口博, 杉本雅則, 舟生日出男, 山口悦司, 稲垣成哲「STEM教育での課題解決能力獲得に向けた学習支援システム「里山管理ゲーム」: 複数の里山への対応による学習効果に関する検討」 『科学教育研究 45(2)』 pp. 112-127 2021年6月 (査読あり)
- ⑬ Miki Sakamoto, Etsuji Yamaguchi, Tomokazu Yamamoto, Kazuya Wakabayashi
「An intervention study on students' decision-making towards consensus building on socio-scientific issues」
『International Journal of Science Education 43(12)』 1965-1983 2021年8月13日 (査読有り)
- ⑭ 岩橋 道世, 平山, 猛, 隈崎 哲也, 青木 恵里佳, 菊地 義行, 只野 裕子, 福澤 紀子, 永田 久史, 田和 由里子, 田口 侑平, 東口 房正, 遠藤 浩平, 椛沢 幸苗, 坂崎 隆浩, 齋藤 奈緒美, 北野 幸子, 矢藤 誠慈郎「3歳未満児における保育内容の評価に関する研究 —人的環境・物的環境・言語環境の研究から見えてきたものを土台として—」 『保育科学研究 11』 pp. 53-68 2022年3月
- ⑮ 北野幸子「非認知的能力の育ちを捉え育む乳幼児教育・接続期教育の開発」
『尼崎市学びと育ち研究所研究紀要』 (第4号) pp. 58-61 2022年3月
- ⑯ 北野幸子, 第26次プロジェクトチーム「0歳児から6歳児までの保育・教育を考える～非認知的能力はどのようにして育まれるのか～」 『第26次プロジェクトチーム 研究紀要』 2022年3月
- ⑰ 藤掛絢子, 北野幸子「幼児期における音や音楽にかかわる経験についての保護者の認識—小学校1年生の保護者へのアンケート調査から—」 『ノートルダム清心女子大学紀要 第46巻 第1号』 pp. 98-109 2022年
- ⑱ ミシェル・ヴァンデンプロック, 北野幸子「園と保護者との連携における互惠性を考える—ベルギーのフランダースにおける家庭との連携事例を中心に—」 『チャイルド・サイエンスVol. 22』 pp. 9-14 2021年9月
- ⑲ 北野幸子「オンライン化時代におけるICTを活用した家庭と園の連携・協働」
『教育と医学』 pp. 332-339 2021年7月 (依頼論文)

6 科研等 (令和3年度代表分)

- ① 挑戦的研究(萌芽) 「幼小接続期の数理認識の発達に着目した評価スケールの開発」 (課題番号 18K18648) 代表: 岡部恭幸

- ② 挑戦的研究(萌芽)「高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発」(課題番号20K20829) 代表:山口悦司

7 科研等(令和3年度分担分)

- ① 挑戦的研究(萌芽)「市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデル開発」(課題番号:18K18646) 代表:坂本美紀
- ② 基盤研究(B)(一般)「生物多様性の実感的学習を可能とするSDGsを志向した里山環境保全教育プログラム」(課題番号19H01734) 代表:武田義明
- ③ 基盤研究(B)(一般)「アジアの途上国の教員の自己教育力及び保健教育のコンピテンシー向上のための授業研究」(課題番号20H01687) 代表:小磯透
- ④ 基盤研究(B)(一般)「一見矛盾する事実から真実を導き出す能力を育む協調学習環境の開発と実践的評価」(課題番号:20H01729) 代表:望月俊男
- ⑤ 基盤研究(C)(一般)「新教育運動期における自然保護運動の昂揚と環境教育の起源に関する比較史的研究」(課題番号:20K02529) 代表:宮本健市郎
- ⑥ 基盤研究(C)(一般)「家庭養育と乳児保育の質の向上を促す家庭と乳児保育の連携プログラムの開発」(課題番号20K02643) 代表:寺見陽子
- ⑦ 基盤研究(C)(一般)「実習との往還を図った音楽表現領域における保育者養成教育プログラムと評価の開発」(課題番号21K02418) 代表:藤掛絢子

8 その他の外部資金(令和3年度代表分)

- ① 神戸市共同研究「乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究」代表:北野幸子
- ② 位置測位システムを活用した幼児理解の深化と根拠に基づくカリキュラム・マネジメントによる実践の充実方法に関する調査研究
文部科学省 幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究 ICTや先端技術の活用などを通じた幼児教育の充実の在り方に関する調査研究 代表:北野幸子
- ③ ICTを活用したドキュメンテーションツールの開発 ～「おうちえん」についての機能強化、新展開に関わる共同研究～
産官学共同研究 代表:北野幸子
- ④ 保育のICT環境に関する実態調査と保育者支援システム創りに関する研究
大学発アーバンイノベーション神戸 代表:北野幸子
- ⑤ 小学校における放課後運動プログラムの実施とその効果,スポーツ庁令和3年度武道等指導充実・資質向上支援事業, 代表:国土将平

9 受賞 なし

10 主要な連携先

海外：ドレスデン工科大学教師教育センター，マノスク国際学校，トリブバン大学教育学部，ラオス国立大学教育学部

国内：神戸大学附属小学校，神戸大学附属幼稚園，神戸市教育委員会，兵庫県教育委員会，明石市，舞鶴市，兵庫県，大阪市，尼崎市，神戸市立王子動物園，神戸市立御影小学校，国立科学博物館，兵庫県立人と自然の博物館

(教育連携推進室長 國土将平)

10.1.7. アクティブエイジング研究センター

1. 運営体制

運営委員（五十音順）

1) 教員：片桐恵子，増本康平，近藤徳彦，岡田修一，長ヶ原誠，平山洋介，井上真理，田畑智博，近江戸伸子，齊藤誠一，木村哲也，岡崎香奈，原田和弘，石原暢

2) 学外研究員：

①福沢愛 東京大学 未来ビジョン研究センター

②加藤成二 山梨県富士・東部農務事務所

2. 研究プロジェクトの推進

(1) プロジェクト内容：メンバーと内容

令和3年度は18件の研究プロジェクトを行った。

1) 鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して

メンバー：岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原誠，片桐恵子，増本康平，原田和弘，学外研究者

内容：オールドニュータウンである鶴甲地区を対象に，多世代が心身ともに健やかで将来の希望に満ちた，安全に暮らせるまちづくりを支援するものである。アカデミック・サロン（大学内で行うイベント）を鶴甲地区の住民の学びと活動の場の基礎とし，大学をコミュニティの中心に位置付け，このサロンを通して，住民同士のネットワークを形成するとともに，サロンの継続に必要なファシリテーターを養成し，住民が企画・運営するコミュニティ活動を支援する。

2) 住民ネットワーク形成の客観的検証方法の確立

メンバー：増本康平，岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原誠，片桐恵子，木村哲也，古谷真樹，研究科共同研究者4名

内容：ウェアラブルセンサデバイスによって対面コミュニケーション行動データを自動収集し，ネットワーク解析を行うことで住民交流の現状や変化，キーパーソンを把握し，支え合い・助け合いの基盤となる住民ネットワークの活性化につなげる。

3) 男女の違いや個人差を考慮した健康増進支援プロジェクト

メンバー：近藤徳彦，岡田修一，中村晴信，古谷真樹，井上真理，齊藤誠一，木村哲也，佐藤幸治

内容：健康行動（食・睡眠・運動）を支援するため，これらに関する環境を工夫することにより健康を支援する方法を提案する。その際，これまで十分な情報が得られていない男女の違いや個人差からアプローチする。

4) 高齢者の身体システム機能維持・向上への学際的プロジェクト

メンバー：木村哲也，佐藤幸治，学外研究者

内容：高齢者の身体システム機能の維持・向上に対して，基礎研究及びその成果に基づいた社会実装を，応用生理学，運動生理・生化学，バイオメカニクス，生体工学の各観点を統合して学際的に実施する。現在取り組み中の具体的課題は，立位バランス神経制御則の解明や高齢者の筋機能の向上である。

5) 都市住居高齢者の日常活動の国際比較

メンバー：片桐恵子，原田和弘，福沢愛，学外研究者1名，海外研究者2名

内容：都市に居住する高齢者がどのような日常活動を行っているのか，その活動量はどの程度か，活動がどのように気分や健康に関連しているか，などの実態の解明とそれらの関連を，日本（神戸）と韓国（ソウル）との国際比較から検討する。

6) 超高齢社会を見据えた持続可能なごみ処理施策の提案

メンバー：田畑智博，片桐恵子

内容：高齢者世帯の増加が将来の自治体のごみ処理施策に及ぼす環境的・経済的影響を，シミュレーション分析により明らかにする。ごみ分別等の住民負担の限界と対策の検討を通じて，超高齢化社会に相応しい持続可能な自治体のごみ処理施策を提案する。

7) 関西ワールドマスタースゲームズ 2021 レガシー創造支援研究

メンバー：長ヶ原誠，岡田修一，近藤徳彦，片桐恵子，増本康平，学外研究者3名

内容：2022年に関西広域で開催が決定した生涯スポーツの国際大会がもたらすレガシー（遺産）創造に向けた振興事業アクションリサーチの展開と効果検証のモニタリング評価を実施し，成人・中高年者を対象とした参加型のスポーツメガイイベント開催が個人と地域の活性化に及ぼす影響過程を検証する。

8) 高齢期の意思決定バイアスの解明と自律に向けた生涯学習プログラムの開発

メンバー：増本康平，学外研究者2名

内容：高齢者の意思決定バイアスの特徴を明らかにし，高齢者に適した意思決定の支援方法を明確にする。最終的には，高齢期の自律を目標とした「選び方を選ぶ」生涯学習プログラムを開発する。

9) マスタース甲子園による「アクティブエイジング活性化の検証」

メンバー：長ヶ原誠，学外研究者3名

内容：高校野球部OBクラブの拡大を目指して始動したマスタース甲子園の各地方予選・全国大会の開催が及ぼすアクティブエイジングに関わる諸効果を検証し，スポーツ同窓会結成支援による活動的な加齢文化の推進に着目した生涯スポーツプロモーション事業の可能性と課題を提示する。

10) サードエイジのサクセスフル・エイジング・モデル構築プロジェクト

メンバー：片桐恵子，学外研究者2名

内容：これまでの高齢者とは異なる新しいシニア層である，団塊世代以降の人のライフスタイルや志向を把握し，サードエイジ期（定年後から元気な時期）のサクセスフル・エイジング・モデルを構築する。

11) 生涯学習・多世代交流プロジェクト

メンバー：片桐恵子，学外研究者2名，海外研究者1名，大学院生1名

内容：生涯学習を行うシニアの現状を明らかにし，学習を促進疎外する要因とそのもたらす効果をラ

イフコース的な視点から明らかにする。さらに生涯学習を異世代交流の機会をとらえて、その効果も検討する。アイルランドとの国際比較研究を実施しながら検索する。

12) 超高齢社会における複数住宅所有の実態と役割

メンバー：平山洋介，学外研究員 1 名

内容：高齢化が進む社会のなかで、複数の住宅を所有する世帯が増えている。付加的な住宅はレントアウト収入をもたらす、高齢者の経済セキュリティを形成するケースがある。ここでは、高齢社会の安定の維持における複数住宅所有の可能性と限界を明らかにする。

13) 活動的な生活習慣と健康増進プロジェクト

メンバー：原田和弘，近藤徳彦，学内・学外研究員

内容：高齢者において、活動的な生活習慣が形成・維持されるプロセスには、どのような要因が関わっているのかを学際的な観点から明らかにする。また、その知見に基づき、活動的な生活習慣の効果的な支援方法を開発する。

14) アクティブライフ評価と健康寿命の延伸・認知症予防対策

メンバー：近藤徳彦，増本康平，木村哲也，佐藤幸治，原田和弘，学内研究員

内容：中年期までの活動的な生活習慣（＝アクティブライフ）が、健康寿命の延伸や認知症発症を防ぐ効果があるかどうか注目が集まっている。本研究では幅広い年代のアクティブライフを、経年的に、かつ、正確に測定し、アクティブライフと健康・認知症に関するデータの構築を目指す。これにより健康寿命の延伸や認知症予防に効果的な生活習慣対策を検討する。

15) 更年期女性の身体的変化と心理的適応

メンバー：齊藤誠一，田中美帆，学外研究員

内容：40 歳代後半から閉経に向けて生じる女性の身体的変化の時期である更年期において、どのような身体的変化が生じ、その変化にどのように適応していくか、あるいは同時期の配偶者や子の発達の状況とどのように相互作用しているのかについて検討を行い、その後の中年期後期への望ましい発達のあり方を提案していく。

16) 高齢者の住まい方とエネルギー消費との関係性に関する調査

メンバー：田畑智博，学外研究者

内容：高齢者世帯におけるエネルギー消費と、居住形態、家電所有、生活時間などとの関係性を調査する。また、エネルギー消費が、環境だけでなく、高齢者世帯の家計や貧困などに与える影響を分析する。

17) 超高齢・持ち家社会における住宅相続の増大と階層化

メンバー：平山洋介，学外研究員 1 名

内容：超高齢・持ち家社会としての日本では、遺産相続による住宅資産の世代間移転が増え、社会を階層化する新たな要因になる。相続住宅は、一方では、自己居住用、家賃収入源として役立ち、さらに資産形成を促進すると同時に、他方では、使い途がなく、空き家のままで放置され、管理負担ばかりをもたらす場合がある。ここでは、住宅相続の階層化の実態を解明するところから、住宅ストック利用に関する政策課題を検討する。

18) エンド・オブ・ライフにおける感情調整の機序と役割

メンバー：増本康平，佐藤幸治，原田和弘，学外研究者

内容：身体、認知機能が低下し自立した生活が困難となっても、社会的つながりを維持し、幸せな生活をおくるために重要な機能として、近年、感情調整が注目されている。本研究では、感情調整機能の加齢による変化について遺伝的、心理的、文化的側面から検討する。

(2) 外部資金

科研挑戦的研究(萌芽)9件、挑戦的研究(開拓)1件、基盤研究(A)2件、基盤研究(B)10件、基盤研究(C)8件、若手研究(A)1件、若手研究2件、特別研究費奨励費1件、国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)1件、国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))1件、学術変革領域研究(A)1件、を獲得し、上記研究プロジェクトを推進している。

(3) アクシオンリサーチの実施

研究プロジェクト「鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して」は、鶴甲地域住民の地域の絆を構築するための、アクシオンリサーチである。神戸市灘区の「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業」の助成を受け、本年後は主催する連続講座【2021年度秋 健康体操教室】に延べ98名、【2021年度秋 園芸教室】に延べ52名、【2021年度秋 いきいきウォーキング】に延べ118名、【2021年度 かんたんスマホ講座】に延べ32名の住民の参加があった。

これまでの延べ参加者は、約5000名となった。

本プロジェクトによるアクシオンリサーチの結果は、国際学術雑誌に採択されており、現在も投稿中である。住民のネットワークの拡充やwell-beingの向上に役立っていることを科学的エビデンスに基づき示したのとして評価されている。

連続講座助成活動報告 灘区まちづくりチャレンジ事業

2021年度秋 健康体操教室	2021/10/29, 11/5, 11/9
2021年度秋 園芸教室	2021/11/13, 12/18
2021年度秋 いきいきウォーキング	2021/11/20, 11/27, 12/4, 12/11
2021年度秋 簡単スマホ講座	2021/11/11, 11/16, 11/24

3. セミナー

以下のセミナーを後援した。

1) 日時：2022年 3月 1日 (火) 15:00~17:30

場所：オンライン形式

Well-being研究会キックオフシンポジウム ～人のこころの豊かさ・幸福を求めて～

主催：神戸大学 産官学連携本部 共同研究・オープンイノベーション推進部門

後援：神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 アクティブエイジング研究センター

4. 連携活動

(1) 連携活動

以下の学内プロジェクトと連携活動を実施した。

- 1) 認知症予防プロジェクト（神戸大学）
- 2) 「Well-being研究拠点」社会関係資本ユニットでの活動（神戸大学高等研究院未来世紀都市学研究アライアンス）

（センター長 片桐恵子）

10.2. 実習観察園の運営利用状況

○実習観察園施設および概略図

実習観察園の概略は図1の通りで、前年と変わりはない。灰色で示した部分は、自然環境論コースの教員が研究のために設置したビニルハウスである。

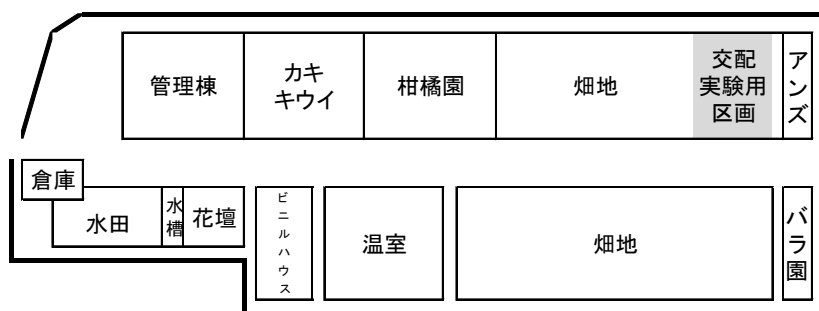


図1 施設・作付概要

○作付面積および作付植物

作付面積および作付作物はそれぞれ表1および表2に示した通りである。

表1 作付面積 (m²)

種別	面積	備考
畑地	352	教材・実習用
果樹園	255	教材・実習用
水田	70	実習・研究用
バラ園	35	園内美化・実習用
花壇	25	園内美化・実習用
計	735	全体

表2 作付植物

種類	植物
野菜	コマツナ、ホウレンソウ、キャベツ、キュウリ
	カボチャ、スイカ、トマト、オクラ、ピーマン
マメ・穀類	イチゴ、ナス、ダイコン、カブ、タマネギ、ニンジン
	ダイズ、ラッカセイ、ソラマメ、インゲンマメ
果樹	ジャガイモ、サツマイモ、トウモロコシ、イネ
	なつみかん、ハッサク、温州みかん、スダチ
花弁	ユズ、キンカン、カキ（富有、サエフジ）、ブドウ
	スモモ、キウイ、ウメ
花	ベゴニア、マリーゴールド、ペチュニア、サルビア
	キンセンカ、バーベナ、トレニア、デモルフォセカ
その他	マツバボタン、スベリヒユ、ヒマワリ、アサガオ
	ハボタン、チューリップ、ナデシコ、バラ

○教育活動

例年は、「保育内容研究(環境)」(履修生 16 名)において、植物栽培に関すること、すなわち、畝立て、土作り、草花や野菜の種まき、育苗、鉢上げ、定植、誘引、収穫、挿し芽繁殖、花壇・緑化設計と制作などを行っている。これらの他に、プランターや鉢植え栽培による校内美化の指導も行っている。履修者が実践的に“植物と子供の遊び”というテーマで、幼稚園児の指導をおこなうことを想定し、草もちの作製をおこなった。タケ、ササの来歴、利用法について講義、能動的に学修するアクティブ・ラーニングとして、五感を活用した実習をおこなった。

なお、今年度はコロナによる緊急事態宣言を受け、講義は2回目以降遠隔となったため、教員が実習園で上記に関してのビデオ撮影などをおこない対応した。

○研究活動

人間発達環境学研究科の教員ならびに学生が研究と論文作成のため、本実習園を活用している。

1) 非在来樹種の埋土種子発芽実験

神戸市立森林植物園内で植栽されている非在来樹種の実生発生と拡散を調査するため、実習観察園ガラス室にて埋土種子発芽実験を行った。植物園より採取した土壌サンプルを 33 区画設定し、各区画の発芽状態を 2021 年 4 月より観察した(現在も継続中)。これまでのところ合計 266 個体、24 種の発芽が確認されたが、すべて在来種であり、非在来樹種は無かった。長期休眠種子の発芽可能性があることから、引き続き実験、観察を行う。これまでの成果により、修士論文「森林植物園における非在来樹種の実生逸出の実態把握と今後の植栽管理への提案」の作成を行った。

利用者：大学院生 1 名、大野朋子

2) ツユクサの栽培実験

人間発達研究科の M2 の「修士論文研究」の研究(指導教員：丑丸敦史)として、人間発達環境学研究科の施設である実習観察園に設置した温室内で栽培したツユクサを対象にした研究を行なった。里山および都市部の水田に生育するツユクサ集団から実生を採取し、温室内のポットに実生を植え付け(4-5 月)、結実期(10 月中旬)まで温室内での生長および開花の調査を行った。この研究では研究補助として、発達科学部・国際人間科学部の学生数名の協力があつた。本研究成果は、本研究成果は、2022 年に行われた日本生態学会近畿地区会・例会(オンライン、12 月 19 日)において「ツユクサにおける送粉環境に適応した花形質の集団間変異」というタイトルで発表し、奨励賞を受賞した。

利用者：大学院生 1 名、研究科研究生 1 名、協力学部学生約 5 名

3) カンサイタンポポの栽培実験

人間発達研究科の M2 の「修士論文研究」の研究(指導教員：丑丸敦史)として、大阪府で採取したカンサイタンポポの植物体の栽培を温室脇で行い、開花の様子を観察した。一部の個体は野外へ運び送粉者の観察を行った後、また温室脇に戻した。本研究成果は、2022 年に行われた日本生態学会第 69 回全国大会(オンライン、3 月 14 日)において「カンサイタンポポの開花タイミングにおける性的対立の可能性」というタイトルで発表した。

利用者：大学院生 1 名

4) カラスウリの栽培実験

昨年度より行なっているカラスウリの繁殖様式の研究として、圃場の東と北のフェンス脇においてカラスウリの鉢植えによる栽培を行なった。ダンゴムシの発生や発育不良により、開花を確認できた個体は一個体のみで、来年度も引き続き栽培を行う必要がある。本研究では研究補助として、研究科研究生1名の協力があつた。

利用者：丑丸敦史，協力研究生1名

5) ハマヒルガオの栽培実験

受託している植物研究助成による研究として、伊豆諸島および千葉県・茨城県・静岡県の海岸において採取した地下茎から発芽したハマヒルガオ植物体の栽培を観察園ガラス温室内で行い、開花の様子を観察した。ハマヒルガオの生育は非常に芳しくなく、開花個体は非常に限られた。本研究では研究補助として、学部生1名の協力があつた。

利用者：丑丸敦史，協力学部生1名

○他機関の利用

以下の3つについて取り組んだ。

- 1) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 連続講座2021「園芸教室」の開催
- 2) 野菜探求プロジェクト～植と食の融合～ 神戸大学附属中等教育学校
- 3) 健康あーち HCセンター ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

1) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 園芸教室の開催

高齢化が進行している地域コミュニティにおいて、多世代が心身ともに健やかで希望に満ちた、安全な暮らしができるまちづくりは急務であり、住民が主体的に、多世代の交流を促進し、その中で課題を見つけ、学び、活動していく生涯学習の実践の場づくりが大事である。地域社会のこのような現状に対し、本研究科がもつ人的・物的・空間的リソースを活用して、どのような支援が可能か検討する、「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」を立ち上げた。実習観察園を活用した園芸教室はその一環の活動である。

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、2020年春より一時中止していた「秋の園芸教室」を2回再開した。80歳代までの多世代が参加し、参加者（30名）がグループに分かれ、それぞれのグループ毎に野菜や花の栽培を楽しんだ(図5)。

秋の園芸教室 11月13日(土)，12月18日(土)



図5 2021年11月13日開催



2021年12月18日開催
野菜栽培のための畝作り

2) 野菜探求プロジェクト～植と食の融合～ 神戸大学附属中等教育学校

テーマを「野菜探求プロジェクト～植と食の融合～」とし、ESD Food プロジェクトの活動の一環として行った。野菜の栽培、観察、収穫などを体験することを通して、野菜について探究し理解を深める。目的は、以下の知識やスキル等の獲得を目的としておこなった。

(1) 生産から消費まで食の循環を理解することができる。(2) 野菜について探究することができる。(3) 食べ物や食に関わる人々に感謝する心を育むことができる。(4) 地域の方々と交流することができる。

参加者 中等教育学校生9名、同校教員1名

利用期間：11月13日(土)、12月18日(土)

3) 健康あーち HCセンター ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

HCセンター、ヘルスプロモーション・健康行動支援部門の活動の一環として、健康あーちに参加している地域の子ども(6名)とその保護者(4名)を中心に、野菜や草花の育て方について学び、種まきや苗の植え付け、収穫体験などを行った。また管理栄養学科の学生(3名)や国際人間科学部の学生(2名)も参加し、子どもや保護者との交流を行いながら、食体験を深めた。大阪青山学院大学の教員(1名)、本学教員(1名)が活動の引率を行った。

6月18日 夏野菜を育てる(種まき)

8月27日 夏野菜を育てる(収穫)

9月24日 サツマイモの収穫体験、野菜や柑橘の手入れ

12月24日 柑橘の収穫

来年度は地域や学校等の要請等も積極的に受け入れ、授業ならびに研究で、利活用を図る予定であ

る。

(実習観察園運営委員長 近江戸伸子)